



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	新＜起承転結＞考I
Author(s)	高橋, 吉文
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 55, 39-118
Issue Date	2009-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38486
Type	departmental bulletin paper
File Information	TAKAHASI-4.pdf



新〈起承転結〉考Ⅰ

高 橋 吉 文

要 約

I 複数の文章の集合からなるテキストは、配列によってその総体的な意味を構築し、発信する。本論は、まず新聞の多様な記事を分析素材として、テキストの配列や諸要素の関係、構成原理を解析し、〔Ⅰ問い、Ⅱ事情説明、Ⅲ転換・新説、Ⅳ答え〕の四分節構成法を析出し、その基本的原理を東洋の古典的配列である起承転結と重ねあわせる。

II だが、〔序論、本論、結論〕の三分節構成原理を古典古代より継承する西洋近代の論構成が主流となっている現代、その起承転結構成は転における論の破綻、首尾一貫性の欠落が災いして、強く忌避されている。

III それは、しかし、従来の転に対する理解に難があったからで、その転調を先行研究に対する新機軸や新実験と解する時、災いは論理的に不可欠の必然へと一変する。

IV つまり、ⅠⅡⅢⅣから構成されるテキストをⅢを中心に配置した問答装置として読み替えることによって、起承転結構成は、科学論文のみならずあらゆるテキストを秘かに律している物語と思考の母型回路であることが明らかになるのである¹⁾。

目 次

- | | | |
|-----|-----------------|-------------------|
| I | 1. 配列の遍在一死して、成れ | 8. 起承転結蔑視パノラマふたたび |
| | 2. 四分節構成法 | 9. 新〈起承転結〉発進す！ |
| II | 3. 起承転結蔑視パノラマ | 10. 遍在するⅠⅡⅢⅣ構成 |
| | 4. 西洋の規範 | IV 11. 思考マシーン瞥見 |
| III | 5. 自分の身体で確認する | 12. 物語と思考の死 |
| | 6. 思い入れの強度 | 13. 死して、成れ！ |
| | 7. 興味の中心をⅢに配列する | |

1. 配列の遍在一死して、成れ

ウンベルト・エーコは、その『開かれた作品』（篠原資明訳、青土社、2002）において、情報系の開放・拡大と、その新しいカオス状態に秩序と物語を与える芸術の作業との綱引きを鳥瞰してみせたが、技術がいかに発達しても、人は物語なるものに繋留されており、その強固な呪縛から逃れることはむずかしい。自分をどう描き出すか、他者をどう組み入れるか、自分を世界の中にどのように位置づけ得心しうるか、そのことへの生々しい問いかけと納得のいくリアルな答えは物語によってしか示されえないからである。

私たちは、自分の所属する社会によって織りあげられた物語や、生きのびるために自身捏造的に紡ぎあげたいくつもの物語に、繭さながらにすっぽりと包みこまれて生きている。アウラの消失による存在の平準化と断片化（ベンヤミン）、資本主義による事象の一次元化（マルクーゼ）、自然による人間の文化的存在の無化（キットラー）、データベースによる精神の平準化（東浩紀）等、意識や主体性、物語の消失が昂進している事実は否定しがたいとしても、意識や精神が築きあげたパラダイム（準拠枠）やイデオロギー（観念体系）の伽藍や物語を砕こうとする多彩な営為も、例えば20世紀前半のカフカやベンヤミン（『パサージュ論』今村仁司、三島憲一訳、岩波書店、1993-1995）の断片化への強靱な意志と同じで、つまるところ太古より継承されてきた原基的な母型回路の物語に強く繋留されている。むしろそのように強い不可視の物語への秘かな繋留があればこそ、カフカたちは、それまでの時代がパラダイムとして君臨させてきた可視的な物語の大伽藍を躊躇なく瓦解させることができたのである。

カリフォルニア大学バークレー校の認知科学者ジーン・レイヴ Jean Lave は、『日常生活の認知行動一ひとは日常生活でどう計算し、実践するか』（無藤隆、中野茂、山下清美訳、新曜社、1995）において私たちの単純とみえる日常生活での種々の計算における複雑なメカニズムを明らかにしてみせた。同じように、庭仕事や料理、仲間との発表や旅行等、私たちが何かを実行しようとする際にも、私たちは、人により濃淡の差はあれ、ある種の手順に類したものを無意識のうちに用いているものである。その中の有意識的な手順を教育学者の斉藤孝氏は「段取り力」と名付け、誰でも基本的には持ち合わせ、普段知らずして活用している技術と評している（『段取り力—うまくいく人はここがちがう』ちくま文庫、2008。『原稿用紙10枚を書く力』大和書房、2004）。例えば、カレーライスを食べるには、素材の買い物、下ごしらえ等の準備段階がまずあって、その上で本格的な調理という工程がなされる。その後でできあがった料理をテーブルに並べ、それを食べるプロセス、皿洗い等の後片付けの工程がやってくる。誰であれ、この種のプロセスを無限にこなさなければ、基本的に生きていくことはできない。

調理そのものに絞ってみても、素材や調味料をどの時点で入れるのか等の後先の順番をはじめとして、料理には複雑な手順があり、その微妙な違いが各地域、各家庭に独自の味というものをつくりだしていく。そうした本来複雑きわまりない調理が円滑に進められるのは、長い時

間にわたる試行錯誤から帰結した知恵を集約した伝統という明確な道筋が、マニュアル・段取りとしてあらかじめ教導・継承され、人々に明確に了解されているからなのである。

私たちが無意識に行っている多くの動作、例えば歩くということ、バランスをとるということと一事をとってみても、AIBO 君が示すように、無数の順序や配列の凝縮された非常に高度な技芸であり、私たちの体や無意識はその配列の錯綜状態を自在にこなしている。私たちの日常世界には意識的、無意識的な無数の手順や段取りがひしめいているのである。こうした段取りは、最終的な目的・到達点に収斂する全体図の中に、個々の作業、個別の要素をどのような順番で、どのような力配分で配置するのかといった配列・編集の問題に畢竟達着する。現代明らかにされつつある遺伝子配列の神秘的な威力をもちだすまでもなく、人は、意識するしないにかかわらず、配列という高等技芸を無数に用いていわばアクロバチックに生きているのである（松岡正剛『知の編集工学』朝日文庫、2001）。

それよりははるかに意識的な技術であるという違いはあるものの、実は文章においても事情はほぼ同様である。一つの文は、複数の個の単語が組み合わされてある意味を形成し、コミュニケーションや自己表出を可能ならしめるものである。文は複数の単語の編集・配列によって成立する。その文が集合してまとまりのある段落や、段落の集合したより大きなテキストが成立する。それらを総体として意味あるものたらしめているのも、その配列・編集である。テキストは、文や段落、節や章等の配列によって自己を編集しているのである。

言葉を語ることでできない嬰兒においても、配列はコミュニケーションと自己表現の基本をなす。動物的起源を濃く内包する人間にとって、光と闇という明暗、下降と上昇という上下運動、左右のバランスによる対称、消失と出現という死と蘇り等の最も単純な二項対立原理は、嬰兒期における膨大な訓練の蓄積の末にいつしか自明のものと化して、心身に深く沈潜かつ装填され、高度な思考を行う精神の意識されない礎となっていく（マーク・ジョンソン『心の中の身体：想像力へのパラダイム転換』菅野盾樹、中村雅之訳、紀伊国屋書店、2001）。

その意識されない礎、見えない母型回路は、幼児向け絵本における我が国発の不滅の傑作、400万部の売り上げを誇る驚異のロングセラー絵本『いない いない ばあ』（松谷みよ子文、瀬川康男画、童心社、1967、改訂版1981）にこの上ない簡明さで示されている。赤ん坊たちがそれこそ全身を震わせて爆笑するこの絵本は、[いない／いる]の単純な二項の反復だけから構成されている。例えば、「くまさんが いない いない」（熊さんが両の目を手で覆い隠している）。ところが、ここで頁をめくると、／手をどけた熊さんが目を開き、明るく「ばあ」と叫ぶのである。[off/on]の二項交替の反復からのみなるこの驚異の構成は、私たち人間にとって、ひいては生命にとって最も根源的な[存在しない（死）／存在する（生命）]の交替劇、すなわち[不在（闇・恐怖）／存在（光・喜悅）]という思えば背筋も凍る実存的な交替劇を、この上ないほど単純な二項対立へと圧縮したものである。嬰兒たちが、「いない いない」で緊張と期待をぐっと高め、次の「ばあ」の爆発と解放の瞬間に高らかに笑う光景は、人が自己の存在の

不安に怯え、存在肯定による不安の解消をどれほど強く本能的に求めているか、そしてその根源的な存在様態（生か死か）を嬰兒たちがいかに熟知し、そこにいかに強くこだわっているかを、私たちにまざまざと示してくれる。

私たち人間や生命一般にとって深刻な「非在／存在」や「死滅／生存」すなわち「死／生」を凝縮して提示しているこの「いない いない／ばあ」的対称からは、「死の闇／新生の光」等の、これまた根源的な二項対立と、それが循環する縄文的な世界観が導出される。生や光は命を産出する性の原理として、死や闇は生命を破壊する暴力のそれとして、二つの原理は対峙し、時には相互に不可分のものとして生から死へ、死から生へと循環する。古代日本の縄文時代やそれを継承するかにみえるアイヌの人々の円環的な生命観も、そうした思考法のひとつのあらわれである。性と暴力が主役となって週刊誌やワイドショーを賑わすのも、それらが「いない いない ばあ」と不可分の、生命一般や人間の生存を司る二大原理そのものであったからに他ならない。その二大原理君臨の峻厳さは、生命工学が長足の進歩をとげ、現代SFの頂点に君臨する豪州のSF作家グレッグ・イーガン²⁾の鬼面人を驚かす未来の生命操作ビジョンにもかかわらず、依然揺るぎないものとして私たちの存在を重く規定している（『万物理論』第1章他、山岸真訳、東京創元社、創元SF文庫2004、原作は1995）。

今から5ないしは3万年前頃の旧石器時代後期、「文化のビッグバン」と呼ばれる大いなる進化上の飛躍が起きたといわれている。そこにおいて最も画期的な出来事は、例えば隠喩のように、あるジャンルの事象に別のジャンルの事象が重ね合わされ第三のものを生み出すという高度な連結への開眼である（ミズン『心の先史時代』杉浦俊輔、牧野美佐緒訳、青土社、1998）。現生人類ホモサピエンスたちは、その開眼の延長線上にひとつの物語的なエピソードAに異なるエピソードBを繋げる物語連鎖に想到し、エピソードAはエピソードBに、それに第三のエピソードCや第四のエピソードDが、数珠のように連なり、物語は量的な拡大へと走り出す。連鎖は当初ABCDと横にただ繋がるだけの並列的なものであったろうと推測されるが、やがて複文の主節と従属節のように縦にヒエラルヒーをつくるツリー状の複雑な連鎖関係へと発展していく²⁾。日本をも含むユーラシア大陸のモンゴロイドと、その旧大陸からアメリカ大陸へと渡ったモンゴロイドたちとの間に伝承されている神話や民話等の物語構造での強い類似性から推測するに、彼らがベーリング海峡を越えてアメリカ大陸のアラスカに渡ったと推測される今から1万数千年前の段階ではすでに、物語群を高度に組み合わせる思考法は十分に成熟していたに違いない³⁾。

それら太古の物語の基本は「いない いない ばあ」の変奏、すなわち生から死の領域への下降プロセス（▼）と、その死の領域から生の明るい領域に向けての上昇（▲）の二つの相反する部分の分節と結合にある。その物語の運動軌道は、物理的な地形でのそれとしてリアルにイメージされ、死は、光さす生の高所から谷底の闇なす死の領土に向かう下降や転落として、すなわち崖や坂を下る身体的行為（▼）として表象される。そして、その死の領域から生への

蘇り・復活は、それとはちょうど対称的に、闇の死界から光満ちる生の喜びの地へと上行する登攀（ㇿ）として表象される（高橋吉文「西洋文学における冥府行」、『北大時報』No.400、北海道大学、1987年7月）。

だが、『古事記』のイザナキ神が愛する妻イザナミを求めて行き還りしたように、死者が生者として蘇るためには、先に生から死へと下った同じ坂道（よもつひら坂）をもう一度、但し今度はそれとは逆方向に上行しなければならない。かくして、物語は後半において転落（ㇾ）から蘇り（ㇿ）へと反転する。その二つの相反する運動と行為がひとつながりの物語として語られる時、その上下での下降・上昇運動に物語内の時間進行や、それが物語られる時間進行が掛け合わされると、ㇾㇿというV字形状のプロセスすなわち「V字プロセス」（高橋）が現れてくることになる。いいかえれば、人にとって最も原基的な現象である死と復活を描く「いない／いない／ばあ」「off/on」の物語は、必然的に前半と後半とでベクトルが逆となる相似形をつくる。前半の死と後半の新生とが、シンメトリー（対称形）状に配置される対称性構造をとるのである。

太古や古代の口承文芸の物語であれ、ダンテやシェイクスピア、近代のゲーテ、現代のマンやブルースト等の西洋の文学であれ、あるいは江戸時代の芭蕉による紀行文『奥の細道』であれ、さらには近代日本文学の双壁といわれる鴎外や漱石の文学であれ、彼ら天才たちを途轍もなく高度な創造行為へと駆りたてていた基本原理も、まことに単純そのもの、太古の新石器時代の語り手たちや赤ん坊たちを突き動かしていたあの生命蘇生を求める激しい欲動といささかの違いもない。極めて単純な原基的図式にすぎないそのV字状の軌道（深層物語）に庇護され、その上を自信に満ちて動いていくことによって、それぞれの時代や社会の論理や感情（表層物語）と葛藤し、表層と深層が入り組む複雑かつ豊かな作品が生み出されていったのである。

文字を知らない人々に親しい素朴な昔話や古代に生み出された壮麗な神話から、西洋の文学や美術、近代日本文学、現代思想にいたるまで、物語は多様な形態をとるものの、それらの基本となっている論理はいたって単純なものである（高橋吉文『グリム童話 冥府への旅』白水社、1996。同「西洋文学における冥府行」1987年）⁴⁾。その回路は、幸か不幸か、私たち凡庸なる者たちの意識の背後に隠されている。だが、それと同時に、論構成の基本回路として私たちの日常に遍在かつ顕在している。人々が文章を書く、何かを表現するといった行為を行う時、人類という生き物の身体に基づいた不可視の原基的母型回路（V字プロセス）が背後で秘かに律しているのである。

2. 四分節構成法

テキストは、どのようなものであれ、それが発せられる時、書かれる時、読まれる時、語り手や書き手の意識や無意識との区別に関わりなく、まず問いと答えすなわちQ&Aの問答形式

として構築されているものである。ある謎や疑問が存在し、それを解明しようと人の心や精神が動きだす時、文章群すなわちテキストが始動する。弁論術に関してアリストテレスが記しているように(「4. 西洋の規範」)、文章は基本的には一つの問題提議として発せられ、それに対する答えを暗に陽に要請しているのである。その問答装置の問いにあたる部分を仮にAとして記号化してみると、それに対する答えの部分はBと記号化しうる。それは、Aに対応して解答Bが是認ないしは導出される順接関係A→Bか、あるいは、問いにおける問題解決不能状態A(－)が、答えでは問題解決成功B(＋)となる逆接・対立の関係A/Bとして結果する。

しかしながら、問いAと答えBだけでは、考察というにはあまりにも短絡的にすぎる。問いAがなぜ問われなくてはならないのか、その事情や所以、それを解こうとしたこれまでの試行の経緯に関する情報がなければ、問いAはただの眩きに終わり、第三者にないしはその第三者を自己の内面で代行する問いを発した自己自身に対して問答を遂行する必然性を獲得することはできない。それゆえ、その情報提供・事情説明部分を仮にCとして中間に挟むACBという配列が、なかば自動的になかば強制的に成立することになる。

だが、問答装置ABにとり必須であり、そしてそれゆえ最も関心のあるのは、情報提供を行うCの部分ではなく、答えBをもたらしうる解明部分Dである。Cの情報提供を承けて、その不十分さを解消し新視点を提示しうるDがあつて初めて、結論部分Bが可能となる。問答装置はつまり、ACDBの要素を基本的構成要素とし、そしてその順序で進行することが求められる。問答装置ABとは、ACDBの配列をもつ問題解決装置であつたのである。

とはいえ、このACDBといった記号的記述は、問答ABの設定から考察をはじめたために順序がもつれ、いささかわかりにくいかもしれない。そこで、その配列を明確にする意味で、上記のACDBをローマ数字のI II III IVに置き換えることとする。すると、問答装置としてのテキストは、I問いに対してIV答えが求められ、かつシンメトリーのように対応するものとして現れる。

I 問い・仮説提示	A
II 事情説明・情報提示	C
III 新説提示・反論展開	D
IV 答え・結論・仮説証明	B

Iは問いかけや仮説の提示であり、IVはその答えないしは仮説の確認や是認となる。そのIとIVを可能ならしめるために、それら問いと答えのI IVを外枠として、その内側にII事情説明とIII新説提示・新基軸・新見解の展開とを対比的に配置する。だが、IIとIIIは対比的でもあると同時にある意味連続的でもある。なぜならば、IIとIIIは、一方では既存の情報／新説提示というように相反する対照的關係にあるとともに、他方においては、IIがバード・アイ(鳥の目)

ともいうべきワイドな鳥瞰部分をなし、Ⅲの新機軸提示部分が、Ⅱの鳥瞰行為に基づき照準がある特定のテーマに集中的に絞り、カメラがいわば大きくズームするところというように、一種連続的な関係にもあるからである。そして、Ⅲにおけるそうしたズーム行為こそがテキストのハイライトとなって、Ⅰ問いへのⅣ答えを初めて可能ならしめるのである。

このⅠⅡⅢⅣという問答装置（テキスト）において、ⅠⅣの外枠部分はいうまでもなく、具体的な情報提供を行う鳥瞰部分のⅡが欠けても、テキストのハイライトとして問題解決を実際に遂行するⅢ新視点が欠けても、問答行為は十全には追求されえない。Ⅱがあつてこそ、その現状の不十分さに対決・解決するものとして、新奇性を帯びたⅢの考察の重要性が明確に浮かびあがりうるからである。したがって、どのようなテキストであれ、それがテキストとして表出されようとした瞬間、語り手や書き手の意識無意識的にかかわりなく、自動的にⅠⅡⅢⅣという四分節構成法を起動させずにはいないのである。

その四分節構成法において、ⅠとⅡは問いの磁圏にあり、答えに無力ゆえ否定性と退行に暗く染められている。ⅢとⅣは、それとは対照的に解答遂行可能な、いわば肯定的な上行の磁圏にある。ⅠⅡは否定性（暗）／ⅢⅣは、肯定性（明）の二項原理対立構造におかれているのである。問答装置のこうした基本的構造は、下降（↘）と上昇（↗）とからなる人類の母型回路、すなわち死と復活とが対称的に配置されV字状に軌道進行する「V字プロセス」（↘↗）と強い親和性を示すのである。強い親和性というよりは、その根源的な母型回路の記憶に基づき東洋において新たに築かれた文章回路が、東洋伝来の四分節構成法〈起承転結〉であるというべきかもしれない。

本論は、ⅠⅡⅢⅣ四分節構成法という思考回路が、人類に原基的回路として遍在かつ伏在し、人々が創りだす諸々のテキスト群を秘かに、そして異常に強く律している隠れたメカニズムを明らかにし、四分節構成という形として現れる母型回路に基づいて解析することが、さまざまなテキストの意味をいかにより深く掘り起こし、新しい姿へと導く探照灯になりうるかを、具体的に証明しようとするものである。

とはいえ、そこで掘り起こされるのは、従来伝承され文章の規範として頻々と称揚されてきたいわゆる起承転結構成ではない。その理解には決定的な難があり、現在基準とされる欧米の論理的思考からみるならば、転の部分が論理破綻として強い違和感を与えるからである。本論が提示しようとするのは、旧来の誤解されてきたと考えられる起承転結に対する理解を正し、人類に普遍的な物語論理の典型的な発露形態として読み直された新〈起承転結〉構成法の方である。本論考は、つまり、論構成原理を起承転結という四分節構成法として析出し、それを原基的な物語構造の一表出形態として読みかえ、その決定的重要性を新たに評価しようとするものである。ちなみに、ここにいう物語構造とは、神話と昔話を起点とし様々な文学作品の内に隠される形で構築される、と80年代初頭から筆者高橋が主張し論証してきた配列法（「V字プロセス」高橋説）を指す。

具体的な作業としては、主に新聞に掲載されたさまざまなジャンルのテキストを取りあげ、現代のテキストの内奥に秘匿され駆動している論構成の母型回路ⅠⅡⅢⅣを析出する。その上で、それが原基的な回路（新〈起承転結〉）として遍く潜在かつ顕在している事実を示し、その母型回路のもつ秘かな汎用性を証明しようとする。

新聞を素材として取りあげ、そこにほぼ限定したのは、若者たちの情報源が近年 Web に深く傾斜しつつあるとはいえ、私たちが日常的に最も触れることの多い活字テキストは、新聞記事であると思われるからである。新聞に掲載される記事はまことに多岐にわたり、誰もが気軽に読めるコラムや生活情報から、高度な理解力を必要とする美術評や論壇時評、現代を解明する諸思想に関する論考にいたるまで、そのスパンの広大さにも驚くべきものがある。それゆえ、

各テキストの分量が分析して展覧するに手頃であるということ

多様であるということ

現代に一般的なテキストに満ちているということ

この3点から、本論は、日本において最も一般的な二大新聞、朝日新聞と読売新聞の二紙の記事を素材として利用する。他紙誌、例えばスポーツ新聞等も、官能記事等特異なものがあるものの多様性に乏しく、そうした記事もつまるところ同じ基本構成をとると判断しうることから、ここでは例として採用していない。日本語テキストの分析を目的とする本論では、海外誌も除外している。ただし、論文後半・末尾に例示したヘルダーリンの詩やベンヤミンの論考の分析からも推測されうるように、西洋文化もこの母型回路の呪縛から自由ではありえない。

筆者は2006年から2008年の間に約4,000程の記事の構成を分析したが、本論ではそこからアトランダムに二十本弱を具体例として取りあげる。引用した各掲載記事は、例えば事例①として出典と記事の題目ないしは見出しを記した後、記事全文を引用し、さらにその後に構成図式を付記する。引用した原文は、内容に即して分節する必要から、各塊の冒頭にⅠⅡⅢⅣのローマ数字を付し、その塊（パラグラフ）が帯びる構成機能を意識的に明示している。またそうした構成を見やすくするために、各分節の切れ目には一行ずつ原文にはない空行をあえていれている。ローマ数字ⅠⅡⅢⅣに付託された機能は、すでに上に記したように次なるものである。

Ⅰ 問い・問題提起・仮説提示

Ⅱ 事情説明・先行研究

Ⅲ 転換点・新機軸・主題の深化

Ⅳ 答え・問題解決・仮説証明

本文に付記した構成図式ではさらに、原文に伏在していると判断した分節要素も、例えば「(ト

コロガア〜)」「(グシュン)」といった接続詞等を、おそらくはアカデミズム読者の顰蹙をかいつつも、構造の屈曲をより立体的に浮き上がらせる極めて効果的な手段として、女子高生たちに私淑しあえて補足している。

そうした平易な諸事例の構成分析の前後には、起承転結を否定する学術論文において規範とされる三分節構成法（序論・本論・結論）推奨例を列挙する。最初は起承転結蔑視のパノラマとして、後の方では、それら三分節構成法の意識されぬ実相すなわちそれら論文の書き方を啓蒙する諸著や学術論文の思考法に隠された基本的誤解を明らかにするものとして提示する。その後ふたたび、新聞等から多様な事例を引用して分析し、新〈起承転結〉原理が多様なバリエーションをもって遍在している可能性、及びそれによる目から鱗の新しい理解例を示唆する。

3. 起承転結蔑視パノラマ

テキストを分節する構成法として私たち日本人が即連想するのは、東アジアに伝統的な起承転結である。東洋、とりわけ日本において人口に親炙したこの起承転結という形式は、古代中国すなわち唐の時代（8世紀）に完成された漢詩（唐詩）の一形式である五言絶句の詩論に由来するものである。

しかし、漢詩によるこの起承転結は、詩的な対比の妙を生かすものではあるが、論理展開の面で見えていくと、せつかく〔Ⅰ起、Ⅱ承〕と順調に持続・進行してきた論理の直線的な運動がⅢ転において非論理化し、論理がむざんにも破綻する。それまでのリニアル（直線的）な論進行が、「ところで」という接続詞により一挙にどこかへはじきとばされる。そのため、文章の書き方を薫陶する書物では、従来この起承転結形式が推奨されることが多かったものの、近年は風向きが変わり、起承転結の有効性には逆に深い疑いの目がむけられ、むしろ強く排除されることの方が普通となっている（戸田山和久『論文の教室 レポートから卒論まで』NHK ブックス954、日本放送出版協会、2004、p.92。山内志朗『ぎりぎり合格への論文マニュアル』平凡社新書、2007、pp.89-90。後者は、起承転結、序破急といった文章の型そのものを不要としている）。直線的に峻厳に進行するべき論理が、突然「ところで」と話頭を大きく転じられては、なるほどそれまでの論証は水の泡、まさに元も子もない。連想的な転調でも支障がないらしいそうした趣味的な随想とは異なり、業績や結果を明確に志向するビジネス文書（ビジネス・ペーパー）等の構成指導では、起承転結こそが悪しき例として忌避かつ排除される。それはひとえに、論理軌道の外へと気まぐれにはじけ飛ぶ困った君のⅢ転のゆえであることは、いうまでもない。

北島雅之『ビジネスは論理力：MBA では学べないロジカル・シンキング』（アスペクト、2008、pp.28-30）は、起承転結を論理性や一貫性とは異質なものとしている。中田亨『東大式ビジネス文章術』（朝日新聞社、2007）では、「起承転結形式はもどかしい」（pp.23）としてその使用を禁じている。「起承転結の形式は仕事の文書では使用すべきではない。テーマと結論は文章の始め

に書く原則に反するからである。」(p.23)「また、論点の移動が大きく、話の焦点が把握しにくいのが欠点である。特に、承と転の間で論理のギャップが生じやすい。」(p.24)

その悪しき起承転結にかわって提案されているのが、例えば計画主張型の文であれば、〔課題設定、方法、成算、実証計画・報告〕の配列である。これは、ひとつには、結果を至上命令とする社会での実践的な事実報告や提言では、余計な迂回を極力介在させない直線的で明快な表現こそが求められているからで、それに即応した短絡志向は、〔結果、経過、データ〕のⅣⅢという異常なまでに半減された半身形式へと自己を進化させる。例えば、そうしたビジネス文書作成の訓練を行う会社「ロジカルスキル研究所」のサイトにおける「論理的思考」の項には、「主張をストレートに論じる」こと、「三角ロジックで基本形を確認する」ことが前面に押し出されている。

論理的な主張には、客観的なデータと、そのデータと主張を結びつける理由付けが必要です。主張、データ、理由付けによる論理を三角ロジックと呼びます。主張に対する「Why?」という疑問の答えが、データと理由付け（合わせて根拠）で示されます。逆に根拠に対する「So what?」という疑問の答えが主張になります。

(<http://www.logicalskill.co.jp/logical.html>、2008.6.5、下線は高橋)

これは、データと理由付けを根拠として主張が直線的になさるうという考え方である。「ビジネス文章の翼：総論#1～社内文書・就職・昇進昇格試験作文のために。実用文や論文の書き方、文章力向上のツボ!」というサイトでも、それに類するストレートな書き方が奨められている。

ビジネスなど、実務で使われる文章を、ここではビジネス文章と呼ぶことにする。(…中略…) その必須の要素とは、書き手の解釈や意見＝自説と、自説を読み手に納得させるための論証だ。従って、「事実はこうであった」「こうあるべき・こうしたい」という書き手の自説に、「なぜならこうだからだ・こういう例がある」という理由説明や事例をつけて論証するのが、ビジネス文章というわけだ。

(<http://biz.syoron.net/soron/01.htm>、2008.6.5、簡略化と下線は高橋)

このシンプルな二段方式は、アリストテレスやキケロたちが弁論術において提唱していた〔問題提議と立証〕のみという図式と似ているが、「ビジネスのレポート・報告書に多い構成法」では序論すら省いた〔結論（結果）、本論（経過）、+添付資料〕の二段構成になる、と河合正義著『[新版]見てわかる! 図解文章の書き方』（実務教育出版、2002、pp.96-97）にはのべられている。こうした直接的な因果関係、即効性のみを重視する思考法は薬物依存患者のような趣を呈

し、俊敏な即応性が死命を制する高速社会の中では、速度の遅い全体的思考は自然回避されていくのかもしれない。

だが、異物の介在を極力排した「問い即答え」というファストフードにも似た極めて直接的な構成は、実は学術論文においても今や常套的なものでさえある。石坂春秋(教育工学)著『レポート・論文・プレゼン スキルズ』(くろしお出版、2004)中の「本論(各論)の書き方」を見てみると、「問題提起、対応策の仮説呈示、資料・データ説明、論証、結論」となっていて、ひたすら結論に向かって一直線という趣である。

こうしたストレートな論理構成は、原則的には西洋近代科学の実践的な姿勢から歴史的に確立された欧米の学術論文と、ある意味共通したものである。John M. Swales & Christine B. Feak 著の *Academic Writing for Graduate Students. A Course for Normative Speakers of English*. Michigan Series in English for Academic & Professional Purposes, The University of Michigan Press, 2001, pp. 57 では、例えば「問題 Problem、経過 Process、解決 Solution」の三段階方式となっていて、ビジネス文書とほとんど異なるところがない。

学術論文には、いうまでもなく国際的規範としてシカゴ・マニュアル等がある。けれども、論構成に関しては正直そこから学びうるものはほぼ皆無に近い⁵⁾。例えば、そのシカゴ・マニュアルに基づいた櫻井雅夫(国際経済法)著『レポート・論文の書き方 上級 改訂版』(慶応義塾大学出版会、2005)には「前文、本文、参考事項、後文」とあるだけで、ロン・フライ著『アメリカ式論文の書き方』酒井一夫訳(東京図書、1994)第6章「情報を組み立てる」にしてもそれと大差ない。「論文文には決まり切った1つの構成(organization)というものはない」(p. 129)と断言する上村妙子・大井恭子『英語論文・レポートの書き方』(研究社、2004)も「序論、本論、結論」と記す程度で、あまりにも曖昧である(pp.129-130、207-225)。

ビジネス文書にとどまらず、欧米式の配列に準じる論文記述においては、問題となる起承転結は、これまた伝統的な序破急形式同様、ほとんど門前払いの状態に近い。花井等・若松篤『論文の書き方マニュアル：ステップ式リサーチ戦略のすすめ』(有斐閣、2000)では、論文は起承転結構成をとらずに「序論・本論・結び」の三段構成をつかうべしとされる(pp.45)。論文本体は「問題提起、主張、論証」からなり、それに「まとめ」がつくとする戸田山和久(科学哲学)著『論文の教室：レポートから卒論まで』(NHK ブックス、日本放送出版協会、2004、pp.84-92)においても然り(p.92)、河野哲也『レポート・論文の書き方入門 第3版』(慶応義塾大学出版会、2007、p.41)においても然りである。森村稔著『自己プレゼンの文章術』(ちくま新書644、2007)は、文章の構成法の基本として起承転結と序破急を称揚し、序破急は「導入・展開・結末」の三段階という論文に標準的な構成で、「導入が問題提起、展開が本論としてデータ分析や考察を行うところ、結末に結論が来る」と評価しつつも、起承転結や序破急といった「これらの構成法には、実は失敗の危険性が潜んでいるのだ。」(pp.123-125)と留保がつけられている。厄介な転において人々がひどく躓くからである。野口悠起雄『「超」文章法』(中公新書1662、

中央公論新社、2003)では、「論述文の場合、これに従う必要はない。むしろ「転」のところで別の話題が現れると(あるいはそれまでの論理展開が覆されると)、読者は当惑する。」として起承転結を退け、〔序論・本論・結論〕の三部構成を奨めている(pp.95-97)。「問題提起、問題範囲設定、先行研究批判」を行う序論部に続いて、本論で仮説が提示され、検証される。その結論及び課題等が結論部で論じられる。木下是雄『レポートの組み立て方』(筑摩書房、2003)では、特に一節をもうけて起承転結に対する批判を行い、「心情に訴える」漢詩の表現形式と論文の組立とは異なるものであることを強く主張している(pp.117-121)。論文のとるべき構成は概要プラス〔序論・本論・論議〕の三段構成であり、結論を含む概観がまずなされた後に本論の主張があり、最後にその本論を検証する論議で締めくくる。但し、本論にはいわゆる結論もすでに付随し、最後の議論・考察部分では、本論の内容が客観的に検証される、という布置である。〔序論・本論・結論〕とは異なるとされているが、序論で結論も先取りされ、本論にも結論が部分的に付記されていると考えれば、〔序論・本論・結論〕の三分節型の変形であることは明らかである。

古郡廷治著『論文・レポートのまとめ方』(ちくま新書122、筑摩書房、2005)が模範として呈示している社会科学論文の本文構成も〔序論、本論、結論〕の三分節法である。奥田統己他著『読みやすく 考えて 調べて 書く ～小論文から卒論まで～第2版』(学術図書出版社、2005)も、〔序論、本論、結論〕の三分節構成を推奨している。但し、序論は〔1背景説明、2問題提起、3目的・方法〕という、ⅠⅡⅢⅣ構成でいえばⅡ→Ⅰと進む転倒した記述法になっている。古典的指南書のひとつといえる澤田昭夫『論文の書き方』(講談社学術文庫、2007)も〔序論、本論、結論〕の三段構成を良しとする(pp.155-156)。斉藤孝(社会学)、西岡達裕著『学術論文の技法 新訂版』(日本エディタースクール出版部、2005)も同様に、起承転結に対して〔序論、本論、結論〕の三部構成が推奨されている。本論は〔材料と手続き・方法、結果、考察〕の3パターンからなり、その〔材料と手続き・方法〕は各種資料の処理法を示し、その〔結果〕に材料を処理した結果が数字やグラフで表される。そして、最後にくる〔考察〕はその結果について議論する箇所、「論文のもっとも核心的な部分」(pp.66-77)とされる。〔問題提起、意見提示、展開、結論〕の四分節構成法を提唱する樋口裕一著『ホンモノの文章力ー自分を売り込む技術』(集英社新書0056E、2001)も、事実上は〔Ⅰ問題提起・意見提示、Ⅲ展開、Ⅳ結論〕の三分節構成となっている(pp.47-55)。Ⅰの意見提示にⅡ事情説明が幾分混入しているとはいえ、Ⅱ事情説明や先行研究への明確な意識が欠落しているからである。時事教育研究会編『新々版 論文・レポートの書き方と作文技法』(画文堂、1990)も〔序論・本論・結論〕を基本とし、その変形として起承転結も容認されている(pp.148-154)。市販され流布しているこれらの諸著から察するに、どうやら〔序論、本論、結論〕の三分節構成が欧米及び現代日本の主流となっている、と考えても間違いはなさそうである。

4. 西洋の規範

あるひとつのまとまりを有した文の集塊を、テキストと呼ぶこととすると、それが意味をきちんと伝達しない断片や感情表出に留まるのでない限り、ひとつのテキストは内包する某かの論理に拠って語られる。そして、それら文章群を統括する語りの論理は、諸文章のブロック群をどのような順番で配置するかという構成法として表出される。それらブロック群を分節し全体の構成を明示するシグナルのひとつとしては、例えば「それゆえ」「しかし」「あるいは」「なぜなら」といった順接・逆接等を導き出す接続詞等を挙げることができるかもしれない。それら接続詞をみずからの先兵として背後から支配しているものが、それらを配置・編集する論構成や物語論理である。

そうした配列等のレトリックを考察する西洋の修辞学や弁論術は、ソフィストたちと対決したプラトンの弟子アリストテレス（『弁論術』）やローマ時代のキケロ（『弁論家について 上、下』大西英文訳、岩波文庫、2005）等古典古代において確立され、その後中世のスコラ学や近代科学へと継承され、かつ錬磨されるが、奇妙なことに弁論術や修辞学において論の構成は特に重視されることのない、むしろひどく曖昧なものでさえあったというのが実態である。それでもアリストテレス『弁論術』（『アリストテレス全集 第16巻』山本光雄訳、岩波書店、1995）第13章では「〔すべての種類の弁論において〕是非必要な部分は提題と立証である」とされ、「予め事柄を述べる人はそれを証明するために予め述べるのである」、「これらのうち一部は提題であり、他の一部は立証である」と記されている（pp.244-245）。同じアリストテレスの『トピカ』（『アリストテレス全集 第2巻 トピカ 詭弁論駁論』村治能就、宮内璋訳、岩波書店、1976）「第八巻 弁証術の訓練」（pp.229-235）にも、論証の順序についてあやしげながら記されているが、そうした曖昧さは、キケロやアウグスチヌスの弁論術論においても変わらず（キケロ『弁論家について 下』pp.67-82。『アウグスティヌス著作集 6 キリスト教の教え』加藤武訳、教文館、1988、第二巻、第四巻）、修辞学の規範とされたディオニュシオスの『修辞学論集』、デメトリオス『文体論』⁶⁾、クインティリアヌス『弁論家の教育1.2』（小林英博訳、世界教育学選集96-97、明治図書出版、1981）等においても、それは同様である。それでも、古典的弁論配列は次のような七段構成を基本とするとされる。

exordium	聴衆の注意を惹く
narratio	背景を説明する
propositio	弁者の主張や論題・命題を紹介する
partitio	弁論の主要諸部分を予告する
confirmatio	主張を証拠立てる議論を行う
confutatio	論敵の見解を論駁する

peroratio 議論を要約し、聴衆に行動を呼びかける⁷⁾

この七つの部分は、しかし、〔主張の提示、展開と論敵の論駁、まとめ〕の三部分に集約することができる。古典的配列法（タクシス）の定式とされる〔1 序言 2 論題提起 3 説得立証 4 結語〕（野内良三『レトリック辞典』、国書刊行会、2005、pp.343-345）にしても同じことで、つまりは〔仮説提議、立証、結び〕すなわちいわゆる〔序論、本論、結論〕へと読み替えることができる。17世紀のフランシス・ベーコンによる帰納法（『ノヴム・オルガヌム（新機関）』1620年、桂寿一訳、岩波文庫、1978）の出現以後、近代科学が新たな道をたどったかにみえながらも、古典的な論証の型は、現代の科学論文等の規範 IMRAD、〔序論、実験方法、結果、考察〕すなわち〔序論、本論、結論〕構成へとほとんどそのまま継承されているといってもよいのである。

(…)現在の科学論文のスタイルは、300年以上の時をかけて少しずつ築き上げられたもので、IMRAD 方式と呼ばれる。IMRAD とは、Introduction(序論)、Methods(実験方法)、Results(結果)、and Discussion(考察)の頭文字をとったものである。この四つの section は科学論文の基本項目である。最初に Abstract(抄録：論文全体の短い要約)を加えたり、最後に Conclusion(結論：主要点のまとめ)を加えた形式を用いる場合もある。また、Methods の部分を Experimental としたり、あるいは Materials and Methods とする場合もある。ここで大事なことは、何のために研究を行ったのか、どんな方法で研究を行い、どんな結果を得たか、そしてその結果が研究テーマにとって、どういう意味をもつのかを、読者が理解できるように、各 section を構成することである。

まず、各 section の目的と、その相互関係について考えてみよう。最初に Introduction のところで論文の位置づけと概要を示す。つまり研究領域を明らかにし、なぜそれが重要なのか、どんな方法で研究を行ったかを説明する。ここで、読者は研究テーマの概略と重要性、そしてどのように研究されたかを知ることができる。つぎの Methods では、Introduction のところで述べたテーマをどんな試薬や機器、方法を用いて研究したか、具体的に詳しく書く。これによって、読者は結果を確かめたり、自分の研究のためにその実験を再現することもできる。Results では、Methods の中で述べた実験から、どんな結果が得られたかを示す。この section には、事実に基づいた新しいデータや情報が記載されるので、論文にオリジナリティーを与える上で一番大事である。最後の Discussion では、Introduction で示した研究テーマに関する結果の重要性を述べる。このような各 section はそれぞれ独自の重要な役割を果たしながら、互いに論理的、有機的に関連している。(ロバート・M・ルイス、ナンシー・L・ホイットビー、エバン・R・ホイットビー『科学者・技術者のための英語論文の書き方—国際的に通用する論文を書く秘訣—』東京化学同人、2004、p.12)

四つの section といいながらここでもその本音は、〔序論、実験方法と結果とを含む本論、そして結論〕の三段構成にあることは一目瞭然である。そうした三段分節構成への基本的で強い欲動は、出だしの文章 Introduction、本論 Body、結びの文章 End から構成される段落 paragraph の構成にもまたはっきりと露呈している (pp.14-16)。西欧の古典的論構成法は、つまりヘーゲルの正反合の三段階による弁証法の徹底的な貫徹（『小論理学』上下、松村一人訳、岩波文庫、1978）の例を挙げるまでもなく、古典古代以来脈々と生き続けているわけである。

それに対して、東洋に伝承された古代中国由来の起承転結なる構成原理は、中国、朝鮮、日本で、特に人文領域で従来隠然たる力をふるってきたものの、近年、西洋の学問の影響力が絶対となる学術部門、特に自然科学分野においては、蔑視かつ忌避される強い傾向にある。すでにふれたように、起承転結の転における論理の逸脱と首尾一貫性の放棄が、論理的一貫性を基本とする上記の欧米的思考とは齟齬をきたすからである。欧米的な実務的思考が顕著なビジネス文書で起承転結の凋落がはげしいことは、先に触れたとおりである。アカデミズムとビジネスの領域において、漢詩の詩法に由来する東アジアの起承転結原理は今や風前の灯火、ないしは過去の誤った遺物と化しているといっても過言ではない。

だが、本当にそうであろうか。古典古代来の西欧の弁論術による論構成が本当に妥当なものといえるのか。そして、それに依拠したその後の西欧の論構成法は本当に妥当なものといえるのか。なぜならば、そうした論理の基底となる、ないしはそれと著しい共通性を有すると考えられる西洋世界の物語論理（「V字プロセス」）の方は、下降（自己否定）と上昇（自己肯定）といった屈折した軌道を描き、必ずしもそのようなりニアル（直線的）な三部構成や順接的な軌道をとらないからである（高橋「西洋文学における冥府行」、高橋『グリム童話 冥府への旅』白水社、1996）。西洋文化や文学の原基ともいべき根源的な物語論理の軌道に照らしあわせて見ると、西欧が規範として掲げる IMRAD 論理構成はひどくあやうい幻影としてあらわれてくる。それと反比例するかのように、現在役立たずものとされている東洋の起承転結の示す四分節構成法こそが、人類に生来の自然な物語論理により正確に対応した、より十全な構成法として浮上してくることになる。但し、それは西洋の論理の方を称揚する者や従来の起承転結を推奨する人々が理解していた旧来の意味での起承転結ではなく、本論が提示するまったく新しい装いで読み替えられ一新された新〈起承転結〉としてである。そして、起承転結がその本来とるべき正当な姿で提示される時、その新しい論理と配置原理は、文系理系にかかわらず論構成を同一回路から導きだす。そこにおいて論文も随想も、小説も昔話も、思想書も新聞の軽いコラムも、すべて相同的な現象として並置されることが可能なものとなるのである。

だが、実際のテキストはどのように配置されているのか。新聞に掲載された多様な記事をまずは経めぐり、そこにおいて論展開はどのように遂行されているのか検証してみよう。その劈頭を飾るのは、室蘭のおいしい食に関する二題話である⁸⁾。

5. 自分の身体で確認する

事例① 注目の室蘭カレーラーメン

2006年7月3日 読売新聞 夕刊（北海道版）

北海 Doing 恵みの大地

ヒロ中田 リクルート北海道じゃらん編集長

I 道民向け情報誌の編集者生活もこの春で10年を超えた。「中田さん、道内はほとんど行ったでしょ」とよく人から言われるが、そんなことはない。知らないところ（こと）が多すぎるから、いまだに飽きもせず同じ仕事を続けているのだ。仮に今の仕事を20年続けたとしても多分同じ思いだろう。

II 先日、室蘭へ行ってきた。「室蘭カレーラーメンの会」が立ち上がったと聞いて表敬訪問してきたのだ。室蘭には54～55店のラーメン店があり、そのうち24～24店がカレーラーメンを出しているという。ぼくは「味の大王」しか知らなかったからびっくりした。

ラーメンの会会長は「味の大王室蘭本店」の小柳さん。あいにくその日は休業日で、副会長のお店に連れて行ってもらった。高台にある店の名前は「5ドルの夜景」。100万ドルの価値はないが、5ドルくらいはあるということらしい。

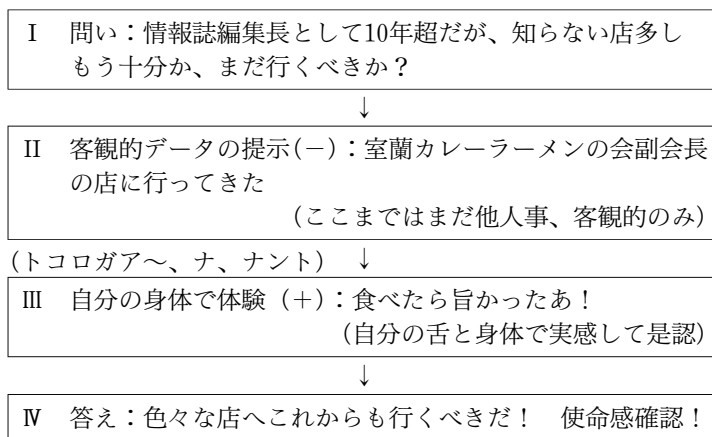
III 紙エプロン（10円）を付けておそろおそろ食べ始めた。^{うま}旨い！ 連れのT君に目で合図。彼も^{おい}美味しいという目をしていた。^{めん}麺はカレーとうまからむ道産小麦の特注麺。早來の豚を使ったジューシーなチャーシュー。ワカメ、メンマ、ネギ、タマネギ、モヤシ、キャベツまで入っている。うま味調味料は使っていない。

IV カレーラーメンの会に入っているラーメン店は21店なので、残りのお店も全店制覇してみたくなった。こんな旨いラーメンがあまり知られていないとしたら、我々メディア屋の責任だ。これからどんどん紹介していきたい。

文の構成は一瞥して明らか、Iに導入としての問いかけが、IIに事情の説明、IIIに実際の食味、最後のIVの部分にまとめ・総括が置かれている。IIの部分は二つの塊からなるものの、ともに実際に食味を行ったIIIの部分への前置きという機能においては同じである。この文章において要となるのは、いうまでもなくIIIの室蘭カレーラーメン初体験の瞬間である。じゃらん編集長のヒロ中田氏自身が自身の舌で、つまり自身の身体を直接関与させて体験したことがリアルに細かく語られている。実際に食べた時の様子が、ラーメンに関するデータ及び食味した時

の生々しい感激とを提示することによって語られているのである。それに先立つⅡの部分は、室蘭にあるというカレーラーメンに関する重要な情報を客観的に提供してはいるが、室蘭に赴いた経緯等のいわゆる実際に食する以前の状況が記されているにすぎない。その意味で一見客観的ではあるが、新奇なカレーラーメンについてのある意味他人の言葉を介した曖昧な伝聞の域を越えない。ところが、Ⅲにおいて事態は、実際に食したという生々しい身体的事件に一変する。味覚という非常に感性的な色あいの濃い身体にとって生々しい事件体験（賞味）と身体的感覚領域をくぐり抜けることによって、Ⅰ導入部分において問いかけていたものに対して、身体による判定が下される。これを図式にしてみると、こうなる。

図1 室蘭カレーラーメン図式



Ⅰにおける自問がⅣにおいて是認されている。Ⅰで問いかけてられていた、北海道内をさらに続けて廻るのは良いことなのか？に対して、Ⅳでは、どんどん紹介すべきだとして、情報誌編集者としての書き手自身の使命を新たに確認しているのである。その意味では、Ⅰの問いかけとⅣの答えは、Ⅰの疑問符？が、Ⅳでは肯定を示す感嘆符！に変えられているという違いがあるだけで、基本的にはⅠ＝Ⅳという構成になっている。Ⅰ問いはⅣ答えに等しいのである。その両極に挟まれたⅡの事情説明とⅢの身体的体験の部分は、Ⅰの問いを実際に検証しようとした部分になっている。Ⅱは客観的データによる検証、Ⅲは自身の身体を大きく参画させての検証実験となっている。Ⅱはそれゆえ、そこで提示されているデータが正しいかどうかは別として、まだ他人事であり、関心度はかなり薄い。少なくとも読者にとっての関心濃度は濃いいえない。ところが、その冷やかさもⅢに入るや一変する。ヒロ中田氏が自分の舌と身体を前面に押し出して、さらにいえば身体の五感を賭して、室蘭カレーラーメンなる新奇な料理を体験かつ検証しているからである。

それゆえ、この短い文章において最も重要な部分は、明らかにⅢでの料理描写と美味判定にあ

る。ⅡはⅢというその真打ち的行為へと読者を導くいわば露払いの機能を持ち、Ⅰの問いとⅣの答えも、もちろん必要であるとはいえ、極論するならばⅢへの付随物としてこそ配置されている。

そのような論の進め方を確認するものとして、室蘭の新奇な料理探訪記をもうひとつ、今度は朝日新聞北海道版から採りあげてみよう（下線は高橋）。

事例② 室蘭のかつ井は別盛りが常識？

2006年7月4日 朝日新聞 夕刊（北海道版）

えるむ通り しょっぶ 噂のランチ

Ⅰ “かつ井”と言えば、どんぶり飯の上にカツの卵とじをのせるのが、ごく一般的なスタイル…だと思う。でも、でも、それが豊平区のそば屋「札幌小がね」だと、ちょっと話が変わってくる。ここで、「かつ井」（880円）を頼むと、どんぶり飯と、卵とじのカツが別々に出てくるのだ。一体なぜなのか？

Ⅱ 「そもそもは、室蘭にある総本店が、昭和30年代に始めたやり方なんです。それが広まりましてね。室蘭や登別あたりでは、かつ井と言えば、別盛りが一般的なぐらいです」とは、店主の矢田勝義さん(63)。なんでも、総本店の初代店主がサービスで肉を大きくしたところ、ご飯にカツがのりきらなくなり、別盛りにしたのがきっかけなのだとか。サービス精神から生まれた、“室蘭流かつ井”というわけである。

Ⅲ ご飯にのりきらない、という自慢のカツには、210グラムもの豚本ロース肉を使用。道内産豚を生肉で仕入れており、肉質の良さは折り紙付きだ。そのロース肉をサクッと揚げて卵でとじ、熱したステーキ皿状の鉄皿へ。作りたては肉の中心部がほんのりと赤いが、客のところまで運ばれてくるあいだに熱せられて、絶妙な火の通り具合となる。

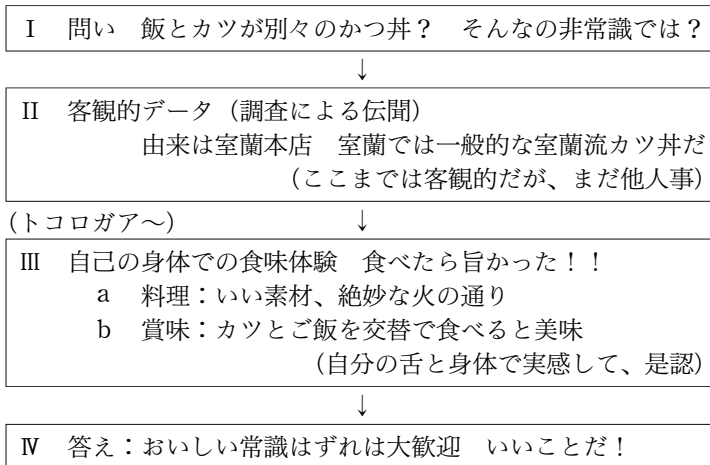
カツとご飯を交互に食べつつ、ときおり、ツユの染み込んだ衣やタマネギをどんぶりにのせて味わう。斜め切りのカツは一切れが大きいものの、ジューシーで柔らかいので、どんどんと箸が進む。食後は、さすがのボリュームにおなかもパンパン。

Ⅳ 人の常識はずれは困りものだが、こんな“おいしい常識はずれ”なら、いつでも大歓迎だ。 (M)

この文章も、事例①の室蘭カレーラーメンと同様、Ⅰ問い（どんぶり飯と、カツとが別々に出る、そんなのありか、非常識ではないか？）に、Ⅳ答え（その非常識大あり、大歓迎だあ！）を両極として、Ⅱ事情説明、Ⅲ身体的な味覚体験を記した二部分が挟まれる構成となっている。

I 問いの「非常識でいいのか？」が、IV 答えの「非常識でいいのだ！」として是認される先ほどの I = IV の等式が用いられている。これも図式にすると以下ようになる。

図2 室蘭流かつ井図式



事例①②はいずれも、IIでの事情説明を予備的な助走のようにして、IIIの身体的な体験次元へと移動していく構成をとっている。自分の身体という、何よりも生々しい内的な感性の領域へとぐぐっと深く入りこんでいくのである。IIでの客観的だが所詮他人ごとでしかないデータが、IIIにおいて一挙に感性に直接響く具体的な現在形の体験へと変貌する。そして、IIの段階ではいまだ判定しようがなかったIの問いが、IIIという身体的宇宙をくぐり抜ける時、初めて、そして明快に迷うことなく判定され、おいしい非常識は大歓迎としてIVにおいて是認される。

言い換えれば、Iでの問いに答えることのできるのは、IIのデータでも、IVの答えでもなく、身体が直接関わったIIIの体験感性領域だけである。そのIIIがあってIVがおもむろに姿を見せるにすぎない。すべてがIIIを中心にして巡っているのである。IIの事情説明データは、IIIを準備するものではあるが、Iの問いに答えるカードをもちあわせてはいず、どうあがいてもIV解答を導きだすことはできない。それをなしうる切り札を有しているのはIIIのみであり、それゆえIIとIIIは、前座（II）と真打ち（III）にも比しうる決定的な格の違いを示すと同時に、異なる解を提示するという点で、相反する関係にある（II／III）。IIが行き詰まった地点のその先にIIIは出現するからである。IIIの身体体験は、つまり、IIの事情説明・客観的データ提示の陥った窮状を救済する転換点、一切の難題を解決してくれるデウス・エクス・マキーナ（機械仕掛けの神、水戸黄門様の印籠）として登場しているのである。

だが、そのように身体的感性が中心となっているのは、それが料理紹介のコラムであったせいだろうか。次にとりあげるのは、同じ食べ物でも、戦慄を催させるような食品添加物に関す

る食品業界の凄まじい舞台裏を、かつての当事者が赤裸々に暴露して近年評判をとった書物である。その『食品の裏側』の目次と、内容に基づく各部分の構成図を示してみよう。

事例③ 安部司『食品の裏側』（東洋経済新報社、2006）目次

はじめに

序章 「食品添加物の神様」と言われるまで

第1章 食品添加物が大量に使われている加工食品

第2章 食卓の調味料が「ニセモノ」にすりかわっている！？

第3章 私たちに見えない、知りようのない食品添加物がこんなにある

第4章 今日あなたが口にした食品添加物

第5章 食品添加物で子どもたちの舌が壊れていく！

第6章 未来をどう生きるか

おわりに

これを構成図式に分節してみると、次のようになる。

図3 『食品の裏側』 構成図

Prolog

- | | |
|----|-------------------|
| I | 問いかけ：窮境を変えられるか |
| 序章 | ・著者自身は？ 過去に窮境を変えた |
| | ・消費者は？ 加害者ではないのか |



- | | |
|----|---------------------|
| II | 事情説明：実態の客観的データ提示 |
| 1章 | 添加物の大量投入例 |
| 2章 | インチキ操作例 |
| 3章 | 見えない詐術例 |
| | (客観的データの提示、だがまだ他人事) |

(トコロガア～)



- | | |
|-----|--------------------------|
| III | 転換点：自己の身体的宇宙での体験 |
| | <u>あなた自身</u> も侵害されている |
| 4章 | <u>あなたの</u> 一日の添加物摂取量 |
| | 生々しい恐怖がリアルに出現！！ |
| 5章 | <u>あなたの</u> 子供は、さらに恐怖状態化 |



- | | |
|----|-----------------------|
| IV | 答え：未来に向けて現在の窮境を変えられるか |
| 6章 | 消費者のあなたも加害者、あなたは変えられる |

Epilog

I 問いでは、毒となる食品添加物漬けの実態を人は変えられるかという問いかけを発した後、II の部分において、事情説明すなわち私たちが日常摂取する食品の中に食品添加物がいかに深くはいりこんでいるか、をデータとして提示・披瀝していく。それだけでも十分に衝撃的ではあるが、しかし、人というのは困ったことに、いかに戦慄的な状況であっても自分に直接関わると思えないとなるや、他人事として冷やかに処理・忌避し、いつしか忘れさってしまう傾向の強い生き物である。それゆえ、このIIの報告だけであるならば、食品業界の恐ろしい内幕暴露も、読者である消費者たちの琴線に触れることは難しい。それゆえ、著者は意識してのことかどうか、食品添加物による恐怖が読者の身体感覚に生々しく迫り襲いかかる瞬間を、IIIの部分において、ホラーのように描き出してみせるのである。そして、その身体という内的宇宙の次元において、未来に待ち受ける陰惨な情景を読者にリアルに生々しく体験させ、恐怖に戦かした結果見えてくる変革への一步が、I 問いに応える形でIV 答えにおいて語られるのである。

先に挙げた事例①と②が短い新聞のコラムのようなものであったとすると、これはそれなりの長さをもった著作である。しかしながら、書かれたテキストの長短には関わりなく、この事例③もまた、事例①②とまったく同じ構成をとり、I で問いIV で答える問答構成すなわち I = IV の等式となっている。その I とIV に挟まれているII が客観的に事情説明を行っているのに対して、III では一転して読者を自己の身体という生々しい感性的領域にひきずりこもうとする。客観的データII にとどまる限り、人々の眼にはいかなる事実も所詮他人事を超えることがないからである。III 自己の身体への接近により、I で掲げられた難題をより深く、より内的に、よりリアルに考えさせることが可能となる。

食品添加物の恐怖が読者である「あなた」自身の身体とその拡張である子供たちにこそ襲いかかるとしたらどうなるか。その戦慄的で具体的な内的宇宙のビジョンをくぐらせることによって、人々は、IV の答え、すなわち「あなた」自身の変革と未来へと大きな一步を踏み出すことができる。ここにおいても、事例①②同様、III の身体宇宙での体験が唯一IV の解答を導きだすことができるのである。

III があって初めてIV の答えが成立しうる。別言するならば、I とII は問いかけのレベルに止まり、III とIV が解答のレベルをなす。〔問い：I・II／答え：II・III〕という対称関係がここからも明らかになる。テキストの前半（I、II）が問い、テキストの後半（III、IV）が答える、そのような対照的なQ & A 布陣となっているのである。そして、その転換点であるとともに、前半の問いを、それとは異なる後半の答えの次元へと連結させているのが、IIIの部分、正確には括弧を付して補足した「ところが（トコロガア〜）」なる逆説の接続詞である。テキストは、その中央に走る切れ目と、その深い溝に架橋する逆接の接続詞「ところが」によって、扇さながら対称的に構成されるのである。

ここまで試みた三つの事例における構成分析の結果をまとめてみよう。I 問いはIV 答えに等しく、I とII は問いの磁界にあり、III とIV は逆に答えの磁界にある。その意味でII 事情説明は、

Ⅲ身体的内的次元への潜行とははっきりと敵対的な関係にある。著者たちの思い入れは明らかに後者のⅢ身体的体験部分にあり、その結果テキストではⅢが優位なるものとしてⅡよりも後ろに配置されていく。なぜならば、Ⅲは、Ⅱを継承するとともに、Ⅱの不十分さを乗り越える新しい何かを身体の内から見つけ出してくる革命や刷新としてあるからである。例えば、美味かどうかの判定における迷いは、Ⅲの食べるという身体的行為や事件によって瞬時に払拭される。Ⅱ客観的データを、Ⅲ私的な身体の強い関与によって深めたことにより、Ⅳの結論部での肯定へとテキストは収斂する。ⅠⅡⅣの部分が、Ⅲを挟んで繋がることによって、統一性のある統合体が築きあげられるとともに、驚くべきことにⅠ＝Ⅳとなり、ここにⅣからⅠへと回帰するテキストにおける循環が完成する。

6. 思い入れの強度

しかしながら、このような論構成は、身体が直接関与しうる食べ物に関わるテキストにおいてのみ限定されるわけではない。食べ物の報告記事のように身体が直接関わるようには見えないさまざまなテキストにおいても、Ⅲの身体的な次元への強いこだわりと、Ⅲを軸とした全体構成の方式は健在である。同じ身体でも、今度は衣食住の衣に関わる新聞記事を見てみよう。文章の要は、ここにおいてもⅢにある。

事例④ マネキン消えたウィンドー

2006年9月8日 読売新聞 夕刊

矢島みゆき ファッションジャーナリスト

Ⅰ ミラノのブティックのショーウィンドーが最近、様変わりしている。長年主流だった、マネキンを使った見せ方が減ってきた。

Ⅱ これまでは、顔の表情まで表現した人間そっくりのもの、体だけ、上半身のみなどの様々なマネキンに、上着やパンツ、スカート、コートなど、シーズンごとの流行商品を店側が選んで着せていた。コーディネートの一例を示すこの陳列を、人々は長い間、買い物

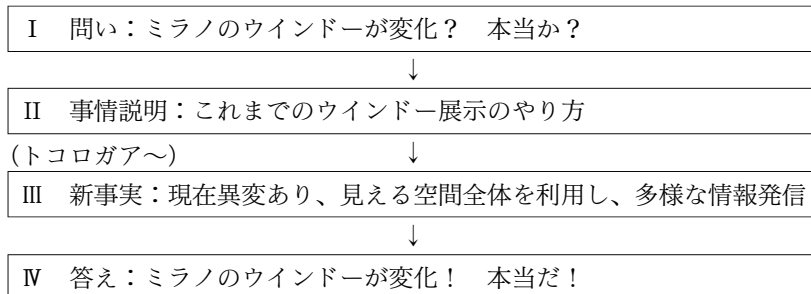
の参考にしてきた。
ある店に話を聞いたところ、1980年代ごろは、マネキンに着せたコーディネートを丸ごと購入する客も少なくなかったという。

Ⅲ しかし最近は、服の情報があふれ、消費者の好みも多様化している。ショーウィンドーからも、より多くの情報発信が求められているのだ。

中でも目立ってきたのが、棚などを工夫し、ウインドーから見える空間全体を利用した陳列。その代表例が、ディオール・オムのプティックだ。上着もパンツやスカートも、めがねも靴も複数陳列できる。

Ⅳ 街行く人は、ウインドーをみて、自分で商品の組み合わせを想像し、楽しむことができる。ウインドーの変化は、続いていく。(下線は高橋)

図4 マネキン消えたウインドー図式



この文章の構成も一目瞭然である。Ⅰの問いかけとⅣの解答・肯定を両極として、これまでの状況を紹介するⅡ事情説明がまず記されている。ところが、現在、その既成概念による展示方式は覆され、新しいレイアウト発想でウインドーを飾るという新事実がⅢに記される。それは、ファッション関係者にとり、さらには衣装を身に帯びる女性たちにとり興味津々たる大変化といえるものである。自分の身体に関わるがゆえに関心が生々しく噴き上がりうる情報を中心にして、その他のⅠⅡⅣの部分が配列されている。そしてここでも、外側の枠組みとなるⅠはⅣに等しく、Ⅳの答えは、Ⅱに相対立するⅢの新事実から自動的に導出されたものであった。

犬との交遊を語る次の連載記事においても、Ⅲの部分に強い身体的な思い入れが溢れている。

事例⑤ 「別れ」は来たけれど…

2006年6月22日 読売新聞 夕刊

交遊録 松井雪子 4

Ⅰ 犬と暮らし始めた日から、いつか訪れる「別れ」の予感が、心の片隅に芽生える。

犬はたった一年で、成犬になる。

心が通じあうほど、不安の芽はいつのまにか成長し、ある日、「もし、犬が死んだらどうしよう」と、不穏な音をたてはじめる。

犬の成長を喜ぶ反面、別れの予感におびえるのは、私だけではないと思う。

Ⅱ うらんが家にやってきたとき、9歳になる先住犬・もっこすがいた。

私はもっこすが若いときから、「別れの日」が来ることをおそれていた。

花柄のベッドカバーの上でぐっすりと眠るもっこすの姿を見ては、棺で永眠する姿と重ね合わせて、メソメソしたりしたものだ。

もしもその日が訪れたら、きっと自分はペットロスに陥り、しばらくは立ち直れないだろうと確信していた。

私の心配をよそに、もっこすはとても元気だった。まわりつく子犬の相手をつとめて、ときには牙をむき、先住犬としての役割を立派に果たしていた。

しかし、うらんがうちに来て9か月ほど経ったところ、急に病気で亡くなってしまった。

花に包まれた亡骸を前にして、私は涙を拭いながら、ペットロスを覚悟した。

Ⅲ ところが意外にも、私は普段と変わらず、元気だったのだ。

私の様子に、まわりの人は驚いていたが、それ以上に驚いたのは自分自身だった。

もっこすと会えなくなることはとても悲しかったが、考えるほどに、楽しい思い出がたくさんよみがえった。

「もっこすよ、ありがとう」という感情だけが残ри、じつにサッパリしたものだった。

もちろんもっと一緒にいたかったが、十分に愛したよろこびと満足感に支えられたような気がする。

いまでもその犬のことを思い出すだけで、愛おしくてニヤニヤしてしまう。

Ⅳ 現在、うちには2頭の犬がいる。

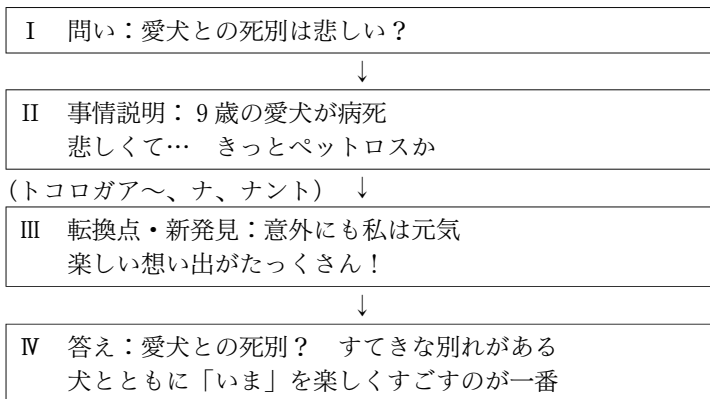
うらんはそろそろ5歳、クロえもんは6か月。2頭とも、まだまだ若い。それでもあと2年ほどで、うらんのペットフードが、「シニア用」に替わるのかと思うと、なんとなく寂しい。そのたびに、大丈夫、と自分に言い聞かせる。

すてきな「別れ」を迎えることは難しくない。犬とともに「いま」を全力で、楽しく生きればいだけなのだから。

(作家)

語り手に最も関心のある最も伝えたいことがテキストの真ん中にあたるⅢに設定され、その領域をくぐり抜ける一種の通過儀礼に基づいて、ⅣはⅠの問いに対して答えているのである。Ⅰの問いの、ある意味言い換えにあたるⅡ事情・経緯説明は、Ⅰ問いが発した否定的雰囲気の中におかれているが、「ところが」という逆接の接続詞を扇の要として、テキスト全体がここから明るい方向へと大きく、いわば対称的に反転する(下線は高橋)。その構成を図式にしてみると、以下ようになる。

図5 別れはきたけれど図式



このようにIIIは基本的に、ある決定的な転換点を形成する強い性格をもっている。その転換点がたんに身体的なものへの関与というだけではなく、実は書き手自身の内的な宇宙への深々とした沈潜の瞬間であることを如実に示しているのが、日野原氏の朝日新聞における次なる連載文である。

事例⑥ 94歳・私の証 あるがまま行く

2006年7月15日 朝日新聞 be on Saturday

日野原重明

I 去る6月4日の午後、神奈川県中井町にある独立型ホスピスで、「夢コンサート」という演奏会が開かれました。10年前にここで最後の日々を過ごしたチェロ演奏家の徳永兼一郎さんを追悼したイベントでした。

II 家族やお弟子さん、親しい音楽家の方々が、毎年この時期に続けています。今年は節目の年ということで、兼一郎さんの弟でバイオリン奏者の二男^{つぎお}さんも出演しました。

二男さんは兼一郎さんの弟子のチェリストたちと合奏したほか、兼一郎さんの娘の依子さんのピアノ伴奏でバイオリンの特別演奏をしました。その響きのすばらしかったこと。アンコールがやまない中で、私は兼一郎さんが亡くなる前のことを思い出していました。

III N響の首席チェロ奏者として活躍した兼一郎さんは、存命中に富士山が見えるホスピス内のホールで最後のリサイタルを思い立ちました。がんの骨転移による神経麻痺で下半身は全く動かなくなりましたが、病床で寝たまま演奏のけいこをして、実現にこぎつけます。

最後に兼一郎さんは弟子たちや二男さんらと共にパブロ・カザルスが編曲した「鳥の歌」を演奏します。弾き終わった兼一郎さんは目に涙をいっぱい浮かべて、車いすで病室に戻りました。別れの曲という音楽は幾つもありますが、これは兼一郎さんからの、家族や弟子、そして親しい友人らへの文字通りの訣別の音楽でありました。

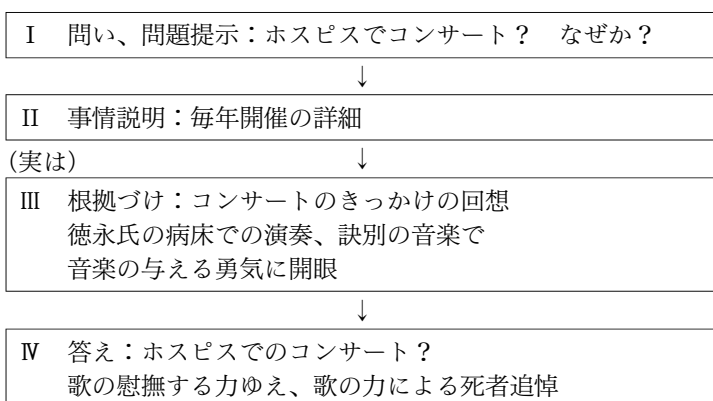
私は室内楽が好きで、広い音楽会場でよく聞いてきましたが、このような弦楽合奏を身近に聴いて、室内楽のすばらしさを心いっぱいに感じました。同時に、兼一郎さんの演奏によって、音楽が死を前にした人に力と勇気を与えてくれることを教えられました。

Ⅳ 兼一郎さん追悼の夢コンサートのほかに、このホスピスでは毎年2回、亡くなった患者さんの家族や友人のために、「偲ぶ会」が開かれています。

その時は、「ホーム・スイート・ホーム」の曲に私が作詞したホスピスの歌「この世の旅路を終えて」を、一同で合唱して今は亡き人を偲ぶのです。

長き病の床につき
 いやしのめぐみを せちに祈れり
 されどいのちの 尽きる時に
 君を迎えし 愛の住み家
 ホーム ホーム スイート・ホーム
 愛する君よ 花と眠る

図6 ホスピスに響く別れの曲図式



Iでホスピスでのコンサートを提示し、IIでその事情説明を行っているが、ここまでであるならば、この文章はたんなる事実報告以上のものではない。ところが、IIIにおいて現在の営みの由来や所以を示す過去の回想がはじまるや、日野原氏の心の宇宙の中に、生と死を濃厚にたたえた訣別の音楽を奏でる光景が幻視されてくる。そして、そこから終息するIVにおいて、冒

頭 I で提示されたホスピスでのコンサートが、今度は一個人を超えたより重い意味を帯びた普遍的なものとして回帰し、積極的に肯定かつ増幅される。I 現在の営みとしてのコンサートが、II 現在の営みの詳細報告の後、III それらの起源なす過去においてその営みが始められた深い意味が確認され、IV 現在の営みはすなわち III 過去の拡大・継承であるとして是認される。II に III が重ねあわせられ、IV となる。I 問い＝IV 答え (I の是認と深化)、III 内的宇宙への遡及とそれによる深化・根拠づけ、III の内的宇宙・奥深い過去への沈降から帰結する IV 総括という基本構成が、このテキストにより明確に確認されうるのである。

7. 興味の中心をIIIに配置する

これまで取りあげた 6 例のように個人的な思い入れのこめられたものとはいいがたいものの、何らかの形で書き手の関心が強く向けられていることがら、主張したい、皆に伝えたいと強く感じているものもまた、III の部分に配置される。

事例⑦ 「進化担う おばあちゃん仮説」

2006年9月10日 朝日新聞 be on Sunday

Wonder in life 不思議いっぱい

I 働く女性が増え、娘の子育てに奔走する「おばあちゃん」が増えている。

II 私の友人 (37) は 4 年前、出産直前に川崎市から埼玉県幸手市の実家のそばに引っ越した。通勤時間は倍以上、片道 2 時間近くになった。自分は夜勤が多く、夫は単身赴任中。赤ちゃんをどうやって育てるのか。……お母さん。悩んだ末の決断だったという。

母、64 歳。定年後、水泳や太極拳、フラダンスなどの習い事に忙しかった。そこに今、3 歳の孫の食事、入浴などの世話が加わる。

もっとも子育ては経験済み。むずかっても「もっと大きな声で泣いてごらん」。若い親にはとてもまねはできない。「私も母に助けてもらって仕事を続けることができた。恩返しよ」

久しぶりの子育ては生きがいになる。体力的にきつく、娘との関係がこじれる場合もたまあるが。

III そんなおばあちゃんたちの活躍に、人類史的立場から光が当たっている。

「女性が閉経後長く生きるのは、ある種のクジラ、アフリカゾウと人間だけ。生物として特異な存在であるおばあちゃん。その知恵と子育て経験が、娘の出生率を高め、子どもの数を増やすのに役立った」

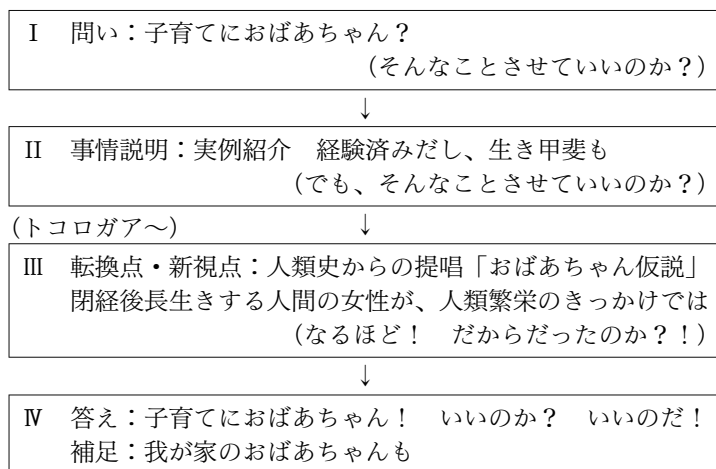
米国の人類学者たちが97年に提唱した「おばあちゃん仮説」である。これが人類繁栄のきっかけになり、今日に至った。「議論はあるが、可能性の大きい仮説だ」と長谷川真理子総合研究大学院大学教授はいう。

Ⅳ 我が家にもいい伝えがある。生まれたての私を蚊から守るため、祖母は腕と足を丸出しで一晩すごした。腕が太く見えたという。おばあちゃんは偉大だ。

文・佐藤久恵

この文章（テキスト）でもⅢの部分に、母たちに育児を委ねる働く女性たちの在り方を理論的に保証する決定的要素として、話題の「おばあちゃん仮説」が配置されている。Ⅱに紹介された祖母たちの子育て奮戦記と祖母に孫の育児を委ねて働くママたちの行為は、その仮説の提示がなければいささか曖昧であり、Ⅲによってこそ晴れて是認されるからである。その仮説は、内容的に興味深い情報だというだけではなく、Ⅱの現代における母すなわち祖母たちへの育児委託にまといつく曖昧さを一挙に払拭しうるデウス・エクス・マキーナ（水戸黄門様の印籠）として、Ⅲに配置されているのである。

図7 おばあちゃん仮説図式



ⅠはⅣに等しく、Ⅱは具体的な事例提供、Ⅲがそれらを是認する根拠付けとなっている。祖母による子育てがいいのか悪いのか、その判定をⅡから導きだすことは難しい。その難題を一挙に解決してみせるのが、Ⅲの新しい仮説である。その意味でⅡはⅢに継承されるとともに、Ⅱの達着した限界をⅢが克服し、明るい方向へ反転させる。ⅡはⅢに継承されると同時に、ⅡとⅢは相反し、Ⅲに逆転が起きている。ⅠとⅡの問いかけに、ⅢとⅣが明るく答えてみせた

いうわけである。

ここではしかし、Iの問いに対する直接的な答えとして明示する書き方が放棄され、我が家の言い伝えという形でIVに少しひねりが加えられている。それは、ひとつにはIIIにおいてすでにIVとして示すべき解答が与えられているため、I＝IVは自明であると考えたからに違いない。だが、そのことによってこのケースは、IV答えの部分が有するもうひとつの重要な機能を浮上させる。テキストの結論を、そのテキストを包摂するより大きな文脈、例えば書き手である佐藤久恵氏の日常的現在及び読者たちの集う社会という文脈に話を戻し、その巨大なコンテキストへとつなげていく機能である。IVでなされる総括は、それゆえ、当該のそのテキスト内に留まるものではなく、テキストを超えた外側へと開かれている。それをどの程度明示するかしないかは書き手の自由ではあるが、書き手がテキストの外へ向けているまなざしがどのような強度を帯びているかに、その言及の有無はかなりの部分左右される。

テキストが自立したものではなく、その外の社会的事象とつながっており、その大きな流れの中にたまたま浮かぶ小さな島宇宙として書かれたことが強く意識される時、I問いとIV答えは、島宇宙（テキスト）と外宇宙とを繋ぐ境界なす入り口と出口を形成する。次に挙げる少女マンガの起源に関する寄稿は、高橋真琴なるマンガ家の復刊という特殊な社会的出来事をきっかけにして起筆され、その復刊を手取るよう奨めることで擱筆される。Iから入りIVから離脱する。まさにそのようなIとIVのもつ境界機能を如実に示している。

事例⑧ 少女マンガの起源・高橋真琴

2006年7月26日 読売新聞 夕刊

本よみうり堂 コミック館

藤本由香里（評論家）

I 最近、高橋真琴（1934～）に夢中になっている。

この7月、小学館クリエイティブから高橋真琴の貸本時代のマンガ作品『パリ～東京』『さくら並木』が復刊された（二冊セット、3600円）。その解説をきっかけに、改めて高橋真琴の作品とその影響について調べ始めたら、面白くてやめられなくなってしまったのだ。

II 高橋真琴といえば、「きらびやかな星が輝く大きな瞳」「周囲に可憐な花がいっぱいの美しいお姫さま」などの少女画で一世を風靡したイラストレーターとして有名で、多くの人が、ああ、あの…と思ひ当たるに違いない。

だが、そうした少女画家としてのイメージがあまりに強いのと、マンガ家として活躍した時期が短く、『少女』に連載された代表作が単行本になっていない等の事情で、これまでマンガ作品は一般にはあまり知られていなかった。

Ⅲ しかし、実は高橋真琴こそは少女マンガの技法がはっきりと少年マンガから分かれる分岐点であり、「少女マンガの起源」とすら言えるほどエポックメイキングな作家だったのである！

まず、一時期の少女マンガの特徴とされた「三段ぶち抜きスタイル画」。これは実に、『少女』1958年1月号から始まった高橋真琴の初連載「あらしをこえて」の初回から突然現れる。実は、その前月掲載された読みきり「のろわれたコッペリア」で初めて、現在の少女マンガに見られるような、コマを縦断してページ全体にわたるかに見える人物像が多出しているのだが、高橋真琴以前には、タイトルページ以外、こうしたコマ割りはまったく存在しないのだ。

事実、当時の少女雑誌をそこから二年^{さかのぼ}遡って調べたのだが、57年以前はいずれもきっちりと枠線のあるコマが並んでおり、はみ出すといってもせいぜい刀の先や足の先がちょっと出る程度。オオトモシヤスなどのごく少数の例外を除けば、コマをまたいで描かれる人物などまずないといっている。ところが、「あらしをこえて」以降、これが劇的に変わるのである。

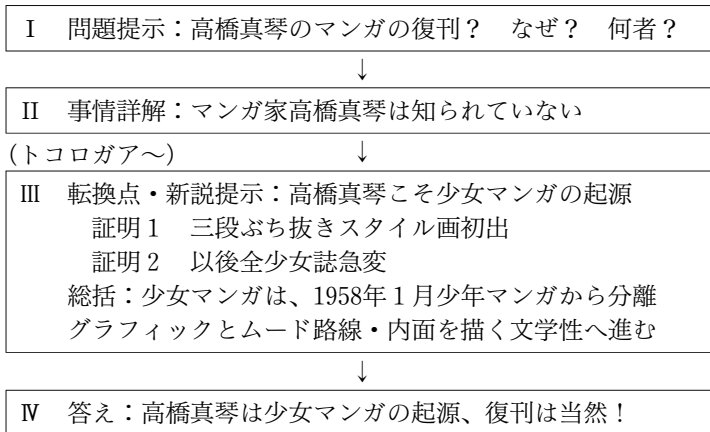
まず同年の3月号から他誌で追随と思われる作品が始まり、その後一年の間に主な作家のコマ割りが急激に変化。翌59年の半ばまでには、すべての少女誌で「スタイル画」が意識的に展開されるようになる。

つまり「あらしをこえて」をきっかけに、少女マンガははっきりと少年マンガ^{たもと}と袂を分かち、独自の道を歩み始めたのだ。すなわち、コマを割って映画的な“動き”を見せるという方向に発展していく少年マンガに対し、グラフィックな感覚を優先させ、全体をデザインして“ムード”を見せていくという方向へ。

これは高橋真琴が、デザイン感覚と同時に「絵物語」の手法を少女マンガに持ち込んだともいえ、これ以降、少女マンガは雰囲気と言葉を横溢^{おうえい}させ、それが「内面を描く」文学性へとつながっていく。

Ⅳ 今回50年ぶりに復刊された作品はその前駆的な時期のものだが、コマをまたいで描かれる人物像やグラフィックなデザイン感覚はすでにはっきりと現れている。書店でぜひ手にとって確かめてみてほしい。
(下線は高橋)

図8 少女マンガの起源図式



IはIVに等しく、IIはIの詳解であり、IIIはIIの反転としてII／IIIをなし、IVはIIIの帰結としてある。I IIは問い／III IVは答えとしてシンメトリー的に相対する。そして、Iからテキストの世界へ足を踏み入れる者は、IIへとまず進み、IIIでこれまでとは異なる異次元に一挙に導き入れられ、異質な世界が秘めている秘宝という真実に開眼させられる。その秘宝という答えを手にしてその内的ダンジョン（迷宮）の冒険者は、インディーズ・ジョーンズのようにIVから外世界へと離脱する。テキストはII IIIと続く異界めぐりのように構成されているのである。但し、IIはIと同様社会的常識や先行研究的次元にあり、特にこれといった驚き、新奇なる発見はない。しかしながら、IIIはI IIの社会的常識のレベルを大きく覆す、文字通り既存の知を転覆させる。異質な領域、ある種の内的宇宙へと突入するからである。それゆえ、IIIは今や狭い意味での身体的な関与に限定される必要はなく、書き手にとって関心の深いもの、そしてその謎が生き生きと明かされる奇跡の場、すなわち思考の照準が強く絞られる特別の場と化すことになる。次に挙げる美術評でも、批評の核心をなす見方がIIIの部分に配置される。

事例⑨ 生成過程がわかる結晶群

2006年8月3日 朝日新聞 夕刊

美術「パウル・クレー 創造の物語」展

I 真珠貝の体内に異物が入ると、その刺激で貝自身が炭酸カルシウムなどを分泌し、異物を核としてその周りに薄い層を作る。それが優雅な光沢を持つ真珠になるという。

クレー（1879～1940）の作品を見るたびに真珠を連想していた。開催中の「パウル・クレー 創造の物語」展は、その「真珠」の生成過程が観察できるような回顧展だ。絵画、素描、版画など約160点。クレー作品の収集で知られるドイツの3館からの100点に、日本

国内にある60点を加えている。

II スイスに生まれ、ドイツで活動し、ナチスに追われてスイスに戻り、病死した一生。象徴主義的要素も漂う初期のエッチング「樹上の処女」=1903年、宮城県美術館蔵=から最晩年作まで、展示は必ずしも時代順ではなく、「光の絵」「自然と抽象」などテーマ別の5章仕立てだが、大きく変容した約40年の歩みが概観できる。

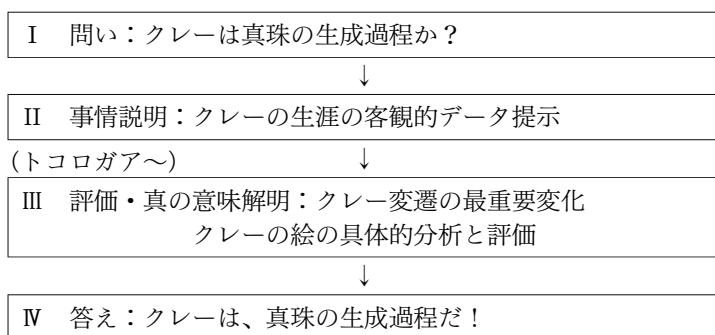
III 基本的な変化は10年代前半。ミュンヘンでカンディンスキーらが結成した集団「青騎士」に加わり、20世紀の抽象絵画誕生の1つの筋道をともに歩む。曲折を経ながら、透明感ある詩的な作風を獲得。世の自然・現実足場に置きながら本質を抽出し、色彩、線の組み合わせと、色面の重ね方で、画面に求心力と完結感を生み出す。

それらが総合して、最も輝き出すのが晩年の3年間ではなかろうか。代表作のひとつ「碎けた鍵」=1938年、Sprengel Museum Hannover 蔵=に見られる明るく淡い色彩と、文字か記号のような黒い線が作り出す交響。絵肌も1点1点違っていて、この作品では下に新聞紙を張るなど画材の物質感を強調するのに、ほかにはしっとり底光りする作品もある。

IV 第1次大戦では友人を失い、自らも軍に配属される。33年以後はナチスに迫害され、やがて難病との闘い。それらの「異物」によって純粋な魂は傷つき、保護膜になる成分を分泌し続けたのではないかと推察。再検証し、分析するに値する結晶群だ。

(編集委員・田中三蔵)

図9 「パウル・クレー 創造の物語」展図式



これは朝日新聞での美術展評である。IIが客観的とも一般的ともいえる展覧会のデータ紹介であるのに対して、IIIは、評者自身が自分の身体的感性を動員して画家クレーの独自性を評価しようとする意欲的な部分となっていて、当然のことこの美術評コラムのメインをなす。IIは

冷静な資料提示にとどまっているのに対して、Ⅲではクレーという画家への、そして何よりその最晩年の創作への思い入れ十分の記述となっている。書き手の眼力と存在とがかかった主観的評価が投入されているそのⅢあればこそ、冒頭のⅠ問いが、末尾のⅣ答えにおいて是認・証明される。

Ⅰ－Ⅳの関係は、つまりここでも次のように抽象化しうる。

Ⅰ＝Ⅳ

Ⅱ vs Ⅲ（Ⅱ／Ⅲ）

Ⅲ⇒ⅣすなわちⅢ≡Ⅳ

さらに、ⅡはⅠの問いを持続しての事情説明ゆえ、基本的には問いの圏内にあると考えるならば、

Ⅰ＝Ⅱ

であり、逆にⅢとⅣも同じ答えの圏内にあるものとして

Ⅲ＝Ⅳ

となる。Ⅰ・Ⅱ vs Ⅲ・Ⅳが対称性関係として対峙しているのである。だが、これらの諸関係の確認は、Ⅰ－Ⅳの各部分がⅠ＝Ⅱ＝Ⅲ＝Ⅳという異様な等式群の集塊である、という驚くべき等式関係を明らかにすることになる。この奇怪な等式関係を安定させテキストをテキストたらしめている垂心は、いうまでもなく、評者の美的感性と識見が表出されたⅢにあり、他の塊ⅠⅡⅣは、その身体的関与の異常に高い内的宇宙のⅢを中心にして、星たちのように周回しているのである。同じく現代美術を紹介した別の連載コラムを見てみよう。

事例⑩ 回って歪み絵や点描画に

2006年7月23日 朝日新聞 be on Sunday

目の冒険 広がる知覚世界⑦

坂根巖夫 エッセイスト

Ⅰ 目の前の小舞台で、ミニチュアの二階屋が高速回転しながら、光を浴びて浮き上がってみえる。

タッチパネルで光のパターンを変えると、家は奇妙に歪み始め、別のパターンを選ぶと、さらに歪み方が変化して、ついには点描画風の点の集合体にまで変容していく。

メディアアーティスト岩井俊雄の「モルフォビジョン」。99年に超感覚ミュージアム展のため制作した「エッシャー的空間変容装置〈梯子のある家〉」を、昨年、NHK 放送技術研究所の深谷崇史の協力で、さらに微妙な形の変化を演出する作品に仕立てた。

Ⅱ その秘密、一口でいえば、光の当て方にある。回転する模型を、細いスリット（すき

間)を通した光で断続的に照らすため、光の当たる部分が刻々と変化する。それが連続してアニメのように見える。光のパターンを変えれば、模型の見え方も「七変化」する。

99年の作品は光のパターンをスリットの入った回転板で調節していた。今回はスリットを通った光を、高速回転する12面鏡を経て、模型に当てることで、さらに細かい演出が可能になった。

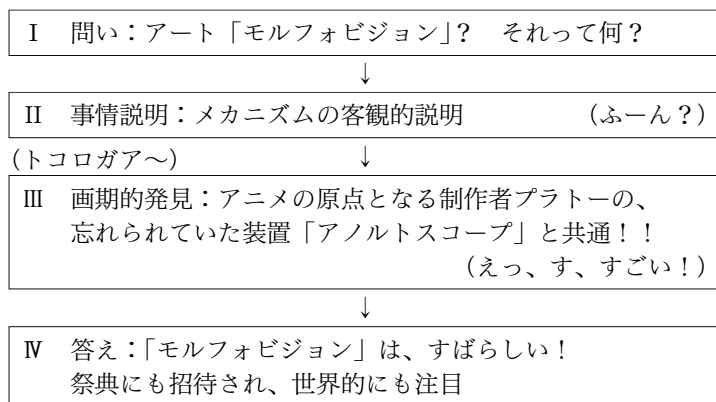
Ⅲ 岩井の作品は古いアニメの原理を生かしたものが多いが、今回の制作中、ジョゼフ・プラトーの「アノルトスコープ」との共通点も偶然発見した。これは、回転する「歪み絵」の前に、反対に回転するスリット入り円盤を重ねて、歪みのない絵を見せる作品 (www.mhsgent.ugent.be/engl-plat4.html)。

プラトーの発明で、こま落としの絵を描いた円盤を回して動画を見せる「驚き盤」の方は、アニメの原点の一つとなっているが、アノルトスコープはほとんど忘れられていただけに、岩井はこの発見に感動していた。

Ⅳ モルフォビジョンは、この秋、オーストリアで開かれるメディアアートの祭典アルス・エレクトロニカにも招待されている。

(エッセイスト)

図10 目の冒険図式



この連載は、メディアアートの専門家が現代の魅力的な制作を紹介するもので、そのためか、Ⅰの問いとⅡの事情説明にかなりの分量がさかれた書き方となっている。それでも一番の強調ポイントは、Ⅲに記された現代のアート作品と伝説的な人物プラトーのアノルトスコープとの衝撃的な共通点にある。その事実への書き手の感動が、おそらくⅠとⅡにおける詳細な装置説明の原因となっていると思われるが、しかしここでも、書き手が最も関心を抱く新装置の意味

記述がⅢの位置に配置され、それを軸にしてⅠの問い、Ⅳの答え、Ⅱの事情説明・客観的なデータの提示がなされている。Ⅱの詳細データもちろん欠かすことのできない貴重な部分ではあるが、しかし、それだけでは読み手の関心を惹くには十分ではない。Ⅱの詳説も、つまりはⅢでなされる画期的意味の発見を準備するものであり、燦然たる舞台の光は、そこにこそ、つまりⅢにこそ集中的に注がれ、その白い光あふれる異次元空間の中に、書き手の主体が身体的に深くぐぐっと肩入れされる。と、ⅠとⅡにおいてまさぐられていた生命体が、ここにおいて感触をえてリアルにうごめき、その命の息吹きが濃く噴き上がってくる。Ⅱの客観的データに、Ⅲが表出する内的宇宙の身体的な息吹が重ね合わされる時、テキストにおいて伝えたいものが初めて鮮明に形をとるのである。

これまで七つの事例を素材に、テキスト構成の定則を析出してみた。事例①からこの⑦までのテキスト構成がはっきりと示しているように、Ⅲの部分は、たんに客観的に報告されるⅡ事実を超えた、書き手の身体的感覚や感性が行う内的宇宙（ダンジョン）への潜行や、内的宇宙に浮遊する暗黙知に神秘的に照射され彩られている。Ⅱの領域を常識的な理性で記述しうる地上的な可知・既知世界とすると、そこから逸脱するⅢの宇宙は一〈内的な Self の宇宙〉と呼ぶことにする一、その人を存立せしめている膨大な無意識や暗黙知が連鎖しあう根源的な基底境域であるという意味で、その人自身に最も近く切実であり、しかしまた、意識する自己には最も把握困難な無意識的領域であると言う意味で、自己からはあたうる限り遠い。だが、最も近くて最も遠い内的宇宙としての迷宮にも似たその闇領域に降りていく時、人は、自己の身体という生命に満ちた内的宇宙への遊泳にはいり、Ⅱの地上世界での知を、広大で謎に満ちたⅢの内的宇宙へと劇的に、文字通り奇跡的に連結させる。自己 Self という内的で未知の身体宇宙に潜り、そこから異様なリアリティを奇跡として獲得し、秘儀を幻視したシャーマンのように日常の既知の領域へと帰還する。その潜行と帰還からなる V 字形なす通過儀礼（冥府行）の重みが、Ⅳの解答を生きた深切な解答たらしめうるのである。

8. 起承転結蔑視パノラマふたたび

ここまで食品添加物を暴露する書物の他、料理紹介、ファッション、犬との触れあい、ホスピスでの音楽、おばあちゃん仮説、少女マンガ、美術評、メディアアート等、多様なジャンルのテキストをとりあげ、その構成を考察し、それがⅠⅡⅢⅣの四分節構成法をとっている事実を確認してきた。それらが示す四分節構成は、個人的思い入れの濃淡はあれ、テキストの真ん中に位置するⅢの部分に、そのテキストにおいて最も伝えたいと書き手が感じている最重要事項を配置している。

ひとつのテキストを四つに分節するこうした構成法は、四段構成といえど即連想される「起

承転結」という東アジアに伝統的な文章構成と酷似している。東洋において膾炙したこの起承転結形式は、古代中国すなわち唐の時代（8世紀）に完成された漢詩（唐詩）の一形式である五言絶句の詩論に由来するものである。

漢詩（唐詩）において起承転結は詩的な対比の妙を生かすものとして確立されたものであるが、論理的な展開の面でこれを見ていくと、Ⅰ起、Ⅱ承というようにせっかく順調に持続・進行してきた論理の直線的な運動が、Ⅲ転において場面が転換され、非論理的に異なる方向へとはじきとばされる、論理がむざんにも破綻する構成になっている。そのため、起承転結は現代、論構成の悪しき例として一般には忌避かつ排除されている。

だが、この悪名高い起承転結形式を推奨する者も、今なお存在する。例えば、松岡正剛『知の編集術：発想・思考を生み出す技法』（講談社現代新書1485、2004）では、起承転結と序破急を世界の物語の根本的な筋書きとみなして、次のように述べられている。

起承転結とは、①発端「何かがある」（何かが起こった）、②継承「ついで何かに変化がおきた」（何かが加わった）、③転回「ところが意外なことになった」（変なことに気がついた）、④結末「実は、こういうことだった」（結局、こうなってしまった）という四段階だけでストーリーを感じさせることで、世界中の物語の基本的な筋書きになっているものという。世阿弥はこれを「序破急」という三段階にしたが、根本の展開をめぐる見方は変わらない。（p.218）

物語のテンプレート（雛形）が編集工学の基本をなすと考えれば、③転回（ところが）を中心に保有するこの物語の法則は、学術論文にも妥当しうる。小笠原喜康著『大学生のためのレポート・論文術』（講談社現代新書1603、2005）は、「私は、論文は先行研究を批判的に乗り越えることによって作成されると考えている。」（p.117）という松岡氏と同じ視座に基づいて、但しこちらは五分節構成を奨励している（pp.120-121）。けれども、以下に記すように、これも実際には、松岡氏と同じⅠⅡⅢⅣの四分節構成となっていると考えることができる。

Ⅰ 序章	主張と論展開紹介	論展開の全体像
Ⅱ 第一章	現状分析による問題提起	代表的議論の俯瞰と考察
	第二章 先行研究の批判的検討	
Ⅲ 第三章	解決方法の提示と主張の意味	自分の説の主張
Ⅳ 終章	まとめと今後の課題	=序章

してみると、諸著が推薦する三分節構成は、ⅠⅡⅢⅣによる〈起承転結〉構成という四分節構成を、それと知らずして三分節構成に変形したものであったことになる。はたしてそのとお

りであるのか、もう一度起承転結を忌避する学術論文とビジネス文書の論構成を見直してみよう。

酒井聡樹著『これから論文を書く若者のために 大改訂増補版』（共立出版株式会社、2006）では論文本体は、〔イントロダクション、材料と方法、結果、考察・議論〕からなっている（pp. 62-117）。これは、明らかに上で確認したⅠⅡⅢⅣの四分節構成法の変形である。山内志朗著『ぎりぎり合格への論文マニュアル』（平凡社新書103、2007）では三部構成がよしとされ、具体的には、〔課題設定、基本的概念の整理、通説の整理、調査項目の設定、調査の結果、資料の整理、結論〕というように構成される（p.32）。しかし、これも〔Ⅰ課題設定、Ⅱ基本的概念の整理、通説の整理、Ⅲ調査項目の設定、調査の結果、資料の整理、Ⅳ結論〕というように、四分節構成法に読み替えることが可能である。

市販の論文の書き方を教示する書物だけではない。広島大学の地球資源論研究室作成の親切的なサイト「論文の書き方」のように、理系文系を問わず論文の正しい書き方を教えるサイトも現代なかなかに盛況ではある（http://home.hiroshima-u.ac.jp/er/Etc_R.html、2008.6.5）。しかしながら、その盛況ぶりは、いいかえるならば、書き方の規範がある意味曖昧だからであるともいえるかもしれない。それゆえ、そうした各研究分野における書き方の規範には、その分野の論構成に対する基本的考え方がよく表出されているとも、また各研究分野での独自性ゆえにかなりのゆらぎが生じているともいえなくもない。それでも概略的には、上記の地球資源論のサイトで推奨されていた日本物理学会による「科学論文を書くにあたって」が示す論構成が、それら諸分野に共通する基本的原則をよく示しているようにみえる。

表題（Title）

著者抄録（Abstract）

キーワード（Keywords）

序論（Introduction）

本論

結論（Conclusion）

謝辞（Acknowledgements）

付録（Appendix）

引用文献（References）

（<http://www.ipap.jp/jpsj/authors/jshiori/writing.html#tokkyo>、2008.6.5、

レイアウト修正は高橋）

つまり、論文はこれまで列挙した大勢と同じ〔序論（Introduction）、本論（Body）、結論（Conclusion）〕の三部分となる。信憑性に関して近年評判悪しきフリー百科事典『ウィキペ

ディア (Wikipedia)』の項目「論文」における記述も、それよりは少し細かいがほぼ同じである。

論文は次のような IMRAD 型の構成を取ることが多い。

- 1 題名
 - 2 アブストラクト、サマリー (本文の内容を要約した文章)
 - 3 序文
 - 1 背景
 - 2 研究の動機、問題設定、既存研究の問題点
 - 3 成果の骨子、位置づけ、重要性
 - 4 先行研究や類似研究との関連
 - 4 準備 (既知の定義や定理など論文を読むための基礎知識) や
研究の方法 (調査の方法、実験、材料、など)
 - 5 結果
 - 6 考察
 - 7 結論
 - 8 謝辞や参考文献
 - 9 付録 (証明や実験の詳細など)
- (<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%AB%96%E6%96%87>、2008.6.5、
レイアウトの修正は高橋)

これは〔序文、準備、結果、考察、結論〕の五分節構成であるが、〔序文／準備・結果・考察／結論〕となり、これまでの〔序論、本論、結論〕三分節構造とほぼ同じである。ところが、その序論はⅠの問いとⅡ事情説明 (先行研究の限界と課題) とを含み、実際には〔Ⅰ序文1、Ⅱ序文2.3.4、Ⅲ準備・方法・結果、考察、Ⅳ結論〕という〈起承転結〉ⅠⅡⅢⅣの母型回路内を動いている。つまり、四分節構成法であることを知らずに、三分節に構造化されているものなのである。

数理設計研究所のサイトでの「実験記録、文章、論文の書き方」ではつぎのように記される。

表題：

概要：

本文 (動機)：なぜそのようなことを論じるのか

本文 (過去)：過去の技術や理解、その上に何をするのか

本文 (実験)：実験、論考など展開部となります

本文（結論）：達成された結論と評価

本文（引用）：目的の文献に行き当たれるように詳細に

(<http://www.madlabo.com/mad/research/paper/paper1.htm#SEC10>、2008.6.5、
大幅な圧縮は高橋)

だが、このプロセスも次のように I II III IV の起承転結構成へと読み替えることができる。

- | | | |
|-----|------|------------------------------------|
| I | 問い | 動機 |
| II | 事情説明 | 過去 先行研究 |
| III | 転換点 | 実験 新実験による新発見（III 実験を II への逆接として配置） |
| IV | 答え | 結論 |

この布陣は、II の事情説明部分に先行研究が配置され、その不十分さを III の新発見が覆す二項対立構成原理に基づいている。〔先行研究 vs 新視点・新説〕とでも呼びうるこの逆接的展開こそは、実はずばり事例①～⑩において析出した新〈起承転結〉の基本であり、その生命線をなすものである。だが、それらに確認された III におけるどんでん返しの開始こそは、急転するハラハラドキドキの物語や諸分野の文章の基本構図をなすのみならず、ある問題を考究する学術的な論考をも含む様々なテキストの精髓ともいうべきものではないだろうか。なぜなら、テキストの存在はひとえに、先行する知見（先行研究、先入見）に対して逆接や転調をなしうる異物をどれほど深くその中に懐胎し、それを明確に表出しようかどうか、その説得力ある達成はかかっているからである。言いかえれば、異物とされ、論の展開の首尾一貫性を妨げる悪しきものとして蔑視されていた III 「転」を欠いて、はたして学問や思考、創作なるものが成立しうるのか、そもそも先行研究や現状の難題を意識せずに人は新説を提示しうるのか、という学術的方法や思考の根幹に関わる問いかけが、ここに露出しているのである。

III におかれる転の異質性や他者性を提示しえずして論考は論考たりえない。転における論理軌道の屈折と逸脱を内包せずにして、問答形式というテキストの根源的状态は成立しえない。III 転こそが、I 問いに対する答えを可能ならしめる新奇性だからである。III の逸脱こそが、すなわち II と III との間での非順接性こそが、テキストを初めてテキスト（問答装置）たらしめるものだからである。したがって、〔序論、本論、結論〕と直線的に、批判性を欠落させたまま順接的にのみ進行する思考論理軌道は、現状の苦境や無知を打破して解答に突き進む可能性を切り拓けず、畢竟、部分的な有効性の範囲内にいる限りでのみ、暫時的に、局所限定的に容認されうる不十分な論法にすぎない。そこから得られる解は、それが近視眼的にはいかに実践的有效性を帯びていたとしても、所詮不十分であやうい解以上のものではありえない。いいかえるならば、問いに対する解答を目指して進行する論理を、現在の知を否定するないしはその無力

をあざ笑う異物である新奇な世界、つまり危険な他者と渡りあうためのものとする時、解答を唯一与える他者・世界の要なすⅢ異物性・他者性をこそ極力排そうとする直線的な論理と証明は、十全な論理たりえないのである。

次に示す社団法人照明学会のサイトが正しくも記すように、論文の存在意義は主題の新奇性にこそかかっている。

1. 緒言

緒言では論文の主題(目的)、主題の意義、それがいまだ明らかにされて来ていないことを述べる。

(主題の意義)

(主題の新規性)

一般に論文主題を明確化するためにも、関連する公知文献を紹介し、どこまで先人および著者によって明らかにされているかを示したうえで、いまだ明確にされていない範囲を明示する手法が取られる。

2. (方法、手段)

3. (結果)

著者が採用した方法・手段によって得られた結果を記述する。

4. (検討)

得られた結果ならびに必要なに応じて公知文献を引用して論文の目的が達成されていることを検証する。

5. 結言

目的に対して得られた結論を要約する。

(<http://www.ieij.or.jp/JIEIJ/howto.html>、2008.6.5、圧縮、レイアウト変更、
下線は高橋)

だが、この理系好みの論構成も、ⅠⅡⅢⅣの起承転結形式に対応させて書き換えてみると、それが我知らず依拠している原像として、以下のような四分節構成法が浮かびあがってくる。

Ⅰ 問い	1. 緒言 (主題の意義)
Ⅱ 事情説明	(主題の新奇性) 先行研究の限界の明示
Ⅲ 転換点・新説提示	2. (方法、手段)
	3. (結果)
	4. (検討)
Ⅳ 答え	5. 結言

このように読み替えてみると、構成の母型回路（起承転結）への意識レベルに濃淡の差こそあれ、いずれも〔Ⅰ問い、Ⅱ事情説明・先行研究、Ⅲ新機軸、Ⅳ答え〕というように、現実には〈起承転結〉の四分節構成の軌道を順次進行しているのである。基本要素に還元してみるならば、起承転結とはまったく異質な論展開と思えた学術論文等を律しているものもまた、つまりは東洋の古典的なⅠⅡⅢⅣ・起承転結・四分節構成法であったことが明らかになる。それどころか、特殊的ともいえるアカデミズムの世界だけではなく、〈起承転結〉の隠然たる支配は、起承転結からは最も遠いものとして作成されていたビジネス文書においても同様で、例えばビジネス文書の書き方を明快にガイドするハウツウものの好著、西村克己『論理的な考え方が面白いほど身につく本』（中経出版、2007）を繙いてみると、一見したところ〔主張、論拠、データ〕なる直線的な論法を主張するかにみえながら、「論理的に問題を解決するときの手順」（pp. 40-43）等そこで唱道されている諸手続きは、その実、〈起承転結〉の四分節構成法にみごとに則ったものとなっている。〔Ⅰ問い、Ⅱ現状分析・問題点、Ⅲ改革方針・解決策立案、Ⅳ実施（解決策の実施と実施結果の評価）すなわち問題解決〕というように、その手続きもまた、起承転結の図式へとそのまま読み替えることができるからである。構成についてはひどく曖昧な言い方しかしていないアリストテレスも、『アレクサンドロスに贈る弁論術』（『アリストテレス全集16』 斉藤忍随、岩田靖史訳、岩波書店、1995）第29-33章（pp.401-414）を繙くと、Ⅰ緒論、Ⅱ出来事報告と説明の後、Ⅲ陳述と確証を行い、最後にⅣ要約をもってくるべしとしている。これもずばりⅠⅡⅢⅣの配列である。

このように、それぞれの運用にあわせて柔軟に変奏されているとはいえ、〈起承転結〉図式は、それを使うないしは正確には知らずして使わせられている者たちがその伏在を意識するとしな

いとに関わりなく、依然強靱に生き、そして不気味に作動しているのである。

9. 新〈起承転結〉発進す！

論文やビジネス文書等一般の文書にあってははなはだ不適格な構成モデルと見なされているこの起承転結形式は、随想等では従来、効果的な構成法として高く評価され、日本では不動の真理のように推奨されてきたものではある。事実また、中学の国語の文章構成では起承転結が教えられることになっており、起承転結図式は、日本の中等教育の現場では依然その威光を失ってはいない。しかしながら、それが効果を挙げているかとなると、徹底した文章訓練を行わない日本のこれまでの教育現況ではほとんど絶望的であるといった方がいいかもしれない。それは、起承転結形式を慣習にしたがい推奨する側の理解や推奨の仕方にも、起承転結を難じるビジネス界やアカデミズム界の立場と同様、基本的錯誤があったからである。

起承転結形式を典型的に示すものとして教科書等では、孟浩然の唐詩『春 曉』^{しゅんぎょう}がよく例示される。3～6世紀の六朝時代に基本形が意識され、8世紀の唐時代に成熟したとされるこの起

承転結の構成は、例えば、『小学館 大百科全書』（1994）の「起承転結」の項目では、漢詩研究の第一人者である石川忠久氏によって次のように説明されている（石川忠久『漢詩の魅力』ちくま学芸文庫、2006、pp.118-120にも同様の解が論じられている。I－IVの加筆、レイアウト変更は高橋）。

- I〔起〕^{しゅんみんあかつき}春眠 暁を覚えず^{しよしよていちよう}一春の朝の心地よさを、非凡な表現でまぜうたい起こす。
- II〔承〕^{やらい}処処啼鳥を聞く一春の朝の明るい情景をさらに展開させる。
- III〔転〕^{やらい}夜来風雨の声一春の朝の情景から、夕べの風雨の回想へと、場面が一転する。「夜」「風雨」などの語の醸し出す暗さが、起承の明るさと対照的で、みごとな転換をなす。
- IV〔結〕花落つること知る多少一転句を受けつつ、水に濡れた落下の散り敷く庭を想像して全体を締めくくり、むせるような春の気分を言外に漂わせ、尽きぬ余韻を残す。

問題となるIII転については「みごとな転換をなす」として、またIV結については「全体を締めくくり（…）尽きぬ余韻を残す」として手ばなしで称賛されている。なるほどそうかとも思えなくでもないが、それでもなぜここでの転が「みごとな転換をなす」といえるのか、結がなぜ「尽きぬ余韻」として感じられるのか、自明とされるかにみえる上記の正統的解説を読んでも、詩心のない者にはどうもしっくりこない隔靴搔痒の感が残る。なぜそうすべきかが、根拠づけられていないからである。

こうした漢詩や随想のように心情的な表現のみをめざすテキストにおいては、転におけるこうした気まぐれな導入と転調も肯定的なものとして感受され、比類ない効果を発揮することはあるのかもしれないとはいえ、結局はその程度にとどまり、それ以上ではありえない。それゆえ、首尾一貫性をもたず論理的なものとは無縁な転や、それに基づく起承転結構成を、今日積極的にもちいることは極めてむずかしい。転での首尾一貫性の放棄ゆえに生じる近年の日本での、ビジネス文書等における起承転結の忌避、アカデミズムにおける起承転結に対する否定的見方の決定的な深まり、欧米による起承転結構成への困惑や批判も、確かにむりからぬものとして承認せざるをえない（William Grabe & Robert B. Kaplan, *Theory & Practice of Writing*, Longmann 1996, p. 188）。

だが、本当にそうだろうか。起承転結の範例ともいべきこの孟浩然の漢詩こそは、その構成法にふさわしく、たんに心情的な詩的境地を詠ったものというよりは、本論考において新聞記事等から析出してみせた四分節構成 I II III IV による Q & A、すなわち I は問い、IV がそれへの答えとなる原基的な母型回路に即して論理的に読まれるべきものなのではないのだろうか。

I で春暁の呈示が、II では春への賛美がともに長調で明るく奏でられている。だが、次に取りあげる事例⑩のヘルダーリンの詩「生のなかば」において秋の爛熟光景が、恍惚や恐怖とと

もに提示されていたのと同じように、「春暁」にみられる明るさは疑念を懐胎した明るさにすぎず、起句にはそのような春への不信がひそかに提議されている。春暁に浸りつつも、その奥のない牧歌的明るさへの深い疑念と失望が I の起（問い）に提議され、そしてこれまた「生の中かば」での爛熟の反復同様に、この「春暁」でも春ののどかさへの疑問の確認と、それへの失望のよりいっそうの深まりが、続く II の承において反復的に暗示される。春暁は、所詮明るいくつろぎを越えるものではないのである。

ところが、II の鳥の声という音の響をアリアドネの糸のようにして、音から音へと強い連想が働くや、詩の世界は突如、自然の闇世界へと深く沈潜していく。のどかな光景という狭い枠組みを破り、春なるものの意味を思考する論理が、現実の狭い場を超えゆく音なるものに導かれて、現実の彼方の領域へと突き進む。鳥の鳴き声と同じく、しかしその鳥たちのさえずりとは比べようのないスケールの音響として春の夜の嵐の音は響きわたり、暗い短調の嵐が猛威をふるい、吹き荒れる。この時 III 「転」において開示されたディオニュソスの蹂躞を承けた IV において、I と II のアポロ的な明るいのどかな春に、III のディオニュソス的な夜の狂乱とが融合して、眼前に生と死とが、視覚と聴覚とがないまぜになって絢爛と広がる、高次の春暁が現出するのである。それが、I の問いである深みのない春への不審の念に対する IV での春を是認する解答なのである。

I と II は現実の real な光景、対するに III の夜来の風雨は今はない非現実の virtual な光景。その現実と非現実との融合が IV の「花落つこと知る多少」に表現されるのである。それゆえ、起承転結の典型とされる孟浩然のこの五言絶句は、「ところで」といったぐあいに論理をはずして連想に気楽に逸脱したといった類の心情的なものではない。I と II の失望を突き詰めた末に、その可視的な狭い理解枠を超えいで、可視的世界（現在）に非可視的世界（過去）を統合して次元を上げることを、いわば論理的に企てているものであったのである。

現在は可視的な光景と響きを提示する II に対して、今は聞くことはできないが遙かに生々しい夜来風雨の声という表現によって、III のバーチャルな virtual 内的宇宙の中に不可視の光景が喚び出される。これは、しかし、自然科学論文における論証プロセスと同じではないだろうか。

可視的な知識すなわち既知の知識として確定している II（先行研究）に、未来につながる新奇な事実を模索して III の不可視領域を潜らせる（実験させる）ことで、これまでとはまったく異なる新事実が浮かびあがる。II と III の融合により、従来の現実概念は変容し高次元化したからである。I II の単純な長調の調べには、III の短調の陰りが蛇のように絡みつき、ここに短調と長調とが贅美にいりまじる不可思議な調べが誕生するのである。そのような次元の深化への急転、それが起承転結なる思考装置に、とりわけ III 転に秘められていた真の機能であった。そのように見てくると、漢詩の四分節構成法は必ずしも学術論文の論理展開と異質なもののとはいえないどころか、ほとんど相同的な思考軌道を描いているように見えるのである。

ベートーヴェンと同年生まれのドイツ・ロマン派の詩人ヘルダーリンの名高い近代の詩「生のなかば（半分）」（1803）は、その東洋的な起承転結原理と同じ思考軌道を描き、但し、この場合はⅢにおいて死へと反転する。

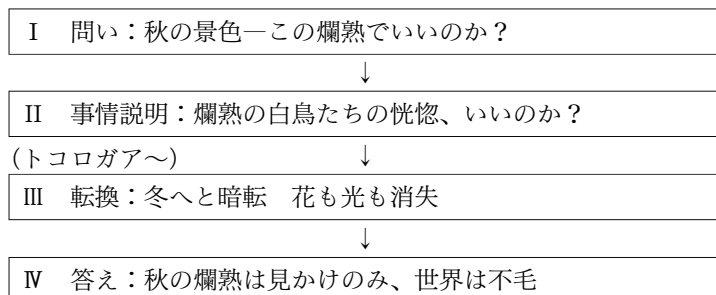
事例⑪ ヘルダーリン「生のなかば」

『ヘルダーリン全集 2 詩Ⅱ』手塚富雄訳、河出書房新社、1983

- I 黄に熟れる梨は枝にたわわに
茨は咲きみちて
陸は湖に陥ちる。
- II むつまじい白鳥よ、おんみらは
くちづけに酔い痴れて
頭をひたす、
きよらかな静かな水に。
- III しかしわが悲傷は！ どこに
わたしは花を摘もう、冬になれば。どこに
日の光を
地上の蔭を 求めよう。
- IV 囲壁はつめたく
ことばなく立ち 風吹けば鳴る、
屋根の風見は

（下線とⅠⅡⅢⅣは高橋）

図11 ヘルダーリンの詩「生のなかば」図式



Iの豊かな実りの秋、IIの優美な白鳥たちの性的な陶醉、だが、その生の秋の豊麗さは、III湖水に頭をひたしたその瞬間、冬の不毛と冷気を浴びて絶望や死へと凍結する(IV)。冷気に晒

され魂が凝固するのである。自由韻律によるこの詩は、「生のなかば（半分）」なるその題そのままに、春夏秋冬の四季の後半の半分である秋ⅠⅡと冬ⅢⅣだけが語られている。生の輝きが上半分に、生なき死滅の光景は下半分という垂直の配置をとり、生と死が互いに境を接して反転、白鳥たちと世界とがまっすぐ下へと転落していく対照性をどぎつく図示する残酷な構成をとっている。ⅡとⅢは、Ⅱ生命領域（＋）からⅢ非生命領域すなわち死滅（－）へと反転する相反的なものとして対置されているのである。ⅠはⅡに等しく、ⅡとⅢは相反して、ⅡからⅢへの転落がなされ、そのⅢの逆転からⅣの絶望的な認識が帰結する。外枠となってⅡとⅢを囲繞するⅠの黄金の豊饒は、Ⅳの荒廃をこそその実相であるとしてⅠ問いへの解答がⅣにおいて暗澹となされ、「春暁」とは逆に、すべては希望なき絶望のままに幕を閉じるのである。

テキストの中心線なすⅢの部分に劇的な転換点が配置される、ここにポイントがある。扇の要のようにⅠⅡ／ⅢⅣの二つの部分が対称形状に対峙しているのである。その理由は、ⅠⅡが問い（Q）であるのに対してⅢⅣは答え（A）であり、それらを分かち深い決定的な溝はⅡとⅢとの間に走っているからである。「春暁」と「生の半ば」の二例はそのからくりを鮮明に示している。

〔Ⅰ問い／Ⅳ答え〕の異質な二部分によって問答を行うこうした基本構成は、当然その当該のテキストの産出する意味に深く関わるが、それと同時に、配置によって意味を発現させるそうした形態とは、テキストの意味内容発生以前に存在し、テキストの動きをいわば先験的に誘導しているものでもある。テキストが生成されて初めて構成が顕出すると同時に、母型回路は先験的にテキストに先在しているのである。その回路とは、死と復活の「V字プロセス」を、〔問い（解答不能の死の状態）／答え（解答の光を獲得した復活）〕としてより抽象的な鋳型へと変奏、変形したもので、大元の母型回路（死と復活、闇と光）に負けず劣らずこれまた驚くばかりに単純そのものではある。だが、その回路は抽象化したことによって、Ⅲに配置される身体的ないしは主観的関心は、関心の志向性領域として抽象化され、このⅠⅡⅢⅣ回路の汎用性は一気に広がり、言葉の及ぶところほとんどあらゆる領域をすら覆うようになる。これまで取り上げた諸事例からある程度想像されうのように、この原基的回路から産出されるテキストの多様性、豊かさは尋常ではなく、巧拙、曖昧・明晰等その表出の仕方には濃淡多様な違いはあれ、ほとんど融通無碍にも近く、単一構造・回路の多様な変容ぶりには、フラクタル図形のそれに劣らず、まことに想像を絶するものがある。

だが、死（問い）と復活（答え）として伏在するこの新〈起承転結〉なる母型回路は、本当に汎用性を帯びているのだろうか。あるとして一体どの程度の汎用性を秘めているのだろうか。そのための検証は、これまで扱ったテキストの多様性にとどまることなく、新聞とは異なる諸ジャンルのテキスト、それも極小のテキストから短めのもの、やや長めのテキストから長大なそれにいたる諸例においてなされなくてはならない。その試みと確定は、これまでに筆者によりすでにさまざまなテキストにおいて行われてきたが、本論考の枠内では、紙数の許容範囲を

大きく超えるという点から検証対象をあえて短いテキストにのみ限定してきた。

しかし、短いテキストに限定したとするならば、さらに短いテキストにおいてもそのからくりの潜在を検証する必要もあるかもしれない。そこで、これまで諸事例としてとりあげたテキストに比べても異常なまでに短いテキスト、例えば上記の五言絶句「春暁」や詩「生の半ば」にさえ劣らぬ極小さを示す異質な領域のテキストにおいても、新〈起承転結〉原理の威力を検証してみようと思う。そこにおいても、極度なまでに圧縮・変奏されているとはいえ、Q&A形式及びⅠⅡⅢⅣの四分節構成がやはり明確に機能していることが確認されるはずである。

最初の例は、一時一世を風靡したギター侍の愉快な話芸である（下線は高橋）。

事例⑫ ギター侍波田陽区

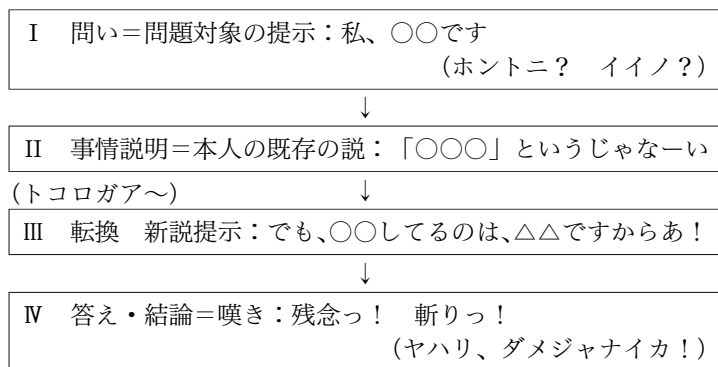
韓国の女性歌手 BoA 篇一日韓虹の架け橋

- I 私、BoA です。韓国歌姫、BoA です。
- II 私の歌が日韓の架け橋になると私、願ってます。って言うじゃな〜い？
- III でも、あんたが作った架け橋 ユンソナが利用してますから！ 残念！！
- IV 悲しみのアン・ジョンファン 斬りっ！

（波田陽区『ギター侍の書』日本テレビ放送網株式会社、2004、pp.15-16、下線は高橋）

この短い芸を論理的な図式にすると、以下のようなになる。

図12 ギター侍、日韓虹の架け橋図式



II事情説明を先行研究や既存の見方とすれば、それを覆すIII転換点は、新説の提示や新実験による新事実の確認といいかえることができる。明確な転換がIIIに逆接的に発生しているからである。

「くま」という語がひたすらシンプルに繰り返されるにも似た宇多田ヒカルの童謡「ぼくはく

ま」(NHK「みんなのうた」2006年10月放送、同11月東芝 EMI 発売)も、ギター侍と同じ起承転結構成に基づいて作られている。一番の歌詞のみ分節してみよう。

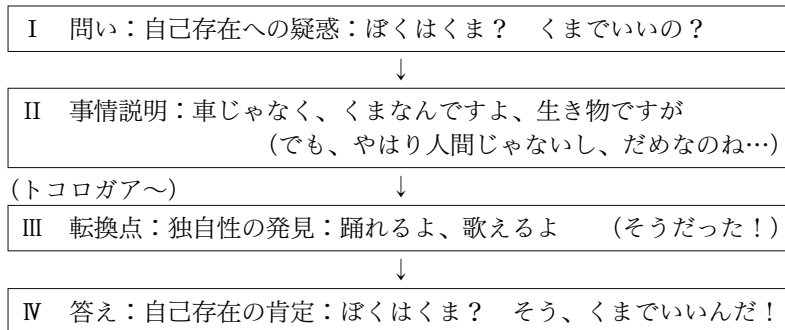
事例⑬ 宇多田ヒカル「ぼくはくま」

宇多田ヒカル作詞・作曲

- ぼくはくま
- I ぼくはくま くま くま くま
- II 車じゃないよ くま くま くま
- III 歩けないけど踊れるよ
しゃべれないけど歌えるよ
- IV ぼくはくま くま くま くま

くまという単語のある意味ひたすらな反復、とでもいうべきずいぶんシンプルな歌詞である。けれども、よく見てみると、このテキストもまた次のような四分節構成図式に基づいていることがわかる。

図13 「ぼくはくま」図式



Iの自己不信がIVにおいて払拭され、くまくんの存在は、バカボンのパパの託宣を受けたように無条件で肯定される構成なのである。問い？が確信！に変わる。それは、IIIの事態反転からの帰結であり、くまくんの自己存在の肯定は、I II III IVと進行する四分節構成法(起承転結)という論理形式がもたらしてくれたものである。こうした構成は、Aメロ、Bメロに続いてメロディーのサビをIIIに配置するポップスや演歌等によって私たちにも実はまことにお馴染みのものであるが、その伝統的な構成である起承転結に則ることによって、袴をはいたギター侍はIV解答となる苦悶へと論理的に驀進し、「ぼくはくま」のくまくんも、自己存在を肯定するIVの奇跡を目のあたりにすることができたのである。

10. 遍在する I II III IV 構成

古代の漢詩(五言絶句)、近代ドイツの詩、現代のコメディアン芸、現代の童謡ないしはポップスといった、異なる時代異なるジャンルの異常に短い例を4つ例示し、それらが新〈起承転結〉原理に基づいて解析しうることを確認してみたが、短さという意味ではそれらに十分匹敵しうる新聞記事のリードにおいても、その根源的な母型回路は隠然たる力をふるっている。

一般に新聞記事は、見出し、リード、本文、そして時に写真から構成される。この形式は、17世紀英国のサミュエル・ピープス卿の収集になる貴重なブロード・シート（瓦版）集が如実に示しているように⁹⁾、新聞がその存在を確立する以前のイギリス等において人気のあった大衆瓦版（ブロード・シート broadsheet）に、何か印象的な事件についての報道が、巷に知られていた賛美歌等のメロディーを指定した上で読者たちが韻文で歌うバラッド（物語歌）として、木版で印刷され、広範に流布していたその揺籃期から顕著にあらわれ、完成されていたものである。驚くべきは、記事本文を数行で簡潔に要約するリード lead と呼ばれる部分が、その初期形態から早くも存在していたことである。そして面白いことに、現代の新聞においてそのリードなるものは、本文のたんなる要約というにとどまらず、リードそれ自体がテキスト本文の構成に属するものとして機能し、新〈起承転結〉 I II III IV における I 問い・仮説提示の機能がそこに付託されることが多い。驚くべきはさらにある。そのリードそのものに照準を絞って、それを構成するわずか数行の文章を分節してみると、リードはフラクタル図形しながらにこれまた小さな文章のテキストとして I II III IV の四分節構成を用いて、その任である要約意図を遂行しているのである。その事実を確認する意味で、近年大きな話題となった明暗二つの事件を伝える読売新聞記事の、リード部分のみを取り上げてみよう（空行による分節は高橋）。

事例⑭ 紀子さま 男子ご出産

2006年9月6日 読売新聞

皇室 41年ぶり 2558グラム 皇位継承順3位 12日「命名の儀」

帝王切開、母子ともお健やか

I 秋篠宮妃紀子さま（39）は6月午前8時27分、入院先の東京・南麻布の総合母子保健センター「愛育病院」（中林正雄院長）で帝王切開手術を受け、男のお子さまを出産された。

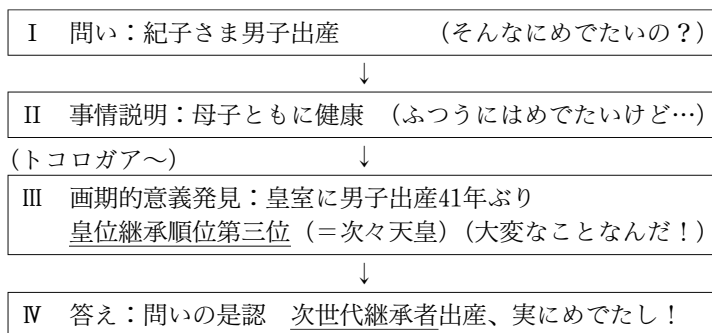
II お子さまは体重2558グラム、身長48.8センチで、母子ともに非常にお健やかという。

III 皇室に男子が誕生したのは父親の秋篠宮さま（40）以来41年ぶりで、皇位継承順位は皇太子さま（46）、秋篠宮さまに次いで第3位となる。

Ⅳ 皇太子さまや秋篠宮さまの次世代の継承者を得て、皇室は喜びに包まれている。

短いリードに書かれたこの文章群において最も重要な情報は、皇室における男子誕生のもつ政治的意味である。たんに皇室における誕生がめでたいといおうとしているのではないからである。それゆえ、悲願の男子誕生という事件が帯びる政治的意味に、記事の書き手が照準を定めた瞬間、短い要約のリードそのものにおいてもⅠⅡⅢⅣの構成回路が自動的に起動する。つまり、男子誕生の報道を、そのリードの要となるⅢの位置にまず無条件で配置し、その後そのⅢを囲むようにして他のⅠⅡⅣの各部分ががっちりと組み立てられているのである。

図14 紀子さま男子ご出産図式



Ⅰ問いはⅣ答え（Ⅰの是認と深化）に等しい。Ⅲは、その事実が社会的に有する特別の意義を明らかにして、ある意味で私的ないしは一般的な出産と同次元のⅡの事実から、論の軌道を公的な意義次元へと大きく転回させる。Ⅲでは、つまりⅡの出産事実報告から論進行が切断されて、社会的意味の次元へと不意の転換と深化が行われているのである。これまでの諸事例で確認されたⅢにおける個人的身体の内的領域への次元転換とはこれはいささか異なるとはいえ、社会といういわば人々の集合体なる身体が共通して感じとる関心の内的宇宙へと、記事を書く者の筆は沈降し遡及しようとしたのである。その集合的身体（社会）の最関心事が、日本社会を当時賑わせていた皇位継承問題における順位第三位という深甚な意味を帯びた出来事であった。かくしてそのⅢを中心としてⅠⅡⅣは配置され、Ⅲを中心とする喜びの輪を描いて周回することになるのである。

それとは逆に、2008年6月、日本中の人々を震撼させた秋葉原通り魔事件を伝える読売新聞のリードもまた、人々にとって最も関心のある事実、犯行の予告事実、及び殺す相手は「誰でもよかった」という衝撃的な供述事実をテキストの要となるⅢの位置に配置して、記事の要約を試みようとしている。

事例⑮ 秋葉原 無差別7人殺害

2008年6月9日月曜 読売新聞 夕刊

トラックではね、刺す

25歳逮捕 携帯サイトに予告

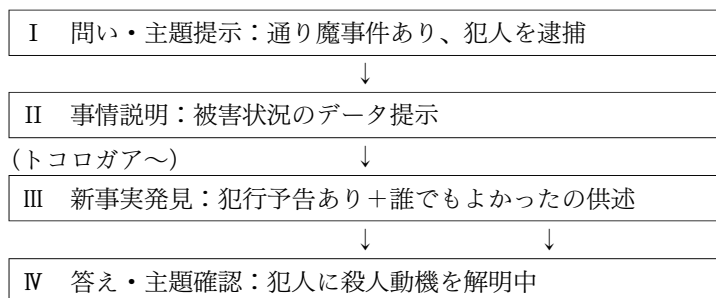
I 8日午後、歩行者天国でにぎわう東京・秋葉原の交差点で、男が通行人をトラックではねた後、ナイフで次々と切りつける通り魔事件があり、警視庁は、静岡県裾野市富沢、派遣社員加藤^{ともひろ}智大容疑者（25）を殺人未遂の現行犯で逮捕した。

II 被害者は死者7人、重軽傷者10人にのぼった。

III 加藤容疑者は犯行の約7時間前から携帯電話のサイトで「秋葉原で人を殺します」と犯行を予告。調べに対し「人を殺すために秋葉原に来た。誰でもよかった」などと供述している。

III 同庁捜査1課では特捜本部を設置し、容疑を殺人に切り替えて動機の解明などを進めている。

図15 秋葉原無差別7人殺害図式



II事情説明にはいるべき事項がI主題提示（問い）の部分に押しこまれ、主題提示となるIの部分が高めに、逆にIIが簡単になっているとはいえ、関心度の高い犯人の供述内容がIIIに配置されている構図は、これまでの諸事例と同じである。テキスト構成というのは、思考経路を誘導する論理回路の問題であるため、そこに盛りこまれる分野の内容や分量の大小や巧拙には左右されないからである。事件の客観的報道であるため、これまで取りあげてきた文章とは異なり、書き手である一個人が内的な謎めく自己自身の身体感覚と深く切り結ぶ身体的関与は許されず、ここでは、現代日本社会の常識を覆す重要な意味を帯びる犯人の供述をIIIに配置する

I II III IVの四分節構成として、機械的に処理されているかにみえる。

しかしながら、そうした報道も、各種メディアが顧客とする現代日本社会の大衆という集合体を対象として紙面を構成、情報を提供するものである。それゆえ、個人にとって身体的であった内的宇宙の次元IIIは、より抽象化されてはいくものの、顧客である現代日本社会の大衆という集合体にとってとりわけ関心度の高いセンセーショナルな情報が必然的にそのIII転の位置に配置されることになる。本論の「2. 自分の身体で確認する」ではあからさまであったあの身体的関心濃度は、社会的報道においても実はいささかも色褪せることなく、最も関心をひく情報は、ここでもその定則に基づいてIIIに振り分けられているのである。

最も関心濃度の高いものがIIIに配置される。この定則は、実はそうした新聞記事や個人的想いをつづった文章とは縁遠いはずの科学的論文においても、同様に当てはまるものである。

科学は客観的なものではない。データは基本的には断片的なものであり、その読み方によって幾重にも解説される。見えない文脈をどう解説するかが重要になるからである。それぞれの研究領域には、パラダイム（準拠枠・模範例）という規範が君臨している。抽象化されているが、それもまた研究分野という名の一種の関心集合体（身体）であり、それに基づく関心濃度というものが支配しているのである。事象は、その身体的濃度に基づいて選別される。そして、その選別が厳密なものではなく、つまるところ恣意的になされているものであることは、クーンのパラダイム（準拠枠）というその表現からも、また先に挙げた William Grabe & Robert B. Kaplan たちが『ライティングの理論と実践 Theory & Practice of Writing』（Addison Wesley Longman, 1996、pp.165-168）の中で指摘している科学的データの恣意的処理の実相からも明らかである（野家啓一『パラダイムとは何か：クーンの科学史革命』講談社学術文庫、2008）。ある特定の研究分野に所属する者は、その分野で認知されるためには、その特有のパラダイムに沿う形でデータを記述するという歪曲を、我知らず余儀なくされているからである。その意味で学術論文の記述もまた、一種の身体性の延長である特殊な選択と規範コードに基づいた危うい客観性幻像のもと、きわめて相対的に遂行されているのである。

その意味で学術論文といえども、孟浩然の漢詩のような芸術創作と決定的に異なるものではない。ジョージ・レイコフがそのラジカルな書『身体のうちなる哲学』（Goerge Lakoff & Mark Johnson: Philosophy in the flesh - The embodied mind and its challenge to Western thought, Basic Book, 1999.邦訳『肉中の哲学』計見一雄訳、哲学書房、2004、訳はひどい）において、西洋の形而上学やその思考体系と、その傘下に無意識的に蜷集し隷従している現代の科学的思考を、身体の隠喩的な写像の恣意的なすりかえとして、認知意味論の立場から厳しく批判しているように、学術論文もつまるところは、隠喩による写像等によってその外観の外延を飛躍的に拡大するかにみえながら、所詮は身体的なものを越えることはできない。厳密な客観性を謳いIIIの転に配される新実験や新仮説も、犬との別れに揺れる若い女性が告白する心情の不思議さ（事例⑤）といささかも異なるところがないのである。学術的な論考やそれをミニチュアに

した科学記事も、既知のデータに異を唱え、新しい実験を行うⅢ転の部分に重心をすえざるをえないという不可避の構造に呪縛されているという点では、本論中でこれまで例示してきた諸事例と基本的には相同的なのである。

自然科学におけるそのような論述軌道をわかりやすく示す例として、もうひとつ、新聞に掲載された短い科学記事の構成を見てみよう（ちなみに、記事末に付記されていた受容体についての注釈は削除している）。

事例⑯ たばこの毒 細胞レベルでは ダイオキシン似

2006年7月13日 朝日新聞 夕刊

山梨大研究 影響 同じメカニズムか

Ⅰ たばこを吸うと、猛毒ダイオキシンが大量に体内に入った時と同じ反応が細胞内で起こる一。

こんな報告を、山梨大医学工学総合研究部の北村正敬教授（分子情報伝達学）らが、米学術誌「キャンサー・リサーチ」15日号に発表する。

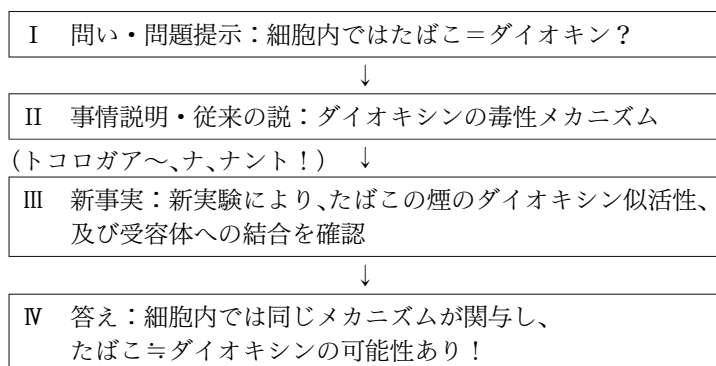
Ⅱ ダイオキシンはヒトの体内に入ると、細胞にある受容体（カギ穴）にカギが入るように結びついて細胞を活性化させ、毒性を発揮する。国は健康に影響しない1日の摂取量を、体重1キロ当たり4ピコグラム（ピコは1兆分の1）と示している。

Ⅲ 北村さんらは、たばこの煙とこのダイオキシンの受容体とのかかわりに着目。市販されているたばこ1本分の煙を溶かした液体を使い、マウスの細胞の反応を調べた。国の基準の164～656倍のダイオキシンが受容体に結びついた状態にあたる活性がみられ、タール量が多いと活性も高くなる傾向が出た。

さらに、受容体に結合すると血中に特殊な酵素が出るように遺伝子を操作したマウスに、たばこの煙を吸わせると、24時間後に酵素の量が約5倍に増えた。

Ⅳ 北村さんは「たばことかわっていると見られる発がんや妊娠異常などはダイオキシンの健康被害と似ており、同じメカニズムが関与している可能性がある」と話す。

図16 たばことダイオキシン図式



IIに先行研究が示された後、IIIにおいて新しい実験が企てられ、IIの確認を超えてたその先へと探求が推進される。IIIは、IIの事情説明（先行研究）をふまえて、その限界を乗り越えていく。その限りでIIとIIIとの間には決定的な亀裂が走り、論のベクトルには転換が生じている。科学論文はつまり、純朴に繋がる順接ではなく、IIとIIIとの間での逆接関係をこそその不可欠の条件や生命線としているという驚きの、そして思えば自明の事実がここからも明らかになる。科学論文にとどまらず、論考なるものはなべて、先行研究の蒸し返しや紹介に留まるつもりでなければ、「ところがあ～」による逆接を基軸としなければならない。つまり、起承転結に則りIIIにおける反転を内包して、そのIIIという異分子をこそ舞台のハイライトとすることのできない論文は、そもそも論文の名に値しないことになる。

その初歩的なからくりを確認するべく、もうひとつ新聞に掲載された短い科学記事をここに例示してみよう。

事例⑰ 去った夫の声 日々に疎し

2006年（平成18年）9月17日 朝日新聞

セクスイインコの場合ですが… 別居5ヶ月で記憶残らず

I 別居状態が2ヶ月なら夫婦関係は修復できるが、5ヶ月をすぎると妻は夫の声を聞いても素知らぬ顔一。一夫一婦制の鳥として知られるセクスイインコのメスは、意外にドライな性質であることが、日本女子大理学部（東京都文京区）の研究チームの実験で分かった。「死別した場合などに、昔の夫の記憶が残り続けると、次の繁殖の障害になるからではないか」と研究チームは推測している。21日から島根大学で始まる日本動物学会で発表する。（山本智之）

II セクスイインコは1羽ごとに鳴き声のパターンが微妙に異なり、妻は自分の夫の声を

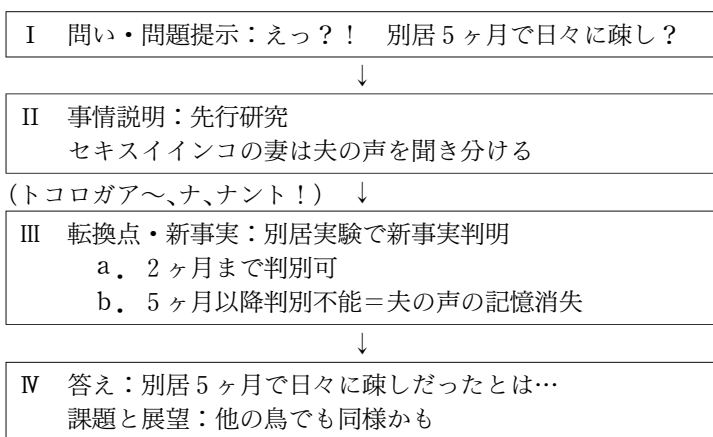
聞き分けて鳴き返すことが知られている。

Ⅲ 動物の記憶を研究テーマにしている日本女子大大学院の兼定彩さん、宮本武典教授(行動神経科学)らの研究チームは、セキスイインコのカップル12組を引き離し、互いに鳴き声が聞こえないようにした。その上で、夫の声と別のオスの声を交互にスピーカーで妻に聞かせ、反応の違いを調べた。

その結果、引き離してから2ヶ月までは、妻が鳴き返した回数のうち夫に対する反応は7割を占めた。ところが、5ヶ月が経過すると、夫の声に対する反応も、別のオスに対する反応も、ともに5割程度と、違いがみられなくなった。これは、夫の声に対する記憶がなくなったことを示しているという。

Ⅳ 宮本教授は「音声を学習する能力が高いオウム類やスズメ類、ハチドリ類などのメスも同様の性質をもつ可能性が高い」と話している。

図17 去るインコ日々に疎し図式



先行研究Ⅱを基にして、新しい実験とその画期的な結果がⅢに提示されている。その点で事例⑩の〔たばこニダイオキシン〕説と相同的な構成になっている。ところが、この事例17では、ハチドリ類等での可能性を示唆するややひねりを加えた着地になっていて、Ⅳ答えには、Ⅰ問いに明快に対応する記述がない。答えが非明示になっている。それは、Ⅰに詳しく解答がありⅢにおいてもすでに結論が出されていたため、あえてⅣに同じ文言を繰り返すことは不要と判断されたのではないかと推論される。

しかしながら、そうしたⅠⅣでの反復を省略する書き方は、学術論文の場合、必ずしも容認されるものとはいえない。問答形式をとるという論文の生命線ともいべき約束事に、それは

違反・抵触するためである。日本語の文章として見る限り、同じことの繰り返しは退屈なものがあるとしても、事実の明確な確認を必須とする論文の場合、Ⅰに提示した問いや命題は、最後のⅣにおいて厳格に反復してその正否を確認することを必要とする。ⅠとⅣは問答形式の問いと答えの機能を担い、論文の起点と終点を決めるものだからである。

とはいいい条、ⅠとⅣの明確な対応や、ⅣにおけるⅠのあからさまな反復を煩瑣なものと考え、野暮な繰り返しは避ける書き方にも実は十分な意味がある。

シカゴ・マニュアル等、欧米では自明とされてきた直線的に論理を進行させようとするリズムにおいては、ⅠⅡⅢにおいて言及されていなかった要素が、Ⅳの総括・結論部に記されることは、極力避けなければならない。ハチドリ類がどうのという展開は、その意味からいって唐突に持ち出された不正なカードということになる。だが、そうした捉え方は、四分節構成法という装置の秘めている機能を十全にくみ上げているとはいいいがたい。四分節構成法に基づくテキストや論文は、そのみで閉鎖的に完結した自律的なものではないからである。

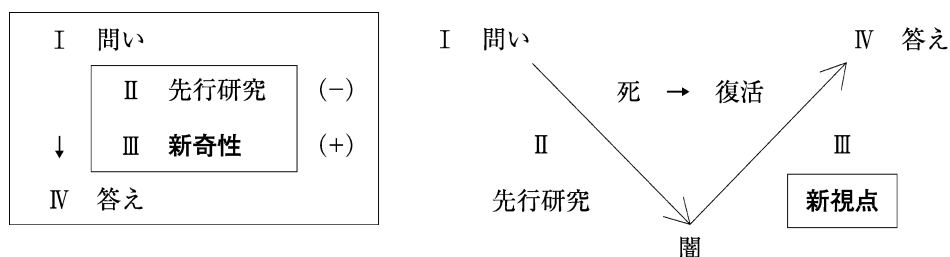
テキストは、そもそも暫定的にのみ閉鎖系として呈示されているだけのことで、人間による他の創作物と同様、所詮は自然という巨大な荒海の中にいわば危うい浮島のように浮遊しているにすぎないものである。閉鎖系のように見えるその小さな島宇宙という井の中のかかわずの外には、広大な荒海が、限りない天が広がっている。ⅠⅡⅢⅣのⅠとⅣは、その島宇宙の外にある地平に直接繋がっていて、人はⅠにおいてその外宇宙からテキストという閉鎖系宇宙に侵入し、Ⅳにおいてそのテキスト世界からふたたびその外にある、より広大な地平へと歩み出る。テキストというマイクロ世界は、ⅠとⅣにおいてのみ、マクロなす社会や生活、宇宙世界へと接しているのである。Ⅳ答え・結論部分において課題や展望、新たな可能性が記されることが多いのも、その考察の反省や意味づけが必要だからというだけではなく、Ⅳというものがそもそもそのような外の世界や未来の時間へと向かう半開放系の境界次元であったからなのである。

そうしたⅠとⅣの機能は、昔話や民話におなじみの「昔々あるところに」で不思議な話に引きずりこむ発句や、「いちごさけた」といって逆に荒唐無稽な話からいつもの日常世界へと聞き手たちの心を引き戻す結句の帯びる役割ととてもよく似ている。そうした発句と結句の圍繞により形成されたバリアは、荒唐無稽な物語をその内側に庇護すると同時に、そのバリアの外に生きる人々をもその非日常的なカオスから防御するという二重の機能をもっているものである（高橋『グリム童話 冥府への旅』白水社、1996、第一章）。してみると、論構成における内なる領域のⅡとⅢもまた、社会や世界に繋がり外枠を形成するⅠとⅣによって圍繞され、庇護されていたのかもしれない。

たしかに、ⅡとⅢにテキストの内世界は本格的に広がり、なかでも社会的常識の延長線上にあるⅡとは大きく異なる異次元を開示するⅢは、日常世界や日常世界と同質のⅡを危険に晒す新規なものに満ちあふれている。そこは新規ではあるが、カオスゆえに既知の体系やパラダイムを蹂躪してしまう危険な坩堝かもしれない。しかしながら、良識を越えた新奇性に満ちあふ

れているからこそ、科学であれば新奇性を帯びた新事実を、芸術であれば驚きの想像世界を発見することが可能である。Ⅲの内的宇宙は、破滅の危険性と予想を超えた宝発見との混在する異郷の魅力に満ちあふれている。つまり、テキストの本質は、虎穴に入らずんば虎児をえず、なのである。だが、それは虎穴ゆえに大きな問題がある。テキストと思考は、それゆえの2つの難題に直面することになるからである。その未知である内宇宙の豊かな潜在力をいかにさぐりあて活用しうるか、という第一の難題と同時に、虎穴（＝内的宇宙）の予測不可能な危険性による破滅から身を守るための安全装置（セーフティーガード）をいかにして開発するか、という必須となる第二の難題が、それである。

第二の難題には、テキストそのものの形式すなわち回路そのものがすでにその解決の方途を与えてくれていた。テキストという内的な島宇宙を圍繞する外宇宙とつながるⅠとⅣの部分に、内宇宙そのものを庇護すると同時に、内宇宙の危険が外の世界（日常世界・常識・パラダイム）へと氾濫することを防ぐ外枠機能が秘かに付託されていたからである。昔話の発句や結句による外枠の機能、つまりギリシア悲劇の合唱団コロスと同じ二重の機能を、入り口と出口をなすⅠ問いとⅣ答えの部分に委ねたのである。テキストがⅠ問いとⅣ答えによる問答形式をとるのも、その意味では、ⅡやⅢとりわけⅢ内的宇宙の暴走によるテキスト自体の自己崩壊を回避するためでもある。そのような防御装置を装填されていればこそ、テキストは、Ⅲ未知なる内的宇宙への潜行に大胆に挑むことができる。テキストとは、つまりある特殊な問題考察のために、あえて一時的に閉鎖系を創り出して、Ⅲという大きく口を開けた魅力的ではあるが危険な迷宮なす内的宇宙への、暗中模索の潜行冒険を行う、あるいはその冒険を可能ならしめる比類ない問題解決装置であったのである。



テキストは、いかなるものであれ、基本的にはQ & Aからできている閉鎖系の問題解決・解答装置である。ⅠⅡにおいて内宇宙への下降の旅（▼）が、ⅢⅣにおいては逆に内宇宙から外宇宙に向けての上行の旅（▲）が対をなすように配置され、試みられる。これまでの諸事例解析によって解明された定則、すなわち〔Ⅰ問い＝Ⅳ答え、Ⅱ／Ⅲ、ⅠⅡ／ⅢⅣ、Ⅲ→Ⅳ〕の意味していたもの、それは、未知の領域への下降と上昇のV字状のプロセス、すなわち生から死へ（▼）、死から生への（▲）死と復活からなるプロセス（V字プロセス▼▲）の厳然たる支配であったのである。

テキストをそのような驚異のQ&A問題解決装置として理解する時、Ⅲに配置されるものは、もはや個人的に最も関心度の高いもの、個人的主観的性格を有するものである必要は全くなくなる。命題を証明する数式の証明部分であっても社会的報道であってもその基本は同じ、社会的に公的に関心度の強いもの、ある時代やある社会、ある事態にとって最も重要と判断された身体的関心濃度の高い情報がⅢに配置されうからである。

人は、意識的にであれ無意識的にであれ、その原基ともいふべきその死と復活の物語によって考え、表現しようとする。その多様性は慶賀とすべきものではあれ、またその表出にも巧拙や濃淡はあれ、大局的にはすべて原基的物語の多彩な変奏や変換に起因するにすぎない。不変の母型回路の相と同時に、それを被覆し固有性を顕示する多様な変換の相とが、私たちの精神的な創造行為を律しているのである。物語だけではない、物語とはかなり異質のものにさえ見えるプラトンやスピノザ等の思想書や現代の修士・博士論文をはじめとする文系理系の論文にも、それら種々の物語と共通する語り方や構成法が潜在している。

その基本となる「問いと答え」すなわちQ&Aのセット群が連鎖する論理的な組立ないしは配列の方法は、子供がよるこぶ昔話や、古代の壮麗な神話、ジョゼフ・キャンベルの神話論『千の顔をもつ英雄』（平田武靖、浅輪幸夫監訳、人文書院、1984）を基本コンセプトとした映画『スター・ウォーズ』シリーズがそのいい例であるように、血湧き肉躍るファンタジーや冒険映画や冒険小説、コミックやアニメ、涙々で押しまくる韓流ドラマ、謎解きに工夫を凝らす推理小説はもちろんのこと、19世紀の壮麗な大小説群や難解な思想書から果ては利潤をシビアに追求するビジネス文書にいたるまで、すべて私たちの身体に生来認知科学的に搭載されている同一の母型回路（V字プロセス）から日々陸続と産出されているのである。内的な宇宙にどこまで沈潜しうるか、そして身体に内在する論理をどこまで明快にくみあげ、より立体的に彫り上げるか、そこに文章の巧拙や明快さ、論理性の違いが生じてくることになる。

複数の文章から構成されるテキストは、論理回路と、それに添って諸要素を配列する編集作業との二つによってその大部分が創られている。そのうちのひとつ編集手法は、冒頭の段取り力に関する箇所でものべたように、私たちが人間である限りは日常的に色々な場面で、それこそ自在に駆使しているものである。その編集が秘かに依拠している論理回路が、私たち人間にとって身体的になじみ深い「off/on」による明暗、死と生、転落と蘇りを原基的構成要素とする「V字プロセス」軌道（）なのである。私たちは、考察すべき諸対象をその軌道上に編集的にあれこれ配置することによって、思想や心情を探求、表出し、事実の検証を遂行していく。太古以来の物語と思考のマトリックス（母型回路）であるこの「V字プロセス」を詩法としてテキストの構成図式に特化したものが、東洋の起承転結である。マトリックスは、太古から古代や中世へ、近代から現代へと生き続け、東洋西洋のいずれにおいても秘かにそして不気味に機能し続けているのである。

その意味で、文章の論理的構成力を意識しそれを表出することは、ひとつには暗黙知に満ちた私たち自身の謎めく身体の内的宇宙が有する神秘的な潜勢力に踏みいることであるとともに、太古から現代にいたるまで人類が蓄積してきた膨大な知的遺産の沃野へはいる荘厳な入口をくぐり抜けることでもあるのである。

11. 思考マシーン瞥見

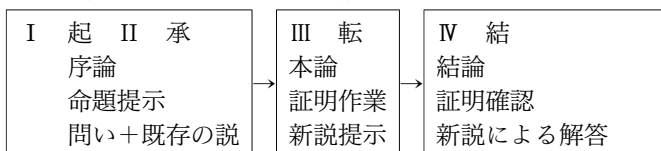
東洋に伝統的な起承転結という四分節構成法は、「V字プロセス」という人類にとってより原基的で決定的な物語・思考論理回路の、テキストを産出しようとする時の鋳型として変奏されたものである。起承転結という名称は古代中国の漢詩（唐詩）の五言絶句の構成に起源を有するものであったが、起承転結の採用する四段構成は実際には柔軟なものであり、世阿弥由来の序破急や近代西洋音楽の協奏曲の三楽章に変形されるかと思えば、ソナタ形式やグスタフ・フライタークの演劇論（『戯曲の技法』1863）のような五段構成をとることも、また現代チェコの（亡命）作家クンデラがその小説において偏愛する七段構成に変形されることもある（『生は彼方に』西永良成訳、ハヤカワ epi 文庫、早川書房、2001。『可笑しい愛』西永良成訳、集英社文庫、集英社、2003等）。交響曲の父ヨーゼフ・ハイドンが18世紀末長い実験の後に完成させたソナタ形式を軸にした弦楽四重奏や交響曲が、本来そうなる必要はなかったにもかかわらず最終的にはなぜか四楽章構成を定型として確立されたのも、ハイドンという天才が起承転結と同じ母型回路（「V字プロセス」）への卓越した神話的感性和形式感覚を有していたからである。だが、それらのいずれであれ、中心点に反転する折り目があり、左右対称のシンメトリーが構築されうることが要諦であり、交響曲なら三楽章の最初に、序破急や協奏曲ならば破や緩徐楽章に扇の要となる転換点が配置されている。

三段構成「序破急」の破とはつまり転のことで、「序破急」も実は四段構成「起承転結」の変形にすぎない。交響曲が第一、第二楽章（下降・死）／第三、第四楽章（上昇・新生）となるV字形状のプロセスを走る四楽章構成をとり、協奏曲が明・暗・明の下降（明・暗）と上昇（暗・明）による三楽章構成となっているのと同類である。それらの対応図を下に付記する。

序破急図式

1 序	問いかけ、既存の説	序論
2 破	新解答への手がかりと展開	本論
3 急	解答・結論	結論

三段階構成「序破急」＝四段階構成「起承転結」対応図



本論考は、まず最初に新聞に掲載されたさまざまな分野のテキストを構成の観点から分析し、起承転結と相同的な四分節構成法をそこから析出した。だが、その起承転結は、西洋においては論外であり、現代日本においても非論理的な構成として忌避され、今やまったく凋落の相にあるものである。特にアカデミズムでの科学論文とビジネス文書においてその無能性の刻印は顕著なものがある。しかしながら、そうしたアカデミズムでの論文構成法やビジネス文書の構成を検証してみると、それらも実際には起承転結の四分節構成法に還元されうることが判明する。但し、従来唱道されていた起承転結ではなく、転にあたるⅢの部分を実行研究を反覆させる新視点の展開というその革命性を軸にした新〈起承転結〉としてではある。

本論は、旧来の誤った理解になる起承転結を、ⅠⅡⅢⅣと記号的に読み替えられた新〈起承転結〉へと一新し、Ⅲ転を論理的な新展開ないしは徹底化と理解し、Ⅰ問いがそのⅢに基づいてⅣ答えられるQ & Aの問答形式として起動させる。その上で、本論考は、人類に普遍的な死と復活の「V字プロセス」の、論構成における表出形態であるそうした新〈起承転結〉が、私たちの世界の表現活動に遍在する可能性、及びその構成と回路が普遍的に妥当する強い汎用性を秘めている可能性を、多様なテキストに基づいて確認した。

とはいえ、その新〈起承転結〉原理、ないしはその大元である下降と上昇、死と復活の「V字プロセス」が、古今東西の著名な傑作群において本当に機能しているのか、もしも機能しているとしたらどのようなのか、といった大がかりな検証と証明作業は、筆者の他の論考においてすでに継続的に、そしてまた多様なジャンルの作品において遂行されてきたこともあり、本論考の狭い枠内では扱うことは残念ながら断念せざるをえなかった。例えば、古代以来西洋の基軸となったプラトンの傑作対話編『饗宴』、あるいはそれとはまったく異なる東洋の日本の江戸時代における芭蕉による俳句紀行文『奥の細道』等の古今東西の傑作群を、この新〈起承転結〉原理で読み直してみるならば、これまでの読解がいかに根幹をはずしたあやういものであったか、そしてまた、それらの傑作の各部がどれほど深く新〈起承転結〉原理に基づいて意識的に書かれていたか、という驚天動地の事実が明らかになるが、そうした古典の解明はまた

後の機会に譲りたい。

それでも、新原理の威力と汎用性を、高度な思考の結実や人類の傑作群において実地に提示してみることは、限定的なものであれやはり必要な作業かもしれない。高度な思考が、高度な思考を展開する著作が、どのようにその原理に律せられているのか、そのメカニズムを瞥見することによって私たちは、その原母型であるV字プロセスに物語を導く原基的回路が見られたのと同様に、新〈起承転結〉が私たちの思考を前へ前へと駆動させていく思考の回路やマシンとして威力を発揮する光景をまのあたりにすることができるからである。

その簡明な例として、ここでは三例のみをとりあげる。

そのひとつは、経済学者岩井克人氏への資本主義の原理に関するインタビュー記事で、ここでは思考が論理的に、ツリー状に分岐しつつ進行していく様子をリアルに実見することができる。二つ目の例は、岩井克人氏の思考が代表している近代的ツリー状の論理構成は現代において失効した、と診断する東浩紀氏の著作『動物化するポストモダン』である。三つ目は、前者の隙間なき論理への要請と、それが失効して不連続化すると難じる後者の診断という相反する状況を、“星座”なる表現によって神業のように等号化してみせるベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』冒頭からの一節である。

最初に取りあげる記事、岩井克人氏が朝日新聞社の記者に答えたインタビューは、それをまとめた記者たちの志向と力量なのか、はたまた岩井氏の思考がたどる厳しさなのかは不明だが、新〈起承転結〉思考が、細部にいたるまで容赦なく駆動し、騎虎の勢いさながらに〔Ⅰ提議、Ⅱ詳解、Ⅲ反措定、Ⅳ結論〕なる自動思考マシンに駆り立てられ、思考が先へ先へと推し進められていくものとなっている。思考がⅠⅡⅢⅣ、1234、1)2)3)4)と分岐しながら力強く前進していくすぐれた運動を、私たちはそこにおいてまのあたりにすることができるのである。ちなみに、ⅠⅡや1、2、1)2)等の分節、下線、網掛け、括弧内の補足等は、これまでの諸事例での分析同様すべて高橋による。また、記号へは、引用では行変えされているものの原文では行変えされていない部分を指す。

事例⑩ 岩井克人さんと考える 資本主義と会社

2006年7月25日 朝日新聞

漂流する風景の中で

(リード部分)

小泉内閣が推し進めてきた政策は「市場原理主義」と呼ばれ、「格差社会を容認する」として批判を招いた。そんな中で起きたライブドア事件や村上ファンド事件は「会社は誰のものか」という議論を巻き起こした。これからの会社は、はたしてどうあるべきなのか――。岩井克人・東京大教授（経済理論）は「過去のどの時代よりも人間の独創性が重要

になる」と説くとともに、「中核部分で経営者に倫理的であることを求める」資本主義の“逆説”の重要性を指摘する。

I

- 1 日本の50年代から60年代にかけての高度成長期は「産業資本主義の時代」だった。農村には人が余り、都会に集団就職した若者を安い賃金で雇うことができたから、工場を建てて、機械で大量生産しさえすれば利益が得られた時代である。
- 2 ライブドアの堀江貴文氏は「お金で買えないモノはない」と言った。確かに機械や工場はモノだから、お金さえ出せば買える。つまり、この時代は「お金が支配する時代」であったのだ。
- 3 ところが、先進資本主義国ではいま、産業資本主義の時代が終わりつつある。農村も人手不足になり、人件費が上がって、機械制工場を持っているだけでは利益を確保できなくなったからだ。
- 4 資本主義の根本原理は単純だ。収入から費用を差し引いたものが利益となる。したがって、工場を持つだけでは利益が出なくなると、収入と費用の間の「違い」を意識的に作りださなければならなくなる。他社よりも早く新技術を導入して費用を下げるか、他社とは異なった製品を開発して収入を上げなければ、生き残れない。私が「ポスト産業資本主義の時代」と呼ぶ時代の誕生だ。日本では90年代の「失われた10年」がその移行期にあたる。

経済の中心は人間へ移行

II

- 1 利益を生み出す「違い」は、もちろん人間の頭脳しか作り出せない。だが、お金で買えないモノはないが、人間はお金では買えない。人間はモノではなく、意思も感情も持つ。いくら札束を積んでも、人間の頭脳の中の知識や能力をすべて支配することはできない。経済の中心が、明らかにお金から人間へと移っているのだ。
- 2 現代は「お金が支配している」時代だとよく言われる。だが、それは原因と結果を取り違えている。産業資本主義の時代には、お金を機械制工場に投資すれば確実に利益が得られた。ところが、利益の源泉が、お金で買えない人間の頭脳に移ったことによって、お金は確実な投資先を失ってしまった。だからこそ、少しでも良い利ぎやを求めて、お金が世界中を動き始めた。それが世に言う「金融革命」であり、「グローバリゼーション」なのである。
- 3 これからの会社では、過去のどの時代よりも人間の独創性が重要となるだろう。「違い」を意識的に作り出さなければならないからだ。だが、優秀な個人だけしか必要でなくな

るのかというと、そうではない。新しい技術も新しい製品も、他社にすぐにまねされてしまうためだ。いま商品のライフサイクルはどんどん縮まっている。違いを連続して生み出せるようなチームをいかに作り、そのチームを組織としてどう支えていけるかが、会社の最重要課題となる。

- 4 「失われた10年」を経て、日本で「成功した」といわれている会社は、日本的経営の泥臭さを切り捨てなかったトヨタやキャノンであり、逆に米国流の会社統治を採り入れたソニーが一時低迷したことは教訓的だ。エレクトロニクス産業が不振だったこともあり単純には比較はしにくいだが、トヨタやキャノンは、違いを連続的に生み出すための組織作りに地道に取り組んでいたことが大きいだろう。

経営者の倫理性が不可欠

III

- 1 資本主義の中核をなす会社とは、たんなる企業ではなく、法律の上で人として扱われる法人企業のことだ。本来人間ではない法人が、現実の経済の中で人間として振る舞うためには、それを人間のように動かす生身の人間が必要となる。それが会社の経営者だ。例えば会社の契約は、実際には経営者が会社を代表して結ぶ。だから、経営者と会社との関係は契約にはなりえない。経営者が自分で自分と契約を結ぶことになるからだ。
- 2 経営者と会社との関係は、あえて名前をつけるとすれば「信頼関係」である。信頼とは、医者や患者の関係のように、他の人から信頼によって仕事を任されることを意味する。信頼関係が成立するには、そこに「倫理性」が要求される。会社の経営者は「会社をきちんと活動させる」という目的のために、自らの利益の追求を抑えて行動する義務を負うことになるからだ。会社法では、この義務のことを「忠実義務」と呼ぶ。この義務に違反すると、経営者は背任罪で逮捕されてしまうのだ。
- 3 アダム・スミスが1776年に出版した「国富論」が描いた資本主義とは、自己利益の追求が、結果的に公共の利益になる社会であった。これは、現代の主流派経済学の基本的な思想でもある。

だがその資本主義の中核に、経営者の倫理的行動が要請されているという大いなる「逆説」が見出されたのである。スミスが排除したはずの倫理性が必然的に求められている。この逆説を理解しなければ、ある日資本主義自体の息の根が止まる可能性が出てくる。

- 4 例えば上場会社のことを、英語で「パブリック・コーポレーション」という。直訳すると、公共的公司だ。それは、株式市場が本来的に公共性を持っていることを意味している。上場するということは、すべての市民から資金を調達することが認められたということだ。だからこそ、上場会社は自分の活動に関する情報を、公平に、しかもうそ偽りなく市民に伝える義務を負う。証券取引法がインサイダー取引や粉飾決算を禁じてい

るのは、それが株式市場のこの公共性を損なうからだ。その意味で、株主の権利を強く主張してきた村上ファンドの村上世彰氏が、株式市場の公共性を裏切るインサイダー取引をしていたことは、大変に残念なことだ。

IV

- 1 20世紀の最大の教訓の一つは、社会主義は人間の自由を抑圧するということだった。これに対し、資本主義は、格差や不況、環境破壊や拝金主義など、様々な欠陥や矛盾を抱えてはいるが、それを超えるものは当分、生まれないだろう。
- 2 なぜなら、人間が自由を追求すれば、必然的に資本主義的な活動が生まれてくるからだ。その欠陥ゆえに、資本主義を抑圧することは、そのまま自由を抑圧することになる。好むと好まざるとにかかわらず、我々はこれからも長く資本主義の中で生きていかざるをえない運命にある。
- 3 この資本主義の矛盾を補完するものが倫理性であることは先に述べた。まさにこの倫理性に支えられた社会こそが「市民社会」と呼べるものなのではないか。倫理の基本は、他の人間を自分の利益の手段としてのみ扱ってはいけないということだ。その大原則の上で初めて、対等な人間がそれぞれ利益を求めて、お互いを手段として利用することを認める契約関係が結ばれていく。へ
- 4 そうだとすれば、契約関係を中心に展開されてきた従来の市民社会論とは違った形で市民社会の新しい姿が描けるのではないか。私はそんな仮説に立った研究に取り組み始めている。

(聞き手・伊藤政彦、松本一弥)

このインタビューでの主題は、利潤追求から倫理性への資本主義原理の根本的な読みかえである。その中心主題はⅢに配置され、続くⅣにその倫理性に基づく新市民社会構想が語られる。それゆえ、一般の人々が関心をいだくと思われる現代状況での会社のあり方を論じた部分Ⅱは、それがいかに重要であれ、Ⅲという本命にむけての露払いの機能を帯びるにすぎない。言い方を変えれば、Ⅱで言及されたポスト産業資本主義の到来を根拠づけるものとして、Ⅲの資本主義原理への遡及と原理の読替えが行われているのである。なぜなら、Ⅱの現実認識は、それ自体では自己を根拠づけることができず、その認識を明らかにするために岩井氏はアダム・スミス等における資本主義の起点へと遡及し、そこから資本主義を支えている信頼関係という原理を新しい原石として掘り出してくる。その思考は、次のような起承転結の運動によって推進されていく。

図18 岩井克人・資本主義と会社図式

I 問い ポスト産業資本主義時代とは何か？	
1	
2	
3	産業資本主義の時代終焉
4	
II 背景説明 人間の独創性を生かす組織づくりへ	
1	
2	
3	人間の独創性が重要化
4	
(資本主義とは違うのか？)	
(トコロガア～)	
III 転換点：原理的な根拠付け—資本主義では倫理性こそ必須	
1	
2	
3	資本主義の中核に倫理的行動要請という逆説が内在
4	
IV 答え：未来の資本主義社会とは、倫理的な新市民社会だ	
1	
2	
3	倫理性による市民社会
	1) 矛盾を補完する倫理性
	2) 倫理性社会が市民社会
	3) 倫理の基本とは
	4) その大原則上に契約関係
4	

驚くべきことに、I II III IVのすべてがさらに入れ子的に下位の1234に、それがまた時にさらに下位の1)2)3)4)へと、まるでヘーゲルの論理学的思考のようにツリー状に分岐していく。それゆえ、いずれのIII、3、3)も、そこにおける論の転換点を形成する配置となる。例えば、IVの部分は1234に分節されるが、その要となる3がまた新たな1)2)3)4)に分節され、その3)にすべての基本となる倫理の基本が示される。そして、それを基にしてIの問いに対するIV答え(=Iの是認と深化)がなされ、思考はさらにIV4、4)を出口として、より広い未来の文脈へと開放されていくという具合である。そのIVの部分をもう一度、但し、さらに分節をくわえて引用してみよう。

IV

- 1 20世紀の最大の教訓の一つは、社会主義は人間の自由を抑圧するということだった。

これに対し、資本主義は、格差や不況、環境破壊や拝金主義など、様々な欠陥や矛盾を抱えてはいるが、それを超えるものは当分、生まれないだろう。

2 なぜなら、人間が自由を追求すれば、必然的に資本主義的な活動が生まれてくるからだ。その欠陥ゆえに、資本主義を抑圧することは、そのまま自由を抑圧することになる。好むと好まざるとにかかわらず、我々はこれからも長く資本主義の中で生きていかざるをえない運命にある。

3 この資本主義の矛盾を補完するものが倫理性であることは先に述べた。まさにこの倫理性に支えられた社会こそが「市民社会」と呼べるものなのではないか。倫理の基本は、他の人間を自分の利益の手段としてのみ扱ってはいけないということだ。その大原則の上で初めて、対等な人間がそれぞれ利益を求めて、お互いを手段として利用することを認める契約関係が結ばれていく。へ

4 そうだとすれば、契約関係を中心に展開されてきた従来の市民社会論とは違った形で市民社会の新しい姿が描けるのではないか。私はそんな仮説に立った研究に取り組み始めている。

さらに要となるその中のⅣの3にズームしてみると、そこにも1)2)3)4)の四分節構成配分が現れてくるのである。

3

- 1) この資本主義の矛盾を補完するものが倫理性であることは先に述べた。
- 2) まさにこの倫理性に支えられた社会こそが「市民社会」と呼べるものなのではないか。
- 3) 倫理の基本は、他の人間を自分の利益の手段としてのみ扱ってはいけないということだ。
- 4) その大原則の上で初めて、対等な人間がそれぞれ利益を求めて、お互いを手段として利用することを認める契約関係が結ばれていく。へ

思考を可能にし思考を推進する母型回路恐るべし、というところである。

12. 物語と思考の死

ところが、このようにツリー状に論を組み立て駆動する近代的な論理の在り方は、現代における大きな物語の消失を論じる東浩紀氏の意欲的な著作『動物化するポストモダン』（講談社現代新書1575、講談社、2001）においては、ほとんど全面的に否定される。

I 近代のツリー型世界では、表層と深層、小さな物語と大きな物語の両者は相似関係で繋がっていた。したがって、人々は前者から後者へと遡行することができた。へ

II これを「見えるもの」と「見えないもの」の比喻で捉えれば、近代では、まず小さな見えるものがあり、その背後に大きな見えないものがあり、前者から後者へと遡って、見えないものをつぎつぎと見えるものに変えていくことが世界理解のモデルだったと言うことができる。近代的な超越性とは、何よりもまず視覚的な運動だったのだ。

III しかしポストモダンのデータベース型世界では、その両者はもはや直接に繋がることはない。小さな物語は大きな非物語を部分的に読み込むことで生まれるが、同じ非物語からはまた別の小さな物語が無数に生まれうるのであり、そのいずれが優位かを決定する審級はない。つまり小さな物語から大きな非物語へと遡ることはできない。へ

IV したがってここでは、まず目の前に小さな見えるものがあり、そしてそこから見えないものに遡ろうとしたとしても、それは見えた瞬間にただちに小さな物語へと変わってしまい、それに失望してふたたび見えないものへと向かう、という際限のない横滑りの運動が生じることになる。

(p.160。但し、図の指示は削除した。また下線、I II III IVの付記、改行・空行挿入による分節、網掛け、原文では行変えがなされていないことを示す記号へは高橋による。)

東氏によれば、このような「過視的なポストモダンの超越性」(p.160)から帰結するのは、「論理的な階層が異なるものを等価に並べ共存させてしまう「超平面的」な感覚」(p.167)と、連続した記憶の切断された多重人格性だけである。オリジナルやコピーのいずれでもないその中間形態である「シミュラクルの水準で生じる小さな物語への欲求とデータベースの水準で生じる大きな非物語への欲望のあいだのこの乖離的な共存こそ、ポストモダンに生きる主体を一般に特徴づける構造だ」(p.127)とするのである。この時人は、人間を人間たらしめる他者への欲望、すなわち「間主観的な欲望」(p.127)をもはや有しえないが、「欲求の満足に対してはきわ

めて敏感な」(p.132)動物と化す。現代は、つまり超平面化とともにその動物化の段階に入ってしまったというのである。そこからの出口はもはやない。

だが、はたしてそれほど単純なものなのだろうか。そのような関心のもと、大きな物語の成立不能を説く東氏自身の、その著作そのものの目次によって、著作の構成を覗いてみよう（切れ目を示す空行の挿入は高橋による）。

事例⑨ 東浩紀『動物化するポストモダン』目次

(講談社現代新書1575、講談社、2001)

目 次

第一章 オタクたちの疑似日本

- 1 オタク系文化とは何か
- 2 オタクたちの疑似日本

第二章 データベース的動物

- 1 オタクとポストモダン
- 2 物語消費
- 3 大きな非物語
- 4 萌え要素
- 5 データベース消費
- 6 シミュラークルとデータベース

7 スノビズムと虚構の時代

8 解離的な人間

9 動物の時代

第三章 超平面性と多重人格

- 1 超平面性と過視性
- 2 多重人格

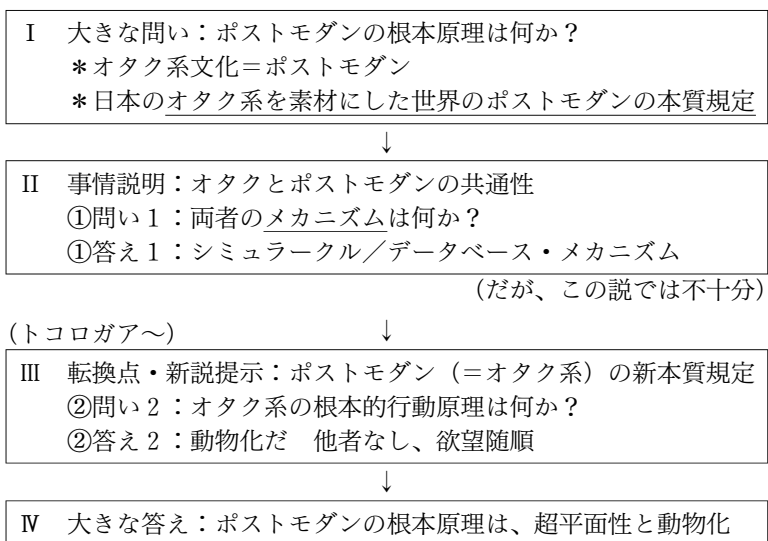
この著作は、上記の目次から判ずる限り第一章～第三章の三部構成に見える。しかしながら、第二章は、実際には二つの問いと答えから構成されている。第一の問いは、「ポストモダンでシミュラークルを生み出すのは何ものなのか？」(p.46)で、それには、オタクたちの萌えを成立させるシミュラークル（オリジナルとコピーのいずれでもないその中間形態）とデータベースの二重構造として解答される（pp.90-91）。けれども、その第一の問答Q & A（第二章1-6）は、

そこから帰結する世界光景を明らかにするまでにはいかない。それゆえ、その不十分さ（－）を反転させ、その解答から帰結する新しい思想状況を明確にする、大きく深化させるのが（＋）、それに続く第二の問い「ポストモダンでは超越性の観念が凋落するとして、ではそこで人間性はどうになってしまうのか」（p.46、95）である。

この第一の問いを承けた第二の問答（第二章7-9）において、探求のレベルは上げられ、いわばより抽象化されていく。その第二の問いへの答えが、人間性の無意味化、他者を必要とする間主観的な欲望をすてた、意味の動物性への還元（p.140）という第二の解答である。この「全面的なポストモダン」（p.131）化を論じる部分がこの著作のメインをなし、起承転結の図式でいえばⅢ転換点・新視点による主題の深化部分にあたっている。つまりこの著作は、実は見かけどおりの三部構成なのではなく、第二章の後半である7、8、9節を、起承転結のⅢ転すなわち第三章（転換点）としてさらに分節する四分節構成を採用しているのである。著作のタイトルが第二章の「データベース的動物」ではなく、第二章後半で論じられる『動物化するポストモダン』とされていた事実も、そこにこそ著者の本意があったことを如実に示すものである。つまりここでもⅢ転に真意がある。

これまでの事例同様、ここでもその著作の構成を図式にしてみよう。

図19 『動物化するポストモダン』構成図式



問いであるIはいうまでもなく、そのIを承けたIIにおいても、依然解答は不能のまま袋小路にあり、そこに解明への光は存在しない(↘)。IIIがその事実把握を反転ないしはより深化させることにおいて初めて認識の光が獲得され、その曙光の輝きを広げるIV答えにおいて、明確な認識(光の領域)が確定され、思考軌道は光の遍在する大いなる真昼の領域へと浮上する(↗)。

こうした下降（ㇿ）と上昇（ㇾ）の対称的構造、すなわち死と復活の「V字プロセス」（ㇿㇾ）が、著者自身の意識とは別に、この著作における思考を秘かに導いている。大きな物語の消失を論じているはずのこの著作においても、太古来の新〈起承転結〉の物語構成が秘かに、しかも厳格に維持されるという、まことに奇妙な現象が生じているのである。

ここにおいても、Iの問いはIV答えに等しく、Iの詳解としてIIの事情説明が続き、その不十分さを反転する新展開として、III新説となる動物化云々がメインとして置かれ、そのIIIこそが書物のタイトルとなる。I IIは問い／III IVは答えとして対称的に対峙し、IIIとIVは連続する。大きな物語の消失や非物語の支配を私たちに果敢に突きつける思考でさえも、それを語らんとするや、このように〈起承転結〉という神話的な由来をもつ大きな物語によって依然語られているのである。

20世紀演劇を代表するひとりであるスイスの劇作家デュレンマットは、戯曲『再洗礼派』（Arche、1967）に添えた演劇論の中で現代演劇の二極を個の不条理性（ベケット）と社会関係力学（プレヒト）に設定し、その異質な流れを綜合したものとしてグロテスク喜劇を構想したが、その二極は、より一般的なものとしてはカフカとプレヒトとして読み替えた方がよりアクチュアルである。なぜならば、その二極は、カフカが開いたパンドラの箱すなわち流砂のごとき世界と存在の無限解体状況をこそ前提として、そののちにプレヒトが叙事的演劇と称したフィクション・想像力と理知とによる人間的な虚構的亜空間の形成という、人間的なあまりに人間的な挑戦がくる創作発生の順序を、はっきりと示すものとなるからである。そこにおいて非物語は、物語の解体として物語の後に来るものではなく、物語不能のカオスとして物語発生の前にあり、むしろ物語の発生の前提にして、その唯一の根拠をなすものであった。

どこまでもずれていくカフカ自身の語りと作中人物たちの空しい営為は、従来の物語の連続性と体系志向性を解体させ、そこからは、現代私たちがまのあたりにしつつある大きな物語の解体、デジタルによるデータベース化や平準化が加速させた際限なき断片化現象が帰結する。しかしながら、語りの不可能性を勧請したかにみえるその当のカフカ自身の創作軌道をよく見てみると、何と、人類太古の大きな物語（「V字プロセス」高橋）がその基底にあり、その原基的な母型回路軌道にこそ母のように包まれかつ強く支えられ、それを秘かに、そして忠実にたどることによって、表層における物語の解体を峻厳に遂行・加速させていくことができた、驚くべき裏事情が露呈する（平成4年度北海道大学言語文化部公開講座『都市と文学』第7回講義高橋吉文「迷宮都市プラハの幻視者カフカ」1992年8月27日、北海道大学、配布資料）。

意味連関を形成しないデータベースにおける断片の膨大な流砂の蓄積と、物語による意味連関の形成という、カフカとプレヒトなる二極として予告されたこの二つの軸は、さらに他者間の結合を忌避する無限変態（Metamorphosis）と、異物同士を巧みに積極的に、あるいはいかかわしく重ねあわせては次々と繋いで体系を築き上げていく隠喩（Metapher）という、より根源的な二項対立に置き換えることもできる。断片のみがひしめくカオスにじかに直接するカフ

カから、その解体一元に雄々しくあらがう形でブレヒトの明るい虚構空間舞台が起動し、そこからはやがて、社会秩序を可能ならしめるアポロ的なイデオロギー（共同幻想）が発動するからである。最初に大きな非物語（データベース、無限変態、無限流砂）ありき、なのである。

では、どこからその〈非物語〉の浸食にあらがいうる非〈非物語〉なる新しい物語は起動しうるのか。現代ドイツの思想家ハンス・ブルーメンベルク（1920－1996）は、1979年に刊行された大著『神話づくり』において、その起点を人類のサバイバルの必然性に見た（Hans Blumenberg: Arbeit am Mythos, Suhrkamp, 1996, S. 10f.）。大自然の脅威に対抗するために、何の武器をもたない人類は、精神を繭のように包みこむ物語というバリア（皮膜・緩衝壁）を切実に求め、太古に起きた「文化のビッグバン」においてついにその最強の武器を入手する¹⁰。その物語のための原基的素材は、人類の意識の基底に認知科学的に配備され、暗黒宇宙の中に浮遊する恒星群のように内的宇宙の闇に不気味に浮遊する、ブルーメンベルクいうところの一群の“絶対的隠喩 absolute Metapher”、但し正確には基底隠喩 Grundmetapher である（Hans Blumenberg: Paradigmen zu einer Metaphorologie, suhrkamp taschenbuch wissenschaft, 1998, S.23、初出は1960）。大自然というカオスの圧倒的な解体力にカフカ同様絶望していたブルーメンベルクは、しかし教授職を退職したその最晩年、闇宇宙を遊泳しゆくミルトンのサタンのように、基底隠喩の配列による物語の再構築と、それによる希望の光の把握を求めて、基底隠喩という恒星が葬めく闇宇宙の歷程に挑戦する。人にとって最も原基的な基底隠喩群を「V字プロセス」（＝新〈起承転結〉）の軌道上に意識的に配列することによって、21世紀における新しい神話と物語の創出のための基盤づくりを、ブルーメンベルクは企図したのである（高橋吉文「隠喩論Ⅳ：ブルーメンベルクの基底隠喩配列」、高橋吉文編『隠喩とメタ思考』日本独文学会研究叢書037、日本独文学会、2005、pp.49-70）。

地球の大破局の時を前にした現代の人類にとって、物語の消失に呪われ明るく多重に分裂して生きる現代日本のオタクたちやそれが先端的に象徴しているポストモダンが、はたしてどれほどの意味をもちうるものか、はなはだ疑問でさえあるが、大きな神話的物語の隠れた形での持続は、ともあれ、20世紀初頭のカフカやベンヤミンにおいても、20世紀後半のブルーメンベルクや21世紀初頭のメディア思想家ノルベルト・ボルツ（『世界コミュニケーション』村上淳一訳、東京大学出版会、2002）等においても、あるいはリオータル等の物語の消失を継承しデジタルの昂進拡大が引き起こす物語形成への深い懐疑を提示する現代日本の東氏においても、依然ゆらぐことはないのである。

13. 死して、成れ！

新〈起承転結〉母型回路の汎用性を検証する本論における作業の最後として、新〈起承転結〉が思考を推進する思考マシンとして作動している異なる例を二例簡単に取りあげ、その隠さ

れたからくりを瞥見してみた。一例は隙間なき論理の追求を遂行し、もう一例はその意味連関の失効を唱道するものであった。これは、意味連関の消失である変態と、意味連関の形成を促進する隠喩との二項対立として先ほど示唆した相反する二極の、いわばバリエーションとなっていたものでもある。

「新〈起承転結〉考 I」の最後に例示するものは、岩井氏のインタビュー記事に確認されたツリー状の思考と、東氏の著作が主張するツリー状の思考の解体という相反する二極の結合を、アクロバチックに試みようとしたベンヤミンの思索からの一片である。ベンヤミンにおいて真理や理念は認識されえない。アイデア天界に君臨する理念はそも不可知であり、それを明らかにしようとする諸学問の体系間は、不連続性すなわち首尾一貫性の不能に呪われている。真理を把握しうる隙間なき体系的論理は、この地上においては初めから成立しないのである。ところが、その決定的不能状況が、新〈起承転結〉という神話的な大きな物語にして思考マシーンでもあるものが導く反転、すなわち地上生存の破滅によるコスモス（調和した宇宙）の逆説的啓示という、ゲーテばりの「死して、成れ！」によって逆転され、かつ祝福されることになる。本論の最後の最後に、アウラの消失や断片性の憑依（『パサージュ論』）と格闘した20世紀前半のドイツの思想家ベンヤミンが1925年に完成させた難解な『ドイツ悲劇の根源』（ちくま学芸文庫、1999）から、その逆転がなされた名高い一節を引用してみよう。とはいいい条、それと同時期に書かれている博士論文があまりの難解さゆえに審査をさえ拒否されたという伝説の名に恥じず、この論考、特にその方法論を展開する冒頭近くに登場する次なるテキスト部分もまた、その I 導入部分からして矛盾に満ち、ほとんどちんぷんかんぷんといってもよいかもしれない。

事例② ヴァルター・ベンヤミン『ドイツ悲劇の根源 上』

（浅井健二郎訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房、1999、pp.29-31）

認識批判的序章 から

（行替えや小見だしは原文にはなく、訳者浅井氏によるが、適切な区切りゆえ踏襲する。

下線、網掛け、強調、I II III IV、1234等の数字、行開け等は高橋による。¹¹⁾）

概念における分割と分散

I 真理が統一かつ唯一として現れ出る（みづからを叙述する）ためには、学問の隙間なき演繹連関が必要だ、というわけでは決してない。ところが、ほかならぬこの隙間のなさこそ、体系論理が真理の思考に関わろうとする際の、唯一の形式なのである。そのような体系的完結性は、たんなる認識や認識連関のなかに真理を確認しようとする他のすべての叙述同様、真理に関係しはしないのだ。

II 学問的認識の理論が学問諸分野のあとをしつこく付け回せば付け回すほど、それだけ

ますます見紛いようもなく、それら諸分野のあいだに方法上の一貫した連関のないことが明らかになってくる。個々の学問分野ごとに新たな、他からの演繹不可能な前提が導入され、どの分野においても、その前方にある分野の諸問題が当分野では解決されたものと見なせることが強調されながら、また同じように強い調子で、他の分野との関連においてはそれらの問題の解決に決着をつけることは不可能である、と主張されたりするのだ(エミール・メイェールソン『諸学問における判断について』一九二一年)。この一貫した連関のなさを偶然のものと思なすのは、個々の学問分野から出発せずに、自身の研究における哲学的要請などといった勝手な臆測から出発するあの学問理論の、非哲学的な特徴のひとつである。

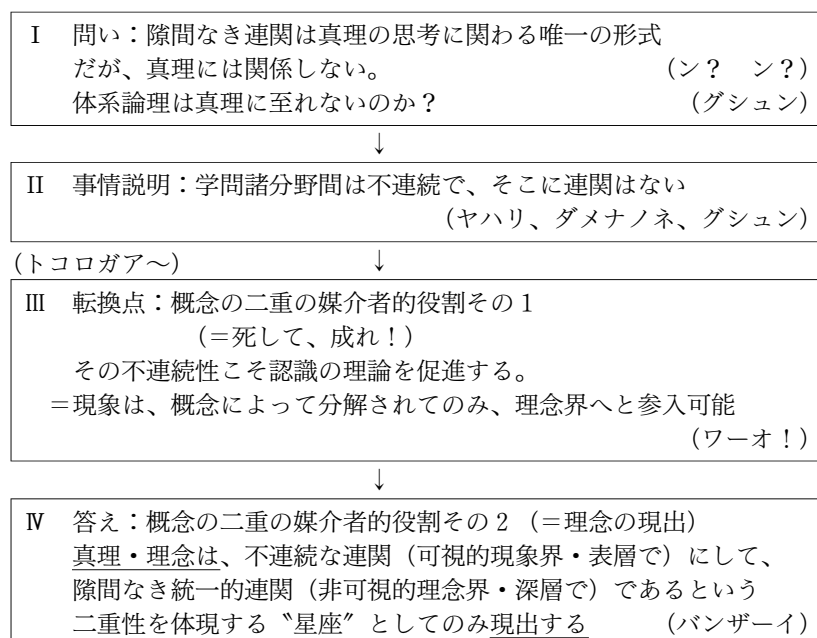
Ⅲ しかしながら、学問的方法のこの不連続性は、認識の低次の段階、一時的な段階を規定するものではまったくないのであって、もしそこに、諸認識の百科全書的包括のうちに真理を一真理はあくまで飛躍のない統一であり続ける一捉えようという思い上がりさえ介在していなかったならば、この不連続性はむしろ、認識の理論を積極的に促進しうるはずのものなのだ。体系というものは、その根本的輪郭において、理念世界そのものの構造によって照らし出されている場合にのみ、妥当性を有する。もろもろの体系だけでなく哲学の術語こそを規定する、大枠での分類—最も普遍的なものは、論理学、倫理学、および美学という分類である—は、実際また、専門分野の名としてではなく、理念世界の不連続な構造を伝える遺産として、みずからの意^{ペドイトウング}味を担っているのである。—もろもろの現象は、しかし、^{シヤイン}仮象が混じりこんでいる粗雑で^{エムビーリツシュ}経験的な状態のまま丸ごと理念界に入ってゆくのではなく、その^{エレメント}諸構成要素に分解されたかたちでのみ、救出されて、理念界に参入する。諸現象は、その偽りの統一を放棄し、分割されて、真理の真正なる統一に参与するのだ。この分割において、もろもろの現象は、諸概念の支配下にある。もろもろの事物(Dinge〔もろもろの事象〕)を解体して構成要素に分けるものが、概念にほかならない。概念における弁別が、いたずらに破壊的なこうさい区分けではないかとの一切の嫌疑を超越しうるのは、ただ、この弁別が現象を救い出して諸理念のうちに守ることを、すなわちプラトンの言う「現象の救出」(*τὰ φαινόμενα σώζειν*)を、めざす場合だけである。概念は、その媒介者的役割によって、現象を理念の存在に^{ザイン}参与させる。

Ⅳ そしてまさにこの媒介^{フエアミットラー}者的役割こそが、概念を、理念の叙述という、哲学のいまひとつの同じく根源的な課題を果たすのに、有用ならしめるのだ。〔概念のこの働きのなかで、〕理念による現象の救出が遂行されると同時に、^{エムビリー}経験を手段とする^{ミツテル}理念の叙述が遂行される。というのも、理念は、それ自身においてではなく、ただただ、事物的な諸構成要素を概念により分類しつつ関連づけることを通してのみ、現われ出る (みずからを叙述する)

からである。しかも理念がそのように現われ出るのは、それらの事物的な構成要素の星座 (Konfiguration [組み合わせ、構成、(素粒子などの) 配置、布置]) として、である。

このわけのわからぬテキスト部分も、しかしながら、Ⅲへのターニング・ポイント機能をもつ接続詞「しかしながら」をテキストの分岐点として、全体を腑分けしてみると、次のような問答形式が全体図として浮かび上がってくる。

図20 『ドイツ悲劇の根源』星座図式



きわめて難解ゆえ、論の流れをまず概観してみると、Iの問いがII事情説明にそのまま引き継がれ、事態は光のない暗の袋小路へと陥る。だが、「しかしながら」という接続詞とともにⅢへと飛躍し、災いとなる認識体系間の不連続性 (－) がプラスの連続性 (＋) を喚起するものへと読み替えられ、その新視点に基づいてIの問いに対し、真理は可視化しようとする肯定的なIV答えが導きだされる。I IIを支配していた呪い的な状況がⅢとⅣにおいて明へと反転するのである。だが、ベンヤミンの思考は、その反転のⅢにもまた新〈起承転結〉構造をフラクタル図形さながらに装填する。要となるⅢの箇所のみをズームアップしてみると、Ⅲのテキスト部分も1234と分節されており、そこで要となるべき文章もまたやはり、「しかし」という接続詞とともにこれまた転換的を導入する3の位置に配置されているのである。

III

1 しかしながら、学問的方法のこの不連続性は、認識の低次の段階、一時的な段階を規定するものではまったくないのであって、もしそこに、諸認識の百科全書的包括のうちに真理を一真理はあくまで飛躍のない統一であり続ける—捉えようという思い上がりさえ介在していなかったならば、この不連続性はむしろ、認識の理論を積極的に促進しうるはずのものなのだ。

2 体系というものは、その根本的輪郭において、理念世界そのものの構造によって照らし出されている場合にのみ、妥当性を有する。もろもろの体系だけでなく哲学の術語こそを規定する、大枠での分類—最も普遍的なものは、論理学、倫理学、および美学という分類である—は、実際また、専門分野の名としてではなく、理念世界の不連続な構造を伝える遺産として、みずからの意^{ベドイトウング}味を担っているのである。

3

1) もろもろの現象は、しかし、

2) 仮象^{シャイン}が混じりこんでいる粗雑で経験^{エムピーリツシュ}的な状態のまま丸ごと理念界に入ってゆくのではなく、

1) その諸構成要素^{エレメント}に分解されたかたちでのみ、救出されて、理念界に参入する。

3) 諸現象は、その偽りの統一を放棄し、分割されて、真理の真正なる統一に参与するのだ。

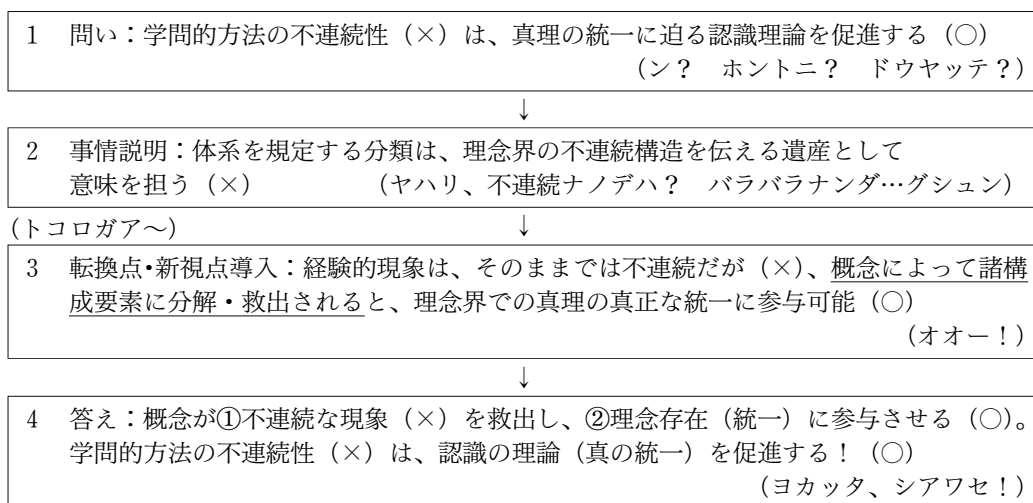
4) この分割において、もろもろの現象は、諸概念の支配下にある。

4 もろもろの事物 (Dinge [もろもろの事象]) を解体して構成要素に分けるものが、概念にほかならない。概念における弁別が、いたずらに破壊的なこうるさい区分けではないかとの一切の嫌疑を超越しうるのは、ただ、この弁別が現象を救い出して諸理念のうちに守ることを、すなわちプラトンの言う「現象の救出」(*τὰ φαινόμενα σώζειν*)^{サイン}を、めざす場合だけである。概念は、その媒介者的役割によって、現象を理念の存在に参与させる。

このIIIの部分は、つまり次のような四分節構成図式として現れる。

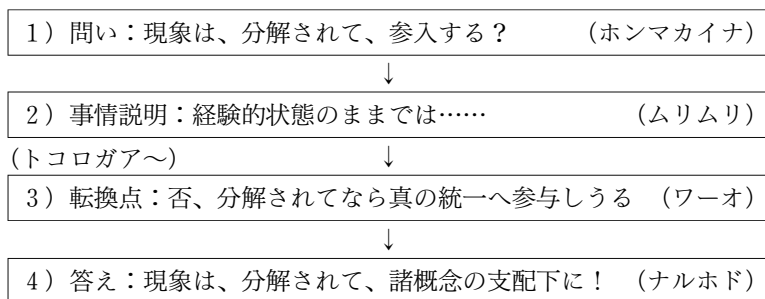
図21 Ⅲ 概念による現象救出図式

×は否定的状態、○は肯定的状態を示す



Ⅲの「3 転換点・新視点導入」において、概念による経験的諸要素の分解（地上存在の破壊＝死）と、それによる現象の救出（アイデアへの変容＝復活）、それが意味する隠された理念による星座的統一光景への布石が打たれるのである。可視的表層では不連続（×）だが、不可視の深層理念領域では連続する統一（○）が成立する。その二重性が、二重視覚によって同時に初めて透視されるのである。括弧の中に心中のつぶやきを補足してわかりやすくしたⅢの3の思考図式は、次のようになる。

図22 Ⅲの3 分解されて参入図式

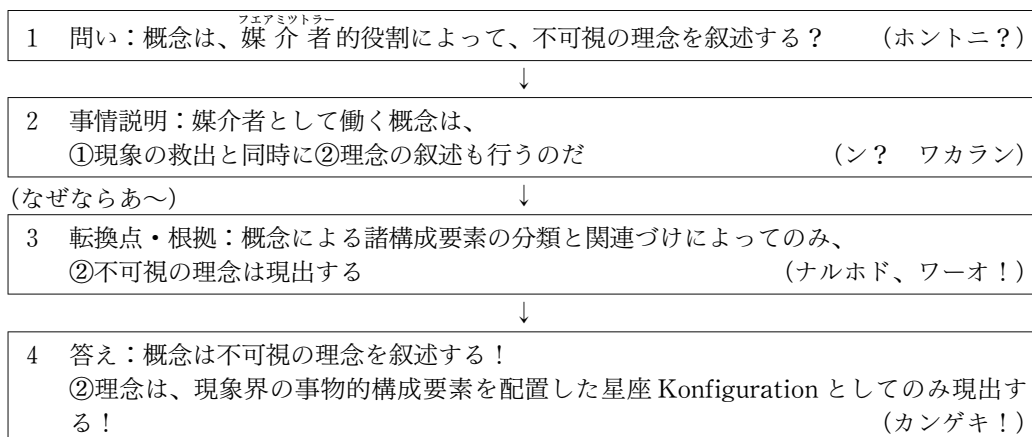


死滅においてこそ甦る。「死して、成れ！」というわけである。それを承けた次に引用するⅣの部分でも事態は同様である。そこにおいても、論を転換・深化させる「というのも」という接続詞によって、全体を原理的に根拠づける真打ち的作業が、その中の3の部分においてあからさまになされているからである。つまり、起承転結の転にこそ、統一への参与（Ⅲの3）や理念の現出（Ⅳの3）は実現したのである。

IV

- 1 そしてまさにこの媒介^{フェアミットラー}者的役割こそが、概念を、理念の叙述という、哲学のいまひとつの同じく根源的な課題を果たすのに、有用ならしめるのだ。
- 2 「概念のこの働きのなかで、」理念による現象の救出が遂行されると同時に、経験^{エムペリー}を手段とする理念の叙述^{ミッテル}が遂行される。
- 3 というのも、理念は、それ自身においてではなく、ただただ、事物的な諸構成要素を概念により分類しつつ関連づけることを通してのみ、現われ出る(みずからを叙述する)からである。
- 4 しかも理念がそのように現われ出るのは、それらの事物的な構成要素の星座 (Konfiguration [組み合わせ、構成、(素粒子などの) 配置、布置])として、である。

図23 IV 概念による理念の叙述図式



概念は、二足の草鞋をはくいわば両義的な蝙蝠^{こうもり}のように、可視的経験的な現象次元と、不可視の理念次元との双方に足を踏み入れている。それゆえ、一方では地にある現象を解体して、天の理念世界へと引き上げて救出し、他方では天にありて地上界には顕現することのありえない不可視の理念を、可視的な諸構成要素を関連づけるモザイクの編集操作によって、かりそめに地上に降ろし顕現させる、という上下二重の働きを同時に行う。夫アンフィトリュオンの姿を借りて地上に顕現した不可視の神ゼウス (H.v. クライストの喜劇『アンフィトリュオン』1807)のように、概念は、地上の素材の特殊なモザイクの組み合わせによって不可視である神々の姿を瞬時のみ造形してみせる神業を見せるのである。理念界における真理のあるべき統一の連関は、しかし、可視的現象界ではひたすら不連続的な連関としてのみ開示かつ可視化される。そこにおいて不連続は連続性に等しいものとしてある。破滅(死して)すなわち秩序(成れ!)、なるそのような矛盾した二重性の悠然たる達成、すなわち「死して、成れ！」(=死と復活のV

字プロセス)を、ベンヤミンは星座、布置 Konstellation、Konfiguration と呼んだのである。

Ⅳの1問いの部分で提示されているのは、概念とは、エロスの神に変容したソクラテスのように(プラトン『饗宴』鈴木照雄訳、『プラトン全集5 饗宴 パイドロス』岩波書店、1974)、経験的現象世界とイデア理念世界とを結ぶ媒介者なのではないのか?という仮説である。だが、そのテーゼは理解を絶している。それに続く2事情説明部分も、少し詳しくにはなったものの、1問いの仮説をただ空しく反復するだけで、2の段階では未だそれを証明する突破口は見出されていない。ところが、次の3転換点・新説にいくと、概念による諸構成要素の分類と関連づけというその実現方法が明示され、理念現出・可視化への決定打が掲げられるのである。概念が、背後の黒子のような演出家として事象を分類し、網の目な事象のネットワークを関連づけ布置することによって、不可視なる理念が奇跡的に開顕される、という方法論と可能性が、ここに忽然として開示されたわけである。その新奇のカード提示を承けて、ベンヤミンによる世にも名高い「事物的な構成要素の星座 Konfiguration」なる美しい答えへ、すなわち概念によって理念が叙述されうるという4における答えへと、このテキスト部分は収斂するのである。

最晩年のゲーテがその詩「至福の憧れ」(1814、『西東詩集』『うたびとの書』)の火に飛びこむ蛾において透視した「死して、成れ!」、その死と復活の極意(V字プロセス)に則り¹²⁾、本来不可視ながら、地上世界の死と破滅をこそ介して瞬時のみ、奇跡的に可視化しえたこの星座こそは、芭蕉が「荒海や佐渡に横たふ天の河」として、荒れ狂うディオニュソスの地上世界の荒海の彼方に、それとは切断されて横たわる、無限の静寂をたたえた天の秩序として望見したあの天の河そのものである。

荒海や / 佐渡に横たふ 天の河
I II (現実・問い) / III (仮想異次元) IV (啓示・答え)

眼前に広がる「荒海や」を厳しい現実のIIリアルな光景とすると、「切れ字」の魔術的效果によってそのIIから切り離され(=死して)、バーチャルなあるべき理想の耀く異世界として(=成れ)、「佐渡に横たふ」と「天の河」がIII及びそこからの帰結であるIVとして幻視される(切れ字に関しては、長谷川權『古池に蛙は飛びこんだか』花神社、2005参照)。世界最短の詩形式俳句は、I IIを合わせた、ないしはIを省略した上5句に、III IVを中7句、下5句として対峙させるこれまたI II III IVからなる起承転結形式である。芭蕉が越後路で詠んだとされるこの名句もまた、IIIでの内的な幻視が、他の諸要素I II IVをつなぎ合わせ、生存はカオスの荒海か?という実存的問い(I II)に、流れは流れでも雄壮にして静謐なる天の河の秩序(コスモス)にありとする壮麗な答え(III IV)が対峙する。ここでもIIIがすべての要素を星座のように布置かつ周回させているのである。その意味では、新〈起承転結〉もまた、謎めくIIIの異界ダンジョ

ン（迷宮）を軸にして、仮そめだが同時に真でもある、不可視かつ不可知ではあるが同時に可視的・可知的でもある星座・配置 ^{コンステラチオン} Konstellation として、私たちの前に繰り返し顕出しているものなのかもしれない。

（原稿受理2008年6月6日、最終採択2009年1月29日）

注

- 1) 本論は、北海道大学国際広報メディア研究科2005年度前期特別演習「研究の〈形〉」（修士課程）の第六回講義となる高橋吉文担当の講義「新〈起承転結〉考」（2005年5月21日）、同2006年度前期特別演習「ヘシオドスか」（2006年7月－8月）、2006年度後期民衆文化論演習「物語る」、2007年度Ⅰ・Ⅱ期特別演習「図式いのち」、2007年度Ⅲ・Ⅳ期民衆文化論演習「論文構成法」、及び国際広報メディア・観光学院2007年度Ⅰ・Ⅱ期「メディア文化論概論」の第三回講義「金のがちょう」はご存じかのお？」（2007年5月10日）、「ジャーナル6号投稿予定院生への論文の書き方基本中の基本講座」（2007年7月26日）を基にして起稿されたものである。
- 2) 大林太良『仮面と神話』小学館、1998、pp.7-8。高橋吉文「隠喩論Ⅱ—身体性ダンジョンからの帰還」、高橋吉文編『隠喩のポテンシャル』国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書39、北海道大学、2000
- 3) レヴィ＝ストロース『神話論理Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』、みすず書房、2006－2007、中沢新一『カイエ・ソバージュⅡ 熊から王へ』講談社選書メチエ、2002。
- 4) 高橋吉文「炎上する鴉外」、『言語文化部紀要』第22号、北海道大学、1992。高橋吉文「ブルーメンベルクにおける基底隠喩配列」、高橋吉文編『隠喩とメタ思考』日本独文学会研究叢書37、日本独文学会、2005。高橋吉文「凝固する魂—装飾性への扉を開く C.D. フリードリヒ」、『大学院国際広報メディア研究科・言語文化部紀要』第51号、北海道大学、2006等。
- 5) Kate L. Turabian, *A Manual for Writers of Term Papers, Theses, and Dissertations*, Sixth Edition, The University of Chicago Press 1996。ケイト・L・トゥラビアン『英語論文の書き方』高橋作太郎訳、研究社出版、1980。
- 6) とともに西洋古典叢書20『修辞学論集』（京都大学学術出版会、2004）所収。
- 7) John D. Ramage, John C. Bean and June Johnson, *Writing Arguments: A Rhetoric with Readings*, Sixth Edition, Pearson Education, 2004, pp. 62-66.
- 8) 本論文は、分析素材として読売新聞（6編）と朝日新聞（8編）の掲載記事を用いている。うち12篇は、量的には短い記事ではあるものの分析目的から全文を引用する方式をとっている。それゆえ、読売、朝日の両紙に寄稿された方々と両新聞社に記事14篇の使用許可を申請し、使用許諾をいただいた。著者の方々、並びに読売新聞社知的財産担当、朝日新聞社知的財産センターのご好意にこの場を借りて感謝申し上げたい。
- 9) The Pepys Ballads, 5 v., edited by W. G. Day, Catalogue of the Pepys Library at Magdalene College, Cambridge D. S. Brewer, 1987.
- 10) 高橋吉文「隠喩論Ⅲ：隠喩と変態—レイコフとブルーメンベルクの隠喩論」、佐藤拓夫編『遍在するメタファー—その原理と展開—』、国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書60、北海道大学、2005、pp. 119-142.
- 11) Walter Benjamin, Ursprung des deutschen Trauerspiels, suhrkamp taschenbuch wissenschaft 225, 1978, S. 15f.
- 12) Johann Wolfgang von Goethe: Werke, Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, Band 2 Gedichte und Epen II, dtv Dünndruck, Deutscher Taschenbuch Verlag, 1981, S. 18f.

Eine neue Theorie über die logische und narrative Vierteilige Konstruktion,
Ki-Shoh-Ten-Ketsu, Teil I

《SUMMARY》

A New Theory on the Logical Four-part Framework of Composition, Part I

Yoshifumi TAKAHASHI

I A text that consists of multiple sentences constructs and creates its meaning through the order and composition of those sentences. In this paper I examine EastAsian rhetorical organization, the four-part framework for composition *Ki-Shoo-Ten-Ketsu* 起承転結, and make clear that it is an essential framework, not only for narrative, but also logic.

II First, I analyze several articles from Japanese newspapers with regard to their composition and the relationships between paragraphs. I demonstrate that the four-part order is a fundamental logical principle. It is composed of: I. a beginning (*Ki*); II. the subsequent progression (*Shoo*); III. change (*Ten*); and IV. the conclusion (*Ketsu*). But, because of a lack of a coherence caused by the introduction of unexpected elements at the third stage (change), recently this ancient Chinese framework has been regarded as an unlogical pattern and does not play an important role in writing in Japan.

III However, if we define a text as a collection of sentences that constitutes a Question-Answer-System, every text should begin with an explicit or implicit question. The question or unsolved problem presented in the first section is explained in detail in the second part II. At this point, the problem has still not been solved, so the linear logic reaches a dead end. It is the third part, III. the change, where changes in the inadequate linear logic show us new ideas and perspectives for finding a solution. That is the reason why we have the introduction of unexpected elements into the normal logical progression in the third part. The *Ten* (change) section is a turning point and has the function of critiquing and overturning inadequate existing research. The revolutionary function of the *Ten* section is the most important and indispensable part of the Question-Answer-System within the text. The final fourth part, IV conclusion (*Ketsu*) depends on the third part and summarizes its results and implications.

The newly reinterpreted model of the ancient four-part-order, *Ki-Shoo-Ten-Ketsu*, therefore, creates the following thinking-matrix: I. Question, II. Explanation of circumstances to III. Turning point and Proposal of new Ideas and IV. Answer and Solution.

While I. and II. belong to the Question-dimension, III. and IV. constitute symmetrically the Answer-dimension. In this new order, III. (*Ten*) leads the final part IV. (*Ketsu*) to an answer to the question posed in I. (*Ki*). In other words, III. (*Ten*) is literally located at the center of the text and it is the other parts I., II. and IV., that serve to provide the context for the *Ten* (Change) part.

IV The logical and revolutionary function of *Ten* (Change) has been overlooked in the past in the Western history of rhetoric and writing theory. But, a clear comprehension of the fundamental matrix for narrative and logical thinking, the four-part-framework *Ki-Shoo-Ten-Ketsu*, will bring about a number of new perspectives and innovations in our cultural texts, both Asian and European.